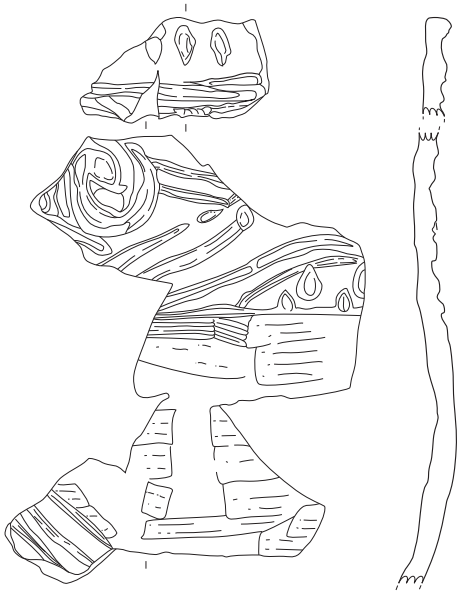
熊本県文化財調査報告第３３５集

The tateishi Site

立 石 遺 跡 群

―九州縦貫自動車道北熊本スマートIC建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告ー



熊本県教育委員会

２０１９

熊本市所在

立 石 遺 跡 群

－九州縦貫自動車道北熊本スマートＩＣ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－

熊本県教育委員会

２０１９

立石遺跡群より弁天山を望む（上）
立石遺跡群調査区 全景（下）

立石遺跡群６区 全景（上）
立石遺跡群 17 区 柱状図⑨ B 断面（下）

立石遺跡群 11 区　全景（上）

立石遺跡群 11 区　土坑 SK002（下）

立石遺跡群　12 区・17 区 全景

縄文土器（上　阿高式土器　右中央　土製耳飾　左・右下　黒色磨研土器土器）

石器（左上　槍　右上　石のやじり　左下　携帯用ナイフ　右　中央　土掘り具　右下　砥石）

縄文土器 (後・晩期)

弥生土器 (後期)

古墳時代から古代の土器

陶磁器 (近世)

序　文

熊本県教育委員会は、九州縦貫自動車道北熊本スマートＩＣ建設事業に伴い、平成２９年度に事業地の一部について立石遺跡群の発掘調査を実施しました。

隣接する九州縦貫自動車道では、建設の際に縄文時代後・晩期の遺跡が確認されており、今回の調査においても同時期の遺構・遺物の広がりを確認することができました。

さらに今回の発掘調査では、弥生時代、古代、中世、近世等の多くの資料から、縄文時代後・晩期以降の土地利用の在り方と変遷の一端を知る手がかりを得ることができました。

報告書が、県民の皆様をはじめ多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心と理解が深まることで文化財の普及、啓発の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の円滑な実施にご理解とご協力を賜わりました地元の皆さまや西日本高速道路株式会社九州支社熊本高速道路事務所、熊本市観光文化交流局文化振興課文化財調査室をはじめとする関係機関、並びにご指導ご助言をいただきました諸先生方に厚くお礼申し上げます。

平成３１年3月２９日

熊本県教育長　宮尾千加子

例　言

1　本書は、熊本市北区改寄町立石に所在する立石遺跡群の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2　発掘調査は、西日本高速道路株式会社九州支社熊本高速道路事務所の依頼を受け、熊本県教育委員会が実施した。調査費及び整理報告費については、西日本高速道路株式会社が負担した。

3　遺構・遺物の整理は、熊本県文化財資料室（熊本市南区城南町沈目 1667) で実施し、一部（株）埋蔵文化財サポートシステム熊本支店に委託した。

4　遺跡の発掘調査は、平成 29 年 4 月 27 日から平成 29 年 8 月 31 日まで実施し、整理報告作業を平成 29 年 9 月 1 日から平成 31 年 3 月 31 日まで実施した。

5　本書で用いる地形図は、西日本高速道路株式会社九州支社熊本高速道路事務所から提供された図面、並びに国土地理院発行の 2 万 5 千分の 1 地形図・熊本市の遺跡地図をもとに作成した。

　また今回、地元地権者の方々に御協力を頂き、遺跡の測量の基準点測量及び水準測量は、株式会社アイコンサルタント及び株式会社アートに委託して実施した。

6　調査範囲のうち、6・11・12 区東半分を県文化課直営調査、12 区西半分及び 17 区については、平成 29 年 6 月 30 日から平成 29 年 9 月 29 日まで、株式会社アート（主任調査員　辻 弘和、廉林 達也、主任技術者 淀谷 政広）に発掘調査補助委託として、県文化課の管理・監督のもと発掘調査を実施した。現地での写真撮影は加藤裕一（県文化課；佐賀県教育委員会派遣）、秦 憲一（県文化課；福岡県教育委員会派遣）、伊藤 精一、亀田 学（県文化課）、株式会社アート、遺構実測は、加藤、秦、伊藤、亀田の 4 人の他、辻、廉林、森本 清子、三島 多恵子、白石 美智子、神崎 博、入家 絵理が実施した。

　遺物の写真撮影は、亀田が行い、これを唐木 ひとみ、川井田 久子、築出 直美が補助した。

　遺物の実測は、秦、川井田、亀田、製図は、株式会社イビソクに委託し、一部について唐木、川井田が実施した。拓本については、唐木、築出が実施した。

　4 級基準点については、株式会社アイコンサルタント及び株式会社アートに委託した。遺構の実測図の整理は加藤、秦、伊藤、亀田、トレースは株式会社イビソクに委託し、一部を唐木が実施した。

　遺物洗浄・接合・復元は、井王 直厳、内田 孝子、古荘 隆、松原 康子、村崎 美智子、原口 美和子、上野 栄子、内村 尚美、志垣 博子、中島 裕三、市川 博幸、櫻本 由佳、本田 啓介が行い、一部を株式会社埋蔵文化財サポートに委託した。

7　本書の執筆は、6区・11区の遺構・遺物の記述に関しては秦が、基本土層・12・17区の遺構に関しては加藤が、その他の部分と前述の一部については亀田が補筆した。

8　整理後の資料の保管は熊本県文化財資料室で保管されている。

9　本書の編集は、亀田が行った。

凡　例

1　方位／座標

国土座標第Ⅱ系（世界測地系）を基準とし、方位もそれに準じた。

2　遺跡地区名

遺跡全体の地区（Fig.5）の通りである。熊本県教育委員会の調査区が全体に表示できるようにＸ＝-11400、Ｙ＝-26550を(0,0)とし、5mグリッド（区画）を設置している。Ｘ座標は北から南へ5m区画ごとにA,B,C,・・・・Hとし、Y座標を5m区画ごとに東から西へ1,2,3,・・・・14まで設定した。それぞれのグリッドの名称は、区画のX座標・Y座標の順に表記し、A-1とした。

3　遺構名略号

次の通りである。SK；土坑、SP；柱穴、SD；溝、SX；その他

4　遺構図版 基準

標高は、東京湾平均海水面（Tokyo Peil［T.P.］）、国土座標（XY座標）を明示した。方位も併せて表記した。

縮尺についても、スケールとともに縮尺を明示している。土坑は平面・立面とも1/40、溝については、６区1/100、その他は1/250である。その他配置図はそれぞれの図版に表記した。

5　遺構図版 縮尺

遺構図版は、ブロックごとに掲載し、縮尺はキャプション及びスケールで図示した。

6　遺構図版 線種

遺構平面図は、原則として確定ラインは実線で、推定線は破線で示した。また、撹乱及びトレンチは一点鎖線で示した。

7　遺構図版 スクリーントーン

焼土等について施している。図面内に凡例を付加している。断面については地山をスミ30％で示している。

8　遺構図版 断面ポイント

各遺構の平面及び断面図では、―ラインの内側をポイントとしている。

9　遺物図版 縮尺

遺物実測図は原則として1/1で行い、図版縮尺については、土器は1/3、破片は1/2、石器については、石鏃1/1、石匙・砥石は2/3、石斧・敲石等は1/3、打製石斧は1/2で掲載した。またこれに該当しないものは、その縮尺を図中に示した。

10　遺物図版 線種

〈土器〉　外形線・断面、中心線は実線、稜線・推定線は破線で示した。その他の土器については、輪郭線のまま表記している。

〈石器〉　外形線、稜線、剥離痕は実線、推定線は破線で示した。擦り面についてはトーン、欠損部については黒く塗りつぶしている。

11　遺物図版　配置

土器の小破片については、左から外器面、内器面、断面の順に提示している。拓本もこれに準じている。

12　遺物番号

原則的には、調査区ごとに通し番号で遺物番号をつけている。ただし、12・17区のSD006・SD007とSK006・SK007とが番号が重複しているが、そのままの表記である。遺構略号で区別可能である。

13　遺物観察表

すべての掲載遺物について、遺物観察表を掲載した。

14　図面図版・写真図版の表記

図面図版については、挿図の英語表記Figureの略称のFig.で提示した。

写真図版については、巻頭写真については、英語表記frontispiece の略称のfront.を、その他の写真図版は巻末に英語表記のPlateの略称のPL.に１から番号を振り、提示した。

立石遺跡群

－九州縦貫自動車道北熊本スマート IC 建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－

巻頭図版
序文
例言・凡例

本文目次
第Ⅰ章　調査の経過 …… 1
　第 1 節　調査に至る経緯と経過 …… 1
　第 2 節　調査の進行状況 …… 1
　第 3 節　調査の組織 …… 2
第Ⅱ章　遺跡の環境 …… 3
　第 1 節　遺跡の立地 …… 3
　第 2 節　立石遺跡群と周辺の遺跡 …… 3
　　第 1 項　縄文時代 …… 3
　　第 2 項　弥生時代 …… 3
　　第 3 項　古墳時代 …… 3
　　第 4 項　古代 …… 4
　　第 5 項　中世 …… 4
第Ⅲ章　調査の成果 …… 10
　第 1 節　立石遺跡の範囲での調査区の位置 …… 10
　第 2 節　調査の概要 …… 10
　第 3 節　基本層序 …… 10
　第 4 節　6 区の調査成果 …… 13
　　第 1 項　調査区の概要 …… 13
　　第 2 項　遺構と遺物 …… 13
　　第 3 項　遺物包含層他の遺物 …… 16
　第 5 節 11 区の調査成果 …… 18
　　第 1 項　調査区の概要 …… 18
　　第 2 項　遺構と遺物 …… 18
　　第 3 項　遺物包含層他の遺物 …… 18
　第 6 節 12・17 区の調査成果 …… 22
　　第 1 項　調査区の概要 …… 22
　　第 2 項　遺構と遺物 …… 22
　　第 3 項　遺物包含層他の遺物 …… 38
　遺物観察表 …… 49
第Ⅳ章　遺構・遺物の分析 …… 52
第Ⅴ章　調査のまとめ …… 59
　写真図版
　抄録

挿図目次（Fig.)

Fig. 1　立石遺跡群位置図（上図 S=1/25,000　下図 S=1/4.000）
Fig. 2　立石遺跡群地形図及び九州縦貫自動車道北熊本スマート IC 発掘調査位置図 S=1/5.000
Fig. 3　立石遺跡群の位置図
Fig. 4　立石遺跡群周辺遺跡地図
Fig. 5　立石遺跡群Ⅲ層遺構配置図　S=1/600
Fig. 6　立石遺跡群Ⅳ層遺構配置図　S=1/600
Fig. 7　６区溝 SD001 出土遺物
Fig. 8　立石遺跡群６区Ⅲ層遺構配置図及び調査区土層断面図　S=1/100
Fig. 9　立石遺跡群６区Ⅳ層遺構配置図及び調査区土層断面図　S=1/100
Fig.10　６区土坑 SK003 平面・断面図
Fig.11　６区調査区内出土遺物（石鏃）
Fig.12　６区調査区内出土遺物
Fig.13　立石遺跡群 11 区基本層序①～③断面図
Fig.14　11 区調査区内出土遺物（石器）
Fig.15　立石遺跡群 11 区遺構配置図 S=1/200
Fig.16　11 区円形周溝遺構 SX001 平面・断面図
Fig.17　11 区土坑 SK002 平面・断面図
Fig.18　11 区土坑 SK003 平面・断面図
Fig.19　11 区調査区内出土遺物
Fig.20　立石遺跡群 12・17 区基本層序ポイント及び柱状図ポイント図　S=1/400
Fig.21　立石遺跡群 12・17 区Ⅲ層遺構配置図 S=1/250
Fig.22　立石遺跡群 12・17 区基本層序①～③断面図
Fig.23　12 区溝出土遺物
Fig.24　立石遺跡群 12・17 区柱状図
Fig.25　12 区西壁土層断面図（溝 SD001 ～ 004）（上）17 区南壁土層断面図（下）
Fig.26　12 区 A － A',B － B' 土層断面図
Fig.27　12 区 C － C' ～ H － H' 土層断面図
Fig.28　17 区出土遺物
Fig.29　12・17 区 I － I' ～ M － M' 土層断面図
Fig.30　17 区溝 SD004 土層断面図
Fig.31　17 区溝 SD006 断面図
Fig.32　17 区溝 SD007 断面図
Fig.33　12 区土坑 SK005 平面・断面図
Fig.34　12 区土坑 SK006 平面・断面図
Fig.35　立石遺跡群 12・17 区Ⅳ層遺構配置図 S=1/250
Fig.36　12 区土坑 SK007 平面・断面図
Fig.37　12 区土坑 SK008 平面・断面図
Fig.38　17 区土坑 SK010 平面・断面図
Fig.39　17 区土坑 SK011 平面・断面図
Fig.40　17 区土坑 SK012 平面・断面図
Fig.41　12 区 SK006
　17 区 SK007 出土遺物
Fig.42　12・17 区調査区内出土遺物（石鏃）
Fig.43-1　12 区調査区内出土石器（石匙）
Fig.43-2　12 区調査区内出土石器（打製石斧・石皿・砥石）
Fig.44　17 区調査区内出土石器（打製石斧）
Fig.45　12 区調査区内出土縄文土器１（阿高系土器）
Fig.46　12 区調査区内出土縄文土器２
Fig.47　12 区調査区内出土縄文土器３
Fig.48　17 区調査区内出土縄文土器
Fig.49-1　12・17 区調査区内出土弥生土器
Fig.49-2　12・17 区調査区内出土・土師器・須恵器
Fig.50　施文具形態分類図１
Fig.51　施文具形態分類図２
Fig.52　立石遺跡群地形区分図（S=1/5,000）
Fig.53　立石遺跡群土地区画推定図（S=1/3,000）

表目次（Tab.)

Tab. 1　立石遺跡群周辺遺跡地名表
Tab. 2　立石遺跡群出土遺物観察表（石器）
Tab. 3　立石遺跡群出土遺物観察表（土器）
Tab. 4　小穴を持つ土坑一覧
Tab. 5　熊本県内の円形周溝状遺構
Tab. 6　南摺ヶ浜遺跡の円形周溝墓一覧
Tab. 7　弥生時代後期から古墳時代初頭の円形・方形周溝墓

写真目次（Front.・PL.)

巻頭カラー（Front）

Fronto. 1　立石遺跡群より弁天山を望む（上）
　　立石遺跡群調査区全景（下）

Fronto. 2　立石遺跡群６区全景（上）
　　立石遺跡群 17 区柱状図⑨Ｂ断面（下）

Fronto. 3　立石遺跡群 11 区全景（上）
　　11 区土坑 SK002（下）

Fronto. 4　立石遺跡群 12・17 区全景

Fronto. 5　縄文土器（上）阿高式土器、
　　（右中央）土製耳飾（左右下）黒色磨研土器

Fronto. 6　石器（左上）槍、（右上）石の矢じり、
　　（左下）携帯用ナイフ（右中央）土堀具
　　（右下）砥石

Fronto. 7　（上）縄文土器（後・晩期）
　　（左下）弥生土器（後期）
　　（右中央）古墳時代～古代の土器
　　（右下）陶磁器（近世）

写真図版扉（PL.）　立石遺跡群中央付近から
　　石川山を望む（南西から）

PL. 1　１．６区完掘状況（北から）

PL. 2　１．６区溝 SD001 完掘状況（北東から）
　　２．６区土坑 SK003 完掘状況（東から）

PL. 3　１．６区土坑 SK003 土層断面（南から）
　　２．６区溝 SD001 土層断面（北から）
　　３．６区南壁土層断面（中央）北から
　　４．11 区円形周溝状遺構 SX001 完掘状況
　　（北東から）

PL. 4　１．11 区完掘状況（東から）
　　２．11 区円形周溝状遺構 SX001 検出状況
　　（北から）
　　３．11 区土坑 SK003 土層断面（西から）

PL. 5　１．11 区土坑 SK003 完掘状況（西から）
　　２．11 区土坑 SK002 土層断面（西から）
　　３．11 区土坑 SK002 完掘状況（北西から）
　　４．11 区円形周溝状遺構 SX01 東側土層断面
　　５．11 区円形周溝状遺構 SX01 西側土層断面

PL. 6　１．12 区溝 SD001 ～ 005 完堀状況（東から）
　　２．12 区溝 SD002・003 －②（東から）
　　３．12 区溝 SD004 土層断面（北から）

PL. 7　１．17 区溝 SD001 ～ 004 完堀状況（北から）
　　２．17 区溝 SD006 土層断面（東から）
　　３．17 区溝 SD001 ～ 004 土層断面
　　（北東から）

PL. 8　１．12 区南東部出土坑（SK006・007・
　　008）完堀状況（東から）
　　２．12 区土坑 SK006 石器出土状況
　　３．12 区 D-7 グリッド石器出土状況

PL. 9　１．12・17 区完堀状況（東から）
　　２．12 区土坑 SK012 土層断面（南東から）
　　３．12 区土坑 SK012 完堀状況（北東から）

PL.10　１．17 区土坑 SK005 土層断面（西から）
　　２．17 区土坑 SK005 完堀状況（南から）
　　３．17 区土坑 SK006 土層断面（南西から）
　　４．17 区土坑 SK006 完堀状況（西から）
　　５．17 区土坑 SK007 土層断面（東から）
　　６．17 区土坑 SK007 完堀状況（南から）
　　７．17 区土坑 SK008 土層断面（東から）
　　８．17 区土坑 SK008 完堀状況（南から）

PL.11　１．12・17 区西 PL. 側Ⅳ層検出状況
　　２．17 区土坑 SK010 土層断面（西から）
　　３．17 区土坑 SK010 完堀状況（南西から）
　　４．17 区土坑 SK011 土層断面（南から）
　　５．12 区 C-11 グリッド遺物出土状況

PL.12　１．６区出土遺物（石鏃）
　　２．11 区出土遺跡（石器）
　　３．12・17 区出土遺跡（石鏃）

PL.13　１．12・17 区出土遺物（石器）
　　２．12 区出土遺物（石器）

PL.14　１．12 区出土遺物（石器）
　　２．12・17 区出土遺物（石器）

PL.15　１．２．12・17 区出土遺物（石器）
　　３．６．12・17 区出土遺物（土器）

PL.16　１．２．６区出土遺物（縄文土器）
　　３．４．11 区出土遺物（縄文土器）

PL.17　１．２．３．12 区出土遺物（縄文土器）

PL.18　１．２．12 区出土遺物（縄文土器）

PL.19　１．12 区出土遺物（縄文土器）
　　２．17 区出土遺物（縄文土器）

PL.20　１．17 区出土遺物（縄文土器）
　　２．12 区出土遺物（縄文土器）

PL.21　１．12 区出土遺物（弥生土器）

PL.22　１．12・17 区出土遺物（弥生土器・土師器）
　　２．12・17 区出土遺物（土師器・須恵器）

PL.23　１．17 区出土遺物（須恵器）
　　２．17 区出土遺物（陶器）
　　３．17 区出土遺物（陶磁器）

第Ⅰ章　調査の経過

第１節 調査に至る経緯と経過（Fig.1・２・３）

平成 24 年６月 21 日に事業者である西日本高速道路株式会社九州支社熊本高速道路事務所（以下、「NEXCO」という）、熊本市観光文化交流局文化振興課埋蔵文化財調査室（以下、「熊本市」という）、熊本県教育庁教育総務局文化課（以下、「県文化課」という）の３者で事業の推進と埋蔵文化財保護の協議を実施した。そこで、当該事業（スマート IC 設置）が国土交通省に対して熊本市・合志市両市の要望事業であること併せて確認した。

NEXCO からは平成 27 年度に入り、九州縦貫自動車道北熊本 SA に隣接するスマート IC 建設計画に関する説明があり、熊本市からは当該予定の周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲を提示し情報の共有を図った。そのなかで、平成 24 年 10 月から地元への事業説明が実施されること、その後、地権者の同意が得られたところから予備調査に着手することを申し合わせた。この協議の中で、同事業が先に述べたとおり両市の要望事業であることを踏まえ、埋蔵文化財調査等についても熊本市が主体となること、県文化課は事業の円滑な遂行に協力することも併せて申し合わせた。

この協議を受けて、NEXCO から予備調査依頼 [i] が県文化課あて提出され、当課では 10 月に踏査に着手した。その結果、事業区域全域で確認調査が必要であることを熊本市・県文化課で確認。事業計画を勘案すると早期の確認調査が必要である旨を NEXCO に申し入れた。

平成 24 年 12 月３日～平成 24 年 12 月 12 日に県文化課で確認調査に着手。平成 25 年３月、県文化課による２度目の確認調査 を実施した。確認調査の結果、東側谷部を除き対象箇所 22,000㎡のうち西側で削平を受け遺跡の広がりが確認できなかった範囲を除き、埋蔵文化財が存在することを確認した。[ii]

この結果を受け平成 25 年４月 15 日に、NEXCO と熊本市、熊本市北部土木センターと意見の共有を図り、発掘調査に移行する場合の調査・積算基準や文化財保護法等、関係法令の説明を行い埋蔵文化財と公共工事の調整を実施した。NEXCO からは工程上、平成 26 年６月～ 10 月までの期間を区切り発掘調査を実施するよう要望があったが、予備調査等の結果からこの期間内での発掘調査終了は無理である旨伝え再協議を実施し、改めて NEXCO から 12 ヶ月間の発掘調査期間を確保する旨事業者から再要望があった。

その後、熊本市と協議を重ね熊本市が主体となり、県文化課は広域に渡る市町村間の事業であることを勘案し、１班を支援として編成することとし、平成 26 年度に予算を計上した。

しかし、事業主体者側の事業進捗の遅れなどから平成 26 年度、27 年度の事業が見送られるなか、平成 28 年には「平成 28 年熊本地震」が発生する等の要因から更なる事業の遅延が生じた。

平成 28 年度後半、事業の進捗が見込まれたことから文化財保護法第 94 条第１項に基づく通知 が NEXCO から熊本県教育長あて提出され、予備調査の結果に基づき発掘調査の指示を通知した。この通知を受け、熊本市は平成 28 年度後半から先行して発掘調査に着手し、県文化課では平成 29 年度当初に予算を計上し改めて発掘調査体制の整備を行なった。

県文化課では平成 29 年４月 25 日付け教文第 181 号で、文化財保護法第 99 条第１号の規定により発掘調査の通知[iii] をして発掘調査に着手した。

熊本県では平成 29 年４月より「平成 28 年熊本地震」の復旧・復興業務に従事して頂くことを前提に、文化庁調整により４名 [iv]の専門職員の派遣を頂いた。地震以降、同事業も熊本地震からの幹線道路の早期整備として復興事業に位置付けられたため、派遣専門職員も従事できる業務として位置付け、支援を仰いだ。

ⅰ）平成 24 年７月２日付け九 熊高第 383 号で NEXCO から県教育長あて依頼

ⅱ）平成 25 年４月８日付け教文第 40 号熊本県教育長から、西日本高速道路株式会社九州支社熊本高速道路事務所長あて通知

iii）平成 29 年４月 20 日付け教文第 177 号で熊本県教育長から西日本高速道路株式会社九州支社熊本工事事務所長あて発掘調査で通知

iv）文化庁の調整により福岡県・佐賀県・大分県・鹿児島県の各教育委員会から派遣専門職員の受入れをしている。

第２節　調査の進行状況（Fig. ３）

調査日誌を中心に現地調査の進行状況を記載する。

（調査日誌）

平成 29 年４月 27 日　表土剝ぎ。作業員８名で調査を開始。テント設営、機材整理、環境整備を実施。

平成 29 年４月 28 日　壁面清掃。

平成 29 年５月１日　包含層掘削。包含層より土器片、石鏃、黒曜石片出土。北側で土器が集中する地点あり溝と土坑の２つの遺構確認。

平成 29 年５月９日　調査区拡張（重機掘削）

平成 29 年５月 10 日　12 区北側の表土剝ぎ。地形を把握するためにバックホウバケット３つ分程の幅を東西方向に先行して掘削。

平成 29 年５月 11 日　６区 SK003（土坑）掘削。

平成 29 年５月 19 日　11 区表土剝ぎ開始。

平成 29 年５月 26 日　12 区表土剝ぎ。11 区遺構検出。

近世以降の溝を検出。6 区平板測量。
平成 29 年 6 月 1 日・2 日　6 区　平面・断面測量。
平成 29 年 6 月 5 日　作業員を増員。13 名で調査実施。
平成 29 年 6 月 8 日　12 区上層溝等検出。
平成 29 年 6 月 9 日　12 区溝掘削。東西方向5条、南北方向3条の溝を検出。
平成 29 年 6 月 13 日　11 区遺構検出。円形周溝状遺構検出。
平成 29 年 6 月 15 日　プレハブ設置。11・12 区遺構掘削
平成 29 年 6 月 16･17 日　12 区上層遺構溝等平面図･断面実測図作成。
平成 29 年 6 月 20 日　11 区土坑掘削。
平成 29 年 6 月 22 日　12 区クロボク下包含層掘削。弥生土器等出土。上層断面等実測。
平成 29 年 6 月 26 日～ 29 日　12 区下層遺構検出・掘削。土坑状のものを数基確認したが、遺構と明確に判断できるものなし。
平成 29 年 7 月 10 日　空撮実施。
補助委託により株式会社アートが 12 区西側の 17 区を発掘調査実施。
12・17 区表土剝ぎ開始。
平成 29 年 7 月 13 日　17 区北側より天城式・古閑式の縄文土器・打製石斧等出土。
平成 29 年 7 月 14 日　17 区表土掘削終了。溝と撹乱堀り。包含層掘削。
平成 29 年 7 月 18 日　溝から近世陶磁器出土。
平成 29 年 7 月 20 日　12 区 C-11 グリッドから黒色磨研土器の深鉢出土。遺構の有無の確認のため、十字トレンチを入れ遺構の確認作業。
平成 29 年 7 月 21 日　12 区表土掘削終了。
平成 29 年 7 月 24 日　遺構検出。
12・17 区にかけてほぼ東西・南北に溝が数状検出される。
平成 29 年 7 月 26 日　包含層掘削。12 区 SK005 断面写真
平成 29 年 7 月 31 日　包含層掘削中に 12 区 C-9 グリッドで石匙出土。遺構はなし。
平成 29 年 8 月 3 日　12 区 A-11 グリッドで土坑検出。縄文土器・石器出土。　12 区 B-11 グリッドより阿高系土器出土。
平成 29 年 8 月 8 日　12 区の深堀トレンチ精査。
平成 29 年 8 月10日　SK006(焼土坑検出)。半裁して掘削。西側上層に焼土塊多数検出。SK008 検出・掘削。
平成 29 年 8 月 18 日　17 区　SK010 掘削。断面 U 字状。
平成 29 年 8 月 22 日　12・17 区全景写真撮影のための精査。
平成 29 年 8 月 23 日　12・17 区全景写真撮影。　17 区 SK010 ～ 012 の掘削。完掘写真撮影。
平成 29 年 8 月 21 日～ 24 日　17 区 SK010 ～ 012 の写真撮影・実測図作成。基本土層写真・断面測量。
平成 29 年 8 月 24 日　調査終了。
平成 29 年 8 月 31 日　埋め戻し完了。

第 3 節　調査の組織

【平成２９年度】現地調査・整理

調査主体者　宮尾　千加子 (熊本県教育長)
調査責任者　岡村　郷司（熊本県文化課長）
調査統括　村崎　孝宏　（課長補佐）
調査指導　長谷部　善一 (主幹兼文化財調査第一係長)
調査事務　松永　隆則 (教育審議員兼課長補佐)
左座　守 (主幹兼総務文化係長)
稲本　尚子 (総務文化係参事)
竹馬　牧子 (総務文化係主事)
赤星　和宏（文化財調査第一係文化財保護主事）
調査調整　池田　朋生（文化財調査第一係参事）
調査担当者　亀田　学 (文化財調査第一係参事)
伊藤　精一（文化財調査第一係文化財保護主事）
秦　憲二（文化財調査第一係主幹 ; 福岡県教育委員会派遣）
加藤　裕一（文化財調査第一係参事；佐賀県教育委員会派遣）

【平成３０年度】整理報告書

整理主体者　宮尾　千加子 (熊本県教育長)
整理責任者　岡村　郷司（熊本県文化課長）
整理総括　村崎　孝宏 (課長補佐)
整理指導　長谷部　善一 (主幹兼文化財調査班担当)
整理事務　松永　隆則 (教育審議員兼課長補佐)
一寶　直也（総務担当）
松本　哲郎（総務班参事）
佐藤　賢一 (総務班参事)
竹馬　牧子 (総務班主事)
赤星　和宏（文化財調査班文化財保護主事）
整理担当者　亀田　学 (文化財調査班参事)
整理協力　池田　朋生（文化財調査班参事）

第Ⅱ章 遺跡の環境 (Fig ４・５)

第１節　遺跡の立地

調査区は、植木台地の南側、熊本市北区改寄町字立石に位置する。東側は合志市、北側は熊本市北区植木町である。標高約 75m で北東方向及び南西方向に徐々に高くなっている緩やかな谷地形部分で雨が降ると水がたまるような地形であるが、渇水期には水には恵まれないため、耕作地には不適であったと考えられ、周辺の中では、遺跡の縁辺部であったと考えられる。

東側約 400 m付近には、標高 145m の弁天山が、その北には標高 118.3m の石川山（二塚山）が位置する。

西側約 750m のところは熊本市中心部を流れる坪井川の源流となっている。立石遺跡群が位置する台地から坪井川を挟んで小糸山や楠野の台地が対座する。

南東側へ向かうと 600 m付近までは立石遺跡群が広がりを見せ、さらに南側は大鳥居町や梶尾町の台地がつながる。

北側約 100m には東側は合志市、大津町、西側は玉名市を結ぶ主要な道路である県道 30 号線が東西に走る。

北側に位置する山後遺跡の台地から北へ 1.5km 程行ったところは谷地形になっており、そこが小野の泉水であり、小野川が流れる。

第２節　立石遺跡群と周辺の遺跡

第１項　縄文時代

1955 年には上野辰男氏が調査区周辺を踏査し、二塚山の麓から改寄集落まで広がる縄文時代後期（黒色磨研土器様式；鳥井原式・御領式）の遺跡であると想定した。

1969 年には九州縦貫自動車道建設の際に熊本県九州縦貫自動車道文化財調査団（上野辰男・乙益重隆・平岡勝昭・三島格・佐藤伸二氏）が調査を実施し、改寄字沖野で縄文時代後・晩期の土坑を検出している。さらにその北側の植木町大字小野字二塚 415-435 地点では９基の土坑から黒色磨研土器様式の御領式土器が出土している。遺跡から硬化面も検出し、周辺から数十点の土器が出土していることから、竪穴建物で構成される集落を想定している。上野氏の踏査を裏付ける結果である。

第２項　弥生時代

調査区南東 600m 程の地点の熊本市２次調査で、弥生時代後期の竪穴建物を 12 軒検出している。５軒が焼失家屋で２～３時期に分けられると推定できる。鉄斧等が出土しているが、総じて鉄器の点数は少なく、石製穂摘み具等の石製品も出土している。周辺からも弥生土器が表採されており、弥生時代後期の集落が広がっていたと考えられる。

平成 29 年度の北熊本 IC 建設に伴う熊本市埋蔵文化財調査室の調査では、今回の調査区北東約 300m 付近で弥生時代の竪穴建物が検出されている。また、調査区南側約３00m 付近の熊本市第３次調査でも弥生時代後期の竪穴建物が高密度で検出されている。

調査区北側及び北西側は地盤が削られており詳細不明であるが、地形が高くなっている部分であり、前述した弥生時代建物を検出した地形の続きである。今回の調査区を挟んで、北側及び東側・西側に弥生時代の集落が広がっていると推定できる。

また、周辺の台地も熊本市により調査が行われ、弥生時代の様子が伺えるようになっている。

調査区の約 1.5Km 北には、石川遺跡があり、弥生時代後期後半から終末にかけての集落がある。農耕具や工具、武器等の鉄製品の他、鉄滓や鉄片も多数出土し、鍛冶関連遺構や鉄生産工房の想定もされている。小形倣製鏡も出土しており、拠点集落の一つである。製塩土器も出土しており、集落間の交流があったこと伺える。

調査区の南側約 1.8km には、小糸山遺跡が存在する。弥生時代後期の竪穴建物を高密度で検出している。切り合い関係からは５時期以上と考えられ、集落が長期間にわたり営まれてきたと推定できる。鉄器の出土量も多く、特に棒状鉄片や三角鉄片等鍛冶遺構関連の遺物が多量に出土しており、注目されるところである。周辺の拠点集落の一つと考えられている。

その小糸山の台地の谷を隔てた尾根状に楠野遺跡があり、弥生時代後期の建物が６軒見つかっている。竪穴建物の主軸方向などから見て２時期以上は集落が営まれていたと考えられる。さらに調査区南側約３Km にも弥生時代後期の集落である梶尾遺跡群がある。

このように、周辺には弥生時代後期の集落が集中しており、集落間のネットワークがあった区域であろう。

第３項　古墳時代

調査区の西側約 100 m付近では、平成 29 年度北熊本 IC 建設に伴う熊本市の調査により古墳時代の竪穴建物が検出されており、周辺にも古墳時代の遺跡が多く分布する。

調査区北東約 600m 程には石川山古墳群が位置する。全長約 34m の前方後円墳１基、円墳 11 基で構成される古墳群で、５世紀後半の組合式の家形石棺や石障系の横穴式石室を主体部とする古墳から７世紀にかけての腰石や複室構造を持つ横穴式石室を主体とする古墳まで連綿と古墳を造営していることが判明している。

北側約 1.5km には、弥生時代後期後半から存続する

石川遺跡がある。古墳時代前期の竪穴建物も存在するが、中心は６世紀から７世紀にかけての 75,000㎡規模の集落と想定されている。

石川山古墳群の西側に位置する小野川の対岸には前方後円墳で複室構造を持つ横穴式石室を主体部とする装飾古墳の横山古墳や複室構造の横穴式石室を主体部とする市史跡の鬼のいわや古墳等の６世紀の古墳が位置する。

鬼のいわや古墳の北側に位置する（古閑）天神平遺跡の合志川沿い部分で古墳時代前期後半の溝と竪穴建物を検出している。水銀朱精製用石臼が表採されており、石材やその形式から古墳時代前期後半のものと推定されており、畿内からの搬入品の可能性を想定している。調査された面積は限られているが、竪穴建物が隣接して検出されていること、溝から小形器種を含めて大量の土器が出土しており、大規模の集落であったと考えられる。

第４項　古代

字「南の割」には立石の地名の由来になっている石柱が建っている。ただし､『肥後國史』によると「貞観二年五月五日合志郡ヲ割テ山本郡ヲ置レシ時其由来ヲ碑名ニ彫刻シ建テタル故ニ立石村ト云（此村飽田合志山本三郡ノ界ニシテ今飽田郡ニ属ス）其後故アリテ此石ハ合志郡上生村ニ移セリ其所以ハ上生村ノ条ニ審カナリ」とある。さらに上生村の条には､「銘文消歇ス」とある。

現在、立石の字「南の割」にある高さ約２ｍの玄武岩（安山岩）立石は､後世のものと推定されている。

何れにしてもこの地が、郡界であり、交通の要衝であったと考えられる。

字「北の割」･「南の割」にある東西南北の堀割については、地形的に東西方向に区画を分けており、いずれかの時期の方形の区画を区割したことは確実である。「南の割」の南側に位置する東西方向の堀割りが東側に続くことから考えても区割が台地周辺の大部分にも及んでいた可能性がある。

そうしたことから、歴史地理の研究によって古代の官道や駅家として推定されている場所でもある。

熊本市熊本城研究センター鶴嶋俊彦氏や京都大学名誉教授の木下良氏が延喜式の駅路について、それぞれ違うルートではあるが、今回の調査区の南西側に想定している。

特に木下氏は、「延喜式」（兵部省）諸国駅馬に見える高原（たかばる）駅を南西側の「北の割」･「南の割」と字名が残る地域に比定し、駅馬・伝馬各五疋が置かれていたとしている。

鶴嶋氏は古代の駅路の本路は現在の国道３号線沿いに比定し旧北部町域を南北に通ったと推定し、調査区の南側に東西に延びる支路を想定している。

駅路は、発掘調査で見つかってはいないが、南側約 300m の熊本市第３次調査区では現在の畑の区画に近い東西南北方向に古代の道路を検出している。

調査区南側約 600m 地点の熊本市２次調査区では、東側に 25 度に振れた東西方向の溝を検出し、９世紀前半の土器も出土しており、古代の区画を示唆するものである。

さらに調査区西側約 400m の熊本市１次調査区で東に 10 度程振れた古代から中世の道路を検出しているが、幅１ｍ程のもので、小規模な区画である。中世に下る可能性があろう。

また、調査区南側約 300m 地点の熊本市３次調査区で、９世紀前半に掘立柱建物（２間×４間）・竪穴建物を検出している。「官」「東」等の漢字１から２文字の墨書土器４点が出土している。古代の駅等との関係が注目される。

そして、調査区西側 350m の山後遺跡では竈付きの竪穴建物が見つかっている。石川二塚遺跡、東平遺跡、小野馬場遺跡、小野の中遺跡等周辺の遺跡群では土師器・須恵器等が表採されている。

立石遺跡群では、弥生時代後期の集落域と古代の建物群がほぼ重複しており、古代の集落が東側及び南側に展開する地域であることは間違いない。

第５項　中世

中世の遺跡も周辺に分布している。

県道大津・植木線北側の山後遺跡では青磁、西側の東原遺跡では中世土器が散布しており、中世の集落も調査区の北側に広がっていると考えられる。

先に述べた大規模の堀割は条里区画が一般に施行される以降の古代末から中世にかけての区割の可能性も考えられ、立石遺跡群の中世の遺構の広がりも注目される。

石川山北側には石川の五輪塔群、西側の小野川対岸には小野の宝塔が位置しており、小野の泉水や小野川周辺に中世の集落が広がっていたと考えられる。調査区南側 1km には井上城が位置する。南側 2km に位置する楠野遺跡では、15 世紀末の溝を検出しており、楠原城（鹿子木氏の居城）関連のものと考えられている。

Fig.1　立石遺跡群位置図　（上図 S=1/25,000　下図　S=1/4,000）

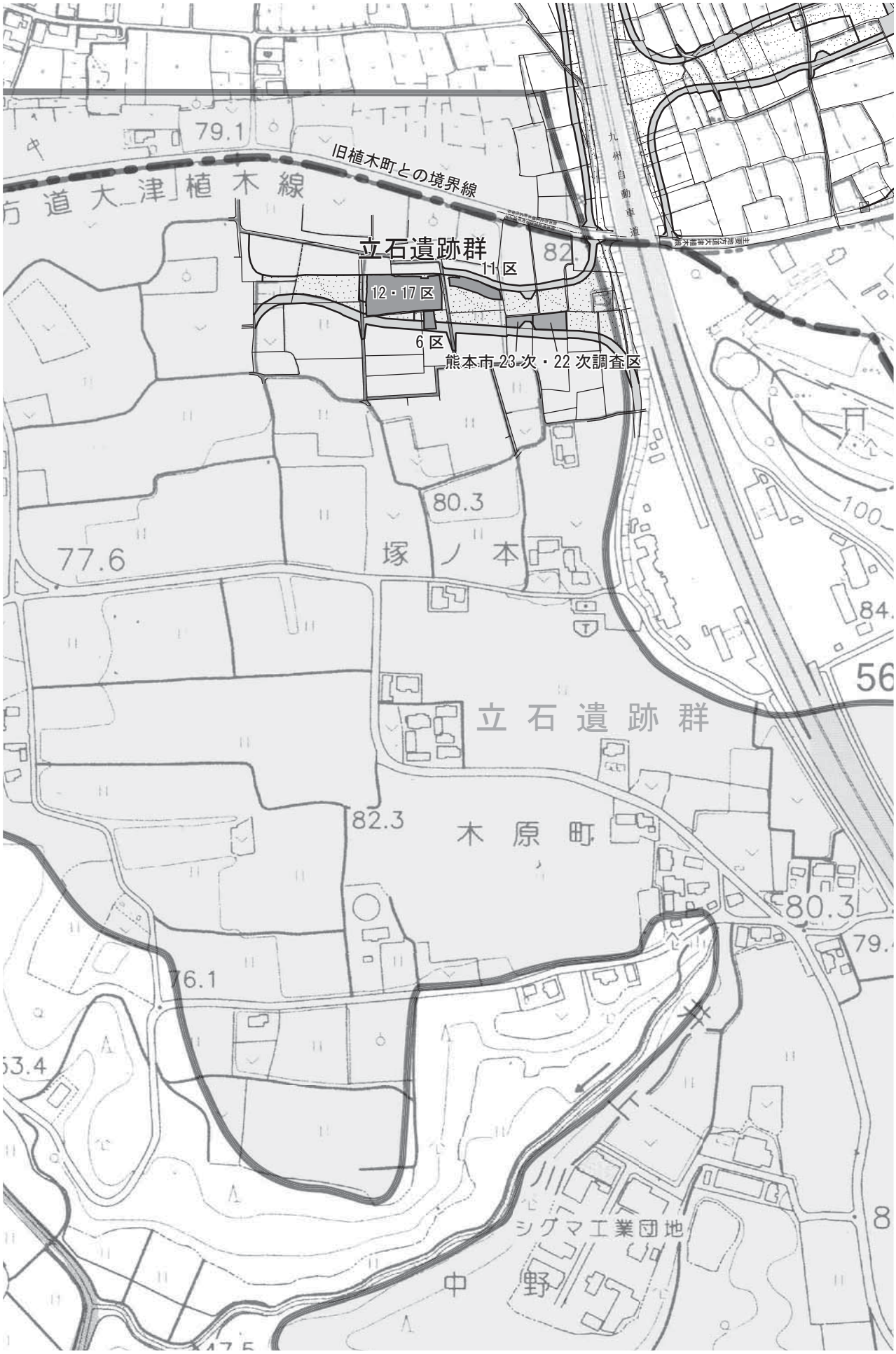


Fig. 2 立石遺跡群地形図及び九州縦貫自動車道北熊本スマート IC 発掘調査位置図 S=1/5,000)

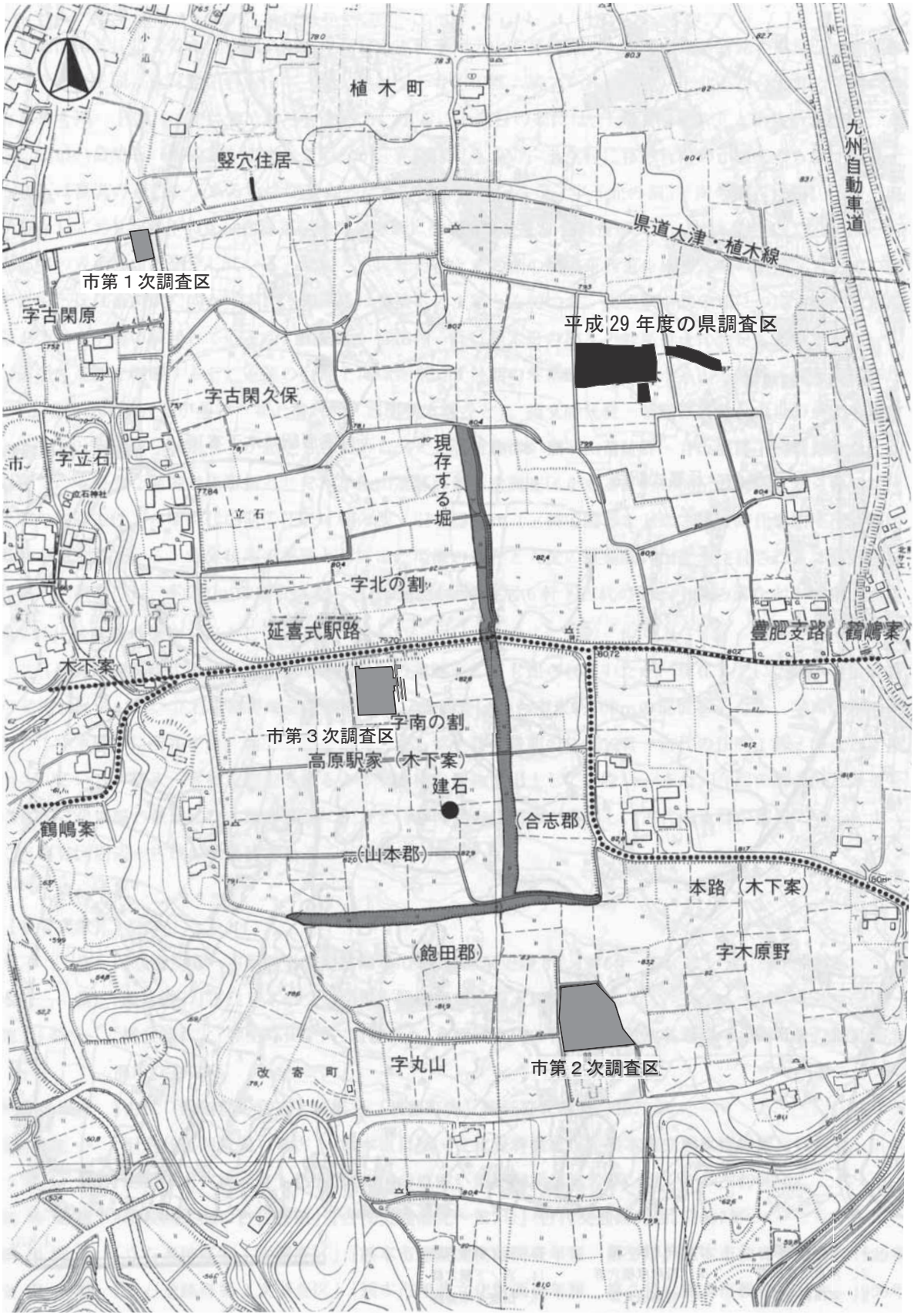


Fig.3　立石遺跡群位置図

『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告書集－平成 18 年度－』
「立石遺跡群第 1 次調査区」（2007 熊本市教育委員会）第 2 図より転載加筆

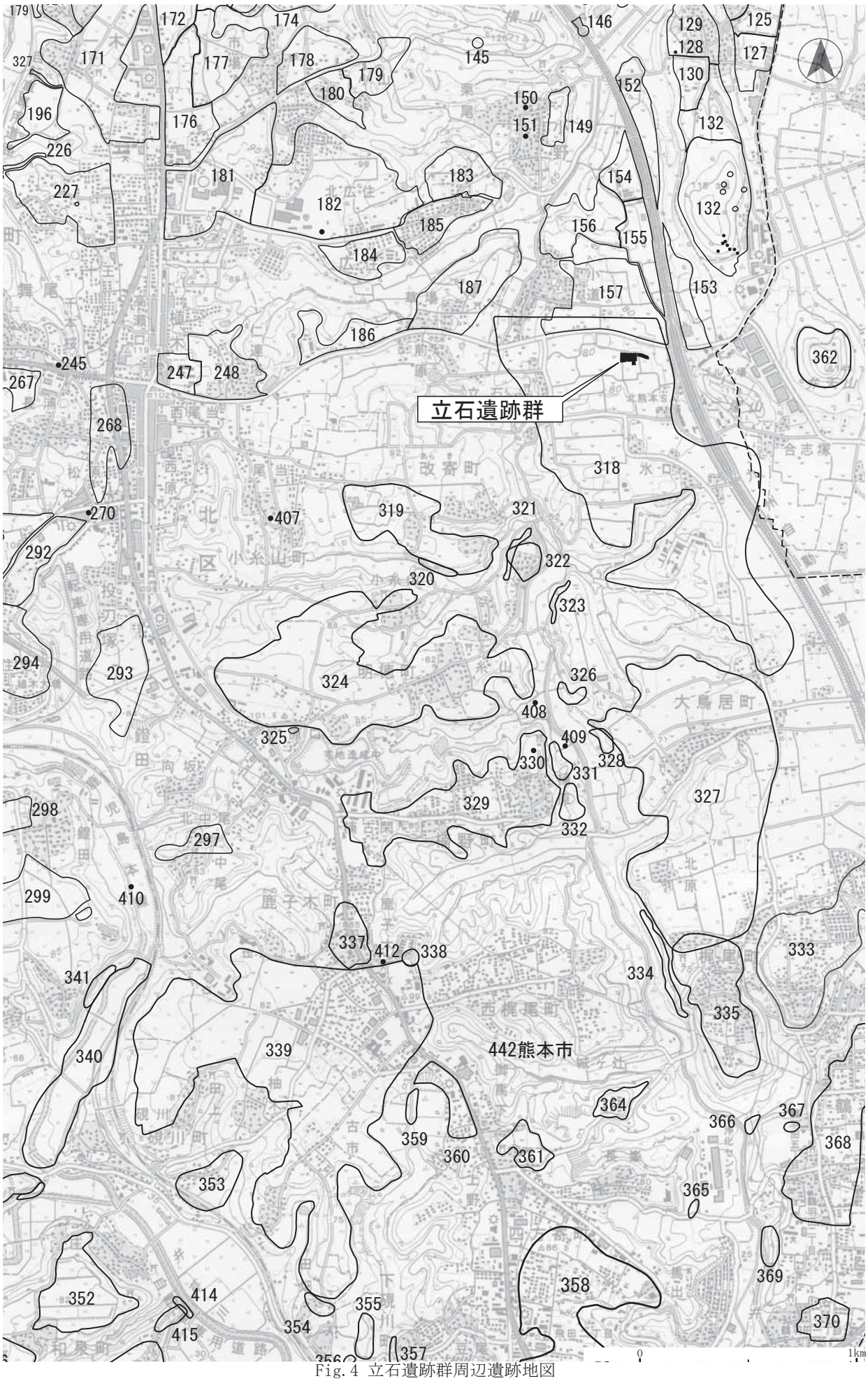


Fig. 4 立石遺跡群周辺遺跡地図

Tab. 1 立石遺跡群周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
125	石川遺跡	石川　小迫	弥生	包蔵地		
127	石川向原遺跡	石川　向平	弥生～中世	包蔵地		
128	石川の板碑群	石川　小迫	中世	石造物		
129	石川居屋敷遺跡	石川　居屋敷	弥生～平安	包蔵地		
130	石川松葉遺跡	石川　松葉	弥生・平安 中世	包蔵地		
131	塚ノ前遺跡	石川　塚ノ前	縄文～中世	包蔵地		
132	石川山古墳群	石川　塚山	古墳	古墳		
145	鬼のいわや古墳	小野　横山	古墳	古墳	町	
146	横山古墳	有泉　中野	古墳	古墳		前方後円墳
149	小町前遺跡	小野　小町前	弥生	包蔵地		
150	小野の宝塔	小野　居屋敷	中世	石造物		板碑あり
151	小野箱式石棺	小野	古墳	埋葬		箱式石箱一基 断面に確認
153	柳迫	石川　柳迫	弥生～古代	包蔵地		
154	戸泉遺跡	小野　戸泉	弥生～平安	包蔵地		
155	小野馬場遺跡	石川　柳迫	縄文・弥生 平安・中世			
156	小野野中遺跡	小野　野中	縄文～中世	包蔵地		
157	小道	小野　小道	古代	集落跡		断面に竪穴住居跡 (カマド付)
171	一ツ木	山本　一木	縄文	包蔵地		
172	金輪松遺跡	岩野　金輪松	平安～中世	包蔵地		
174	次郎丸屋敷	岩野　馬場 一町畑	古代・中世	屋敷		
174	馬場	岩野　馬場	縄文～中世	包蔵地		馬場小路 三重土塁
176	茶臼塚遺跡	岩野　茶臼塚	縄文・弥生 平安	包蔵地		
177	市場跡遺跡	岩野　鐘迫	縄文・弥生 平安・中世	包蔵地		
178	平松遺跡	岩野　平松	縄文・弥生 平安・中世	包蔵地		
179	塚園古墳群	岩野　塚園	古墳	古墳		
180	小山遺跡	岩野　小山	弥生・平安	包蔵地		
181	浄行寺遺跡	岩野　浄行寺	弥生・平安 中世	包蔵地		
182	岩野箱式石棺	岩野	古墳	埋葬		箱式石箱 一基
183	松山遺跡	岩野　松山	縄文・弥生 平安	包蔵地		
184	石櫃遺跡	広住　石櫃	縄文・平安	包蔵地		
185	烏帽子遺跡	小野　烏帽子	弥生・他	包蔵地		弥生土器 土師器
186	広住西原遺跡	広住　西原	弥生・平安	包蔵地		
187	植木草場	広住　向原ほか	縄文～中世	包蔵地		
196	一木南原遺跡	一木　南原	縄文・平安	包蔵地		
226	正林横穴群	一木　正林	古墳	横穴		
227	正林遺跡	一木　正林	弥生・平安 中世	包蔵地		
245	乃木大将記念碑	舞尾　石仏	近代	石造物		西南役向坂戦、人員点呼の地に建つ
247	植木中学校跡	植木　五反畑	近代	包蔵地		植木小校庭に碑あり
248	五反畑遺跡					
267	加川原遺跡	滴水　加川原	縄文～平安	包蔵地		
268	植木町三丁目	植木町３丁目	弥生	埋葬		甕棺
270	投刀塚古墳	滴水　大塚	古墳	古墳		円墳、内部不明
292	投刀塚堀の内遺跡	投刀塚　堀ノ内	縄文・平安	包蔵地		
293	野入遺跡	鐙田　野入	縄文・平安	包蔵地		
294	山頭遺跡	滴水　山頭	平安	包蔵地		
297	北中尾遺跡	鐙田　北中尾	弥生・平安	包蔵地		
298	腹佛長遺跡	鐙田　服仏長	縄文・平安 中世	包蔵地		
299	沖遺跡	鐙田　沖	縄文・平安 中世	集落跡		
318	立石遺跡群	改寄町立石	縄文・弥生 古代・近世			立石駅衛参考地を含む
319	宝出原	改寄町	縄文～中世	包蔵地		
320	松尾原横穴群	改寄町	古墳	古墳		３基
321	井上横穴群	改寄町城が下	古墳	古墳	市	７基
322	井上城跡	改寄町井上	中世	城		
323	宮尾横穴群	明徳町宮尾	古墳	古墳		９基以上

番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
324	小糸山遺跡群	小糸山町居屋敷	縄文～中世	包蔵地		小糸山遺跡 小糸山居館跡 小糸山追分 石・寄鶴官軍墓地縄文後期土器 縄目圧痕土器など 西南戦争官軍墓地
325	明徳官軍墓地	明徳町上市原	明治	墓地	県	西南戦争官軍墓地
326	八幡谷横穴群	明徳町八幡谷	古墳	古墳		
327	大鳥居遺跡群	大鳥居町	縄文～中世	包蔵地		大鳥居遺跡・井出原禅房参考地
328	射の馬場横穴群	大鳥居町射の馬場	古墳	古墳		10 基以上 １基調査
329	楠野遺跡群	楠野町	中世	包蔵地		
330	楠原城 平井宮庚申塔	楠野町城ヶ下	中世	包蔵地	市	庚申塔のみ市指定 楠原城は鹿子木貞教の築城、鹿子木氏の居城
331	宮ノ前横穴群	明徳町	古墳	古墳		10 基以上
332	宮ノ下横穴群	楠野町宮ノ下	古墳	古墳		
333	梶尾古閑原 古屋敷	梶尾町古閑原など	縄～中世	包蔵地		梶尾谷山お茶屋跡
334	梶尾横穴群	梶尾町宮の本	古墳	古墳		
335	梶尾遺跡群	梶尾町中尾原	弥生	包蔵地		甲佐大明神遺跡 弥生中期～後期の土器、大明神甕棺群
337	伝鹿子木館跡	鹿子木町花の木	中世	包蔵地		
338	一町畑古墳	西梶尾町一宮畑	古墳	古墳		
339	硯川遺跡群	硯川・下硯川町	縄文～平安	包蔵地		北部中学校遺跡・田端遺跡・田端窯跡・十三部塚板碑 板碑（大永４年銘）、窯跡（平安期？） ２基以上
340	北迫川底遺跡群	北迫	弥生～中世	包蔵地		
341	北迫筒井横穴群	北迫町筒井	古墳	古墳		
352	川東遺跡群	和泉町幡宮	縄文・弥生	包蔵地		
353	柚ノ木遺跡	硯川町市迫	縄文・古墳	包蔵地		柚ノ木箱式石棺群
354	一丁畑横穴群	硯川町	古墳	古墳		
355	山川窯跡群	下硯川	古代	生産		
356	鶴羽田古墳参考地	下硯川	古墳	古墳		
357	豆尾横穴群	硯川　東屋敷				
358	飛田遺跡群	飛田町塔の木など	縄文～古墳	包蔵地		飛田塔の木遺跡・飛田上ノ原遺跡・飛田葉山塚古墳 葉山古墳調査報告書あり
359	六反畑横穴群	下硯川町	古墳	古墳		
360	四方寄	四方寄町	縄文	包蔵地		村上屋敷板碑 縄文後晩大集落、調査あり
361	御馬下の角小屋	四方寄町	江戸	建造物	市	細川、島津の参勤交代休憩所
362	弁天山磐座	野々島　野々島	古代	祭祀		
363	四方寄六地蔵 庚申塔	四方寄町外屋敷	中世	石造物	市	地蔵文明年間、九州でも希有の塔、庚申天和元年銘
364	城ヶ辻城跡	四方寄町城ヶ辻	中世	城		貝塚あり、城主は西牟田常陸守
365	辻横穴群	四方寄町辻	古墳	古墳		
366	竹の下横穴群	鶴羽田町竹の下	古墳	古墳		
367	鶴羽田かぶと塚 古墳	鶴羽田町かぶと塚	古墳	古墳		円墳
368	鶴羽田遺跡	鶴羽田町	縄文～古墳	包蔵地		
369	山際畑	鶴羽田町	縄文～中世	包蔵地		
370	羽田遺跡	鶴羽田町	古代・中世	包蔵地		飛田眼鏡橋
407	尾当阿弥陀堂板碑	改寄町飼根	中世	石造物		天文 16 年
408	楠野かぶと塚古墳	楠野町宮下	古墳	古墳		円墳
409	古墳参考地	楠野町宮下	古墳	古墳		台地の下、水田中に小円墳状の封土あり
410	舞踏堰記碑	北迫町舞足	中世	石造物		
412	花の木観音堂板碑	鹿子木町鹿子木	中世	石造物		
414	崩平横穴群	和泉町崩平	古墳	古墳		
415	赤水城跡	和泉町崩平	中世	城		

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　立石遺跡の範囲での調査区の位置（Fig.1 ～ 4）

立石遺跡群は地形によって大きく３つの区域に分かれ、当該遺跡の北側１/3 付近の字塚の本周辺を南東から北西方向に走る緩やかな谷地形になっている。それを境に北東側の山後遺跡の方から二塚山（石川山）に向かう丘陵までの北側の区域（最高所の標高 84 m）と南側の駅家推定地を含む立石遺跡群中心区域（最高所の標高約 83 m）に分かれている。さらに南側の区域は東西に伸びる谷で区画され、２つの区域（中央区域・南側区域）に分かれている。

今回の調査区は、標高約 79m の緩やかな谷地形（迫地）になっている部分で北側区域と中央区域の境界に位置する地点である。

第２節　調査概要（Fig.5・6）

遺構は２面で検出している。そのうち、１面目はクロボク層（Ⅱ層）とアカホヤ２次堆積層上位（Ⅳ層）の漸移層である（Ⅲ層）で溝を検出している。断面観察からクロボク層上層から検出できることが判明している。出土遺物と溝の配置から近世後期の耕作に伴う区画溝と推定できる。

２面目はアカホヤ２次堆積層中位の面で縄文時代後・晩期を中心とする遺構面である。11 区で深さ約 10cm の円形周溝状遺構が検出されていることと、12 区で弥生時代後期の土器がⅡ・Ⅲ層から出土していることから考えると、その間に弥生時代後期から古代にかけての面があった可能性がある。

11 区では、検出面と埋土から縄文時代と推定している土坑２基、12 区西側・17 区では縄文時代と推定できる土坑７基を検出して、調査区の東側から北西側にかけては縄文時後期から晩期と推定できる土坑を９基検出している。

出土石器としては、石匙が２点、石鏃が 27 点である。剥片の出土点数は 20 点未満であることから、出土石器全体に対して石鏃の割合が多い。

出土土器としては阿高式系土器や、磨消縄文土器から黒色磨研土器にかけての縄文時代後期から晩期のものが中心である。

古代の須恵器・土師器も出土しているが、小片で明らかに流れ込みである。

第３節　基本層序（６・11・12・17 区）（Fig.8・13・22・23）

調査区は、地形的には緩やかな谷地形に位置し、一帯は狭小ながら窪地状を呈する。調査区を中心として、東、西、北方向には漸移的に標高が高くなり、その先の丘陵上では熊本市の調査により弥生時代、古代を主体とした遺構が検出されている。

各調査区において基本層序を把握するため、一定の距離ごとに測点を設け土層堆積の柱状図を作成した。各調査区は近接しており、基本的な堆積は概ね同様であったため、本項で一括して説明することとする。以下、層毎に詳細を述べる。

Ⅰ層：現代の水田、畑地に伴う耕作土。

Ⅱ層：黒褐色及び黒色を呈するシルト層。

当層中より　掘り込まれた遺構（溝状遺構）を検出している。したがって旧表土と理解されるが、下位に堆積する縄文時代後晩期の包含層（Ⅲ層）との境界が明瞭な箇所が多いことから、当該層においても畑地としての土地利用がなされたと解釈している。本層からの出土が確実な遺物はないが、上記溝状遺構は土地区画に関連するものと想定され、同遺構からは近世後期の遺物が出土する。したがって、本層はⅢ層の堆積以後、近世以降に溝状遺構が掘り込まれ畑地等に利用されるまでの間に形成されたと考えられる。

Ⅲ層：灰黄褐色を呈するシルト層。

樹木根による撹乱を顕著に受けており、上位に堆積するⅡ層以降の畑地利用の影響を受けている可能性がある。一方、下位に堆積するⅣ層との境界は曖昧で、漸移的である。本層由来の埋土を持つ遺構（土坑）を検出していることから、本層中に遺構面が存在すると考えられる。出土量は少ないが、縄文時代後晩期に比定できる土器を中心に、石鏃、石匙等の石器も出土している。

Ⅳ層：明黄褐色シルト層。

にぶい黄褐色を呈し、色調は比較的多様であるが、粒度的な特徴において差は少なく、アカホヤの二次堆積と推定している。本層から遺物は出土していない。

Ⅴ層：灰褐色を呈するシルト層。

Ⅳ層由来のブロック土に加え、同じく火山灰由来と考えられる灰褐色粗粒砂～シルトブロックを包含する。後者は下位堆積層に由来すると考えられ、本層のあり方は漸移的である。

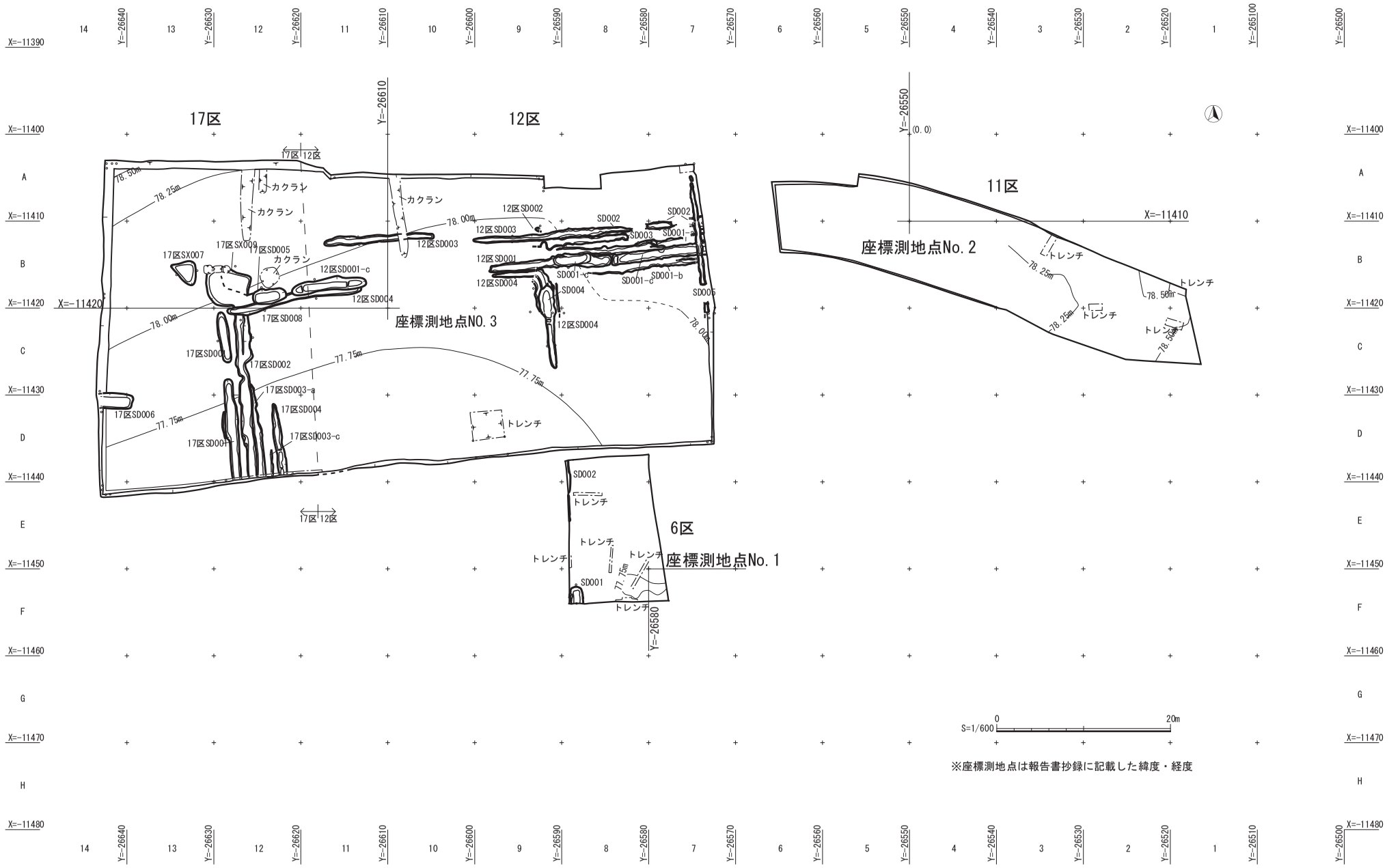


Fig. 5 立石遺跡群Ⅲ層遺構配置図 S=1/600

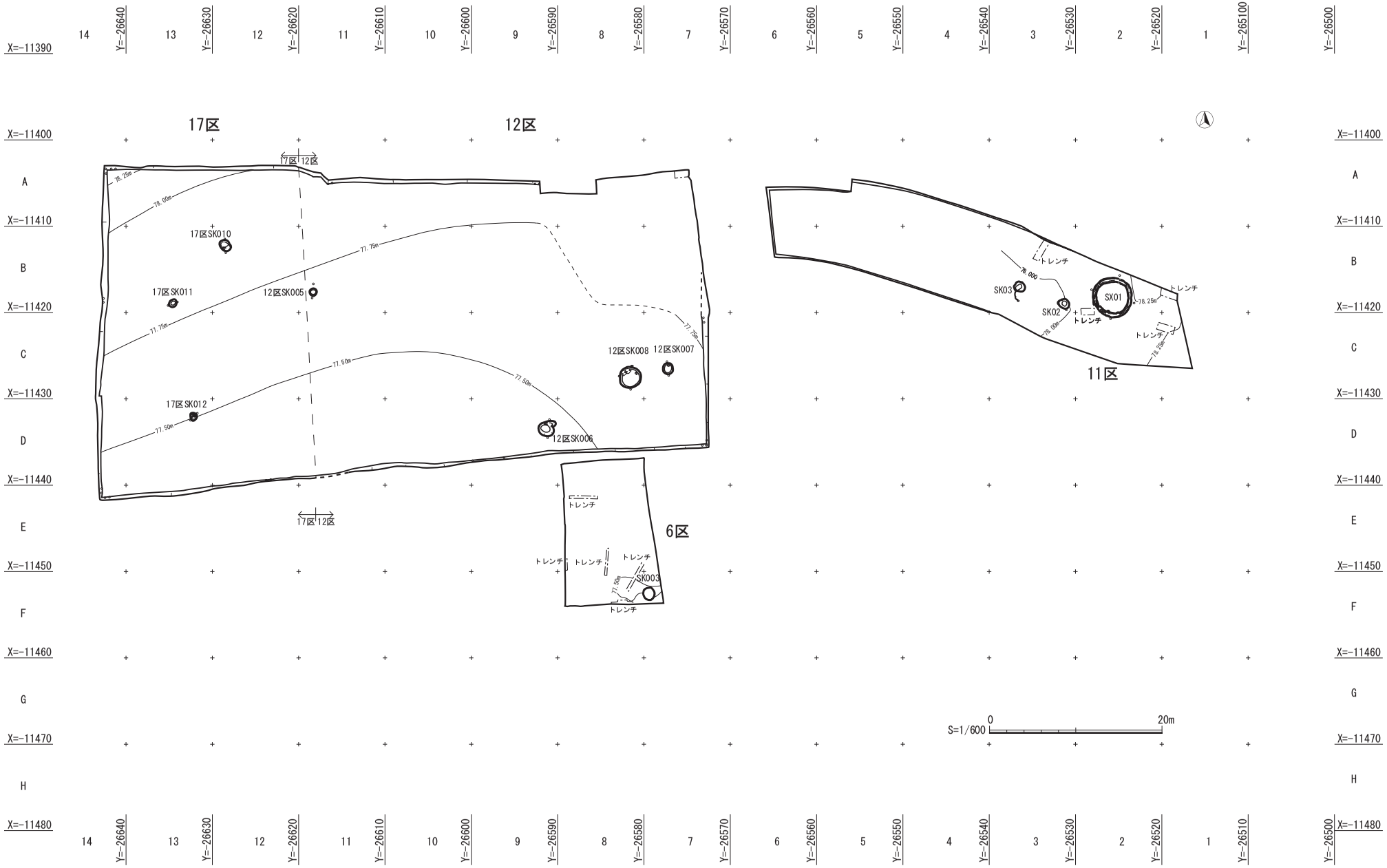


Fig. 6 立石遺跡群IV層遺構配置図 S=1/600

第４節　６区の調査成果

第１項　調査区の概要（Fig.5・6・8・9,PL.1）

当初 S001（SD001）や S002（SD002）が検出されたⅡｂ層（クロボク層とアカホヤ層の漸移層）上面を遺構面としていたが、調査区中央部に遺構がないことから、２つの遺構を残した状態でⅢ層（アカホヤ２次堆積層）上面まで掘り下げた。すると、S003（SK03）が検出されたので、その面を遺構面として検出作業を行ったが、その他の遺構は確認できなかった。Ⅲ層を一部人力で掘削すると、北西部に縄文土器の集中部があったものの、遺構は確認できなかった。このことから、東端を調査対象から外して約 180㎡を調査した。

６区からは土坑１基と溝状遺構１条（見かけ２条）が検出されたのみで、Ⅳ層上面の不整形に異なる色調の土壌が見られた箇所についてトレンチを入れて確認したところ、アカホヤ火山灰の２次堆積内の色調差や風倒木痕であると考えられる。ピットと推定した遺構は樹痕であることが判明した。

第２項　遺構と遺物

SD001（Fig.5・7・8・11,PL. １～３）

F-8・９グリッドのⅡｂ層上面から検出されたが、土層から見ると掘り込み面は検出面より 15㎝ほど高い。クロボク上層から掘り込まれたものと考えられる。断面は、壁から底面にかけて緩やかに傾斜しており、西壁は立ち上がりが急である。底面はほぼ平滑である。南側が調査区外に延びるため全長はわからないが、検出された長さ（南北）で 194㎝、幅は 85㎝、深さは 16㎝を測る。南壁に見られた掘り込み面では、東側が大きく、幅 254㎝を測るが、上位を近代の耕作層に削られているので、本来はまだ大きかったであろう。主軸方向は南北方向で、SD002 と一致するので、削平以前は繋がっていたかもしれない。西側の土層断面や 12 区 SD004、SD003 の一部深くなっている溝の形状を考えると６区 SD001 と SD002 は同一の溝と判断できる。埋土は黒色シルトの水成堆積で、分層できるが大きな差はない。基本的に上下２層に分けられ、２層にアカホヤ２次堆積層を多く含む。

上位から、器壁が薄い、器面ナデ仕上げの瓦片（Fig.7 の１）が出土しているので、近世の所産だろう。

出土遺物（Fig.7 の１）

Fig.7 の１（実 14）は溝の上層から出土したものである。厚さ約 2cm の平瓦で凹面及び側面にいぶしがかかる。桟瓦の可能性もあるが、破片のため不明である。凹凸面ともナデ仕上げで特に凹面に横方向のナデが顕著に残存する。器面に光沢がないことから近世瓦と推定できる。

SD002（Fig.5・8,PL. ２）

D・F-9 グリッドのⅡ層（クロボク層）上面から検出された区画溝で、西壁南側から北壁西端をほぼ南北方向に走る。埋土から見ると掘り込み面は検出面より 20㎝ほど高い。クロボク層上面から掘り込まれたものと考えられる。中央部で途切れて、南北に 141㎝にわたって検出されたが、西壁から見ると中央部の途切れは掘削単位に起因する溝底面の凹凸であり、本来の長さは 136.2㎝である。調査区西壁外に遺構が延びているため、全形はわからないが、検出範囲で、幅は 73㎝以上、深さは 11㎝だが、北壁では幅 89㎝、上位は近代の耕作により削られており、深さは南壁の最深部で 54㎝を測る。上位は近代の削平を受けているものと思われ、本来の規模はわからない。床面は南から北に向かって下がっており、黒色シルト（水成堆積層）が認められる。出土遺物がなく時期を特定できないが、掘り込み面と埋土は SD001 と同じであり、主軸方向が等しいので、同時併存する一連の施設だった可能性が高い。

（遺構の性格）

12 区で検出された SD004 に続く溝と推定できる。SD004 は東西方向に屈曲する手前で深さ 50cm と土坑状に深くなっており、６区 SD001 が深くなっている形状に一致する。

SK003（Fig.6・9・10,PL.2・３）

F-7・８グリッドのⅡ層（アカホヤ２次堆積層）から検出された。平面形は円形で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。径 140㎝、深さは 54㎝を測る。底面下と壁沿いにアカホヤの２次堆積層（Ⅳ層）が見られたことから、壁面の崩落の後、窪みを人為的に一挙に埋め戻したことがわかる。出土遺物がなく時期を特定できない。

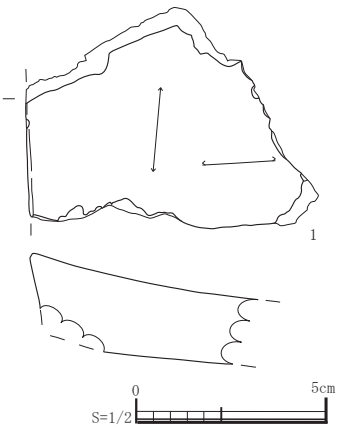


Fig. ７　６区溝 SD001 出土遺物

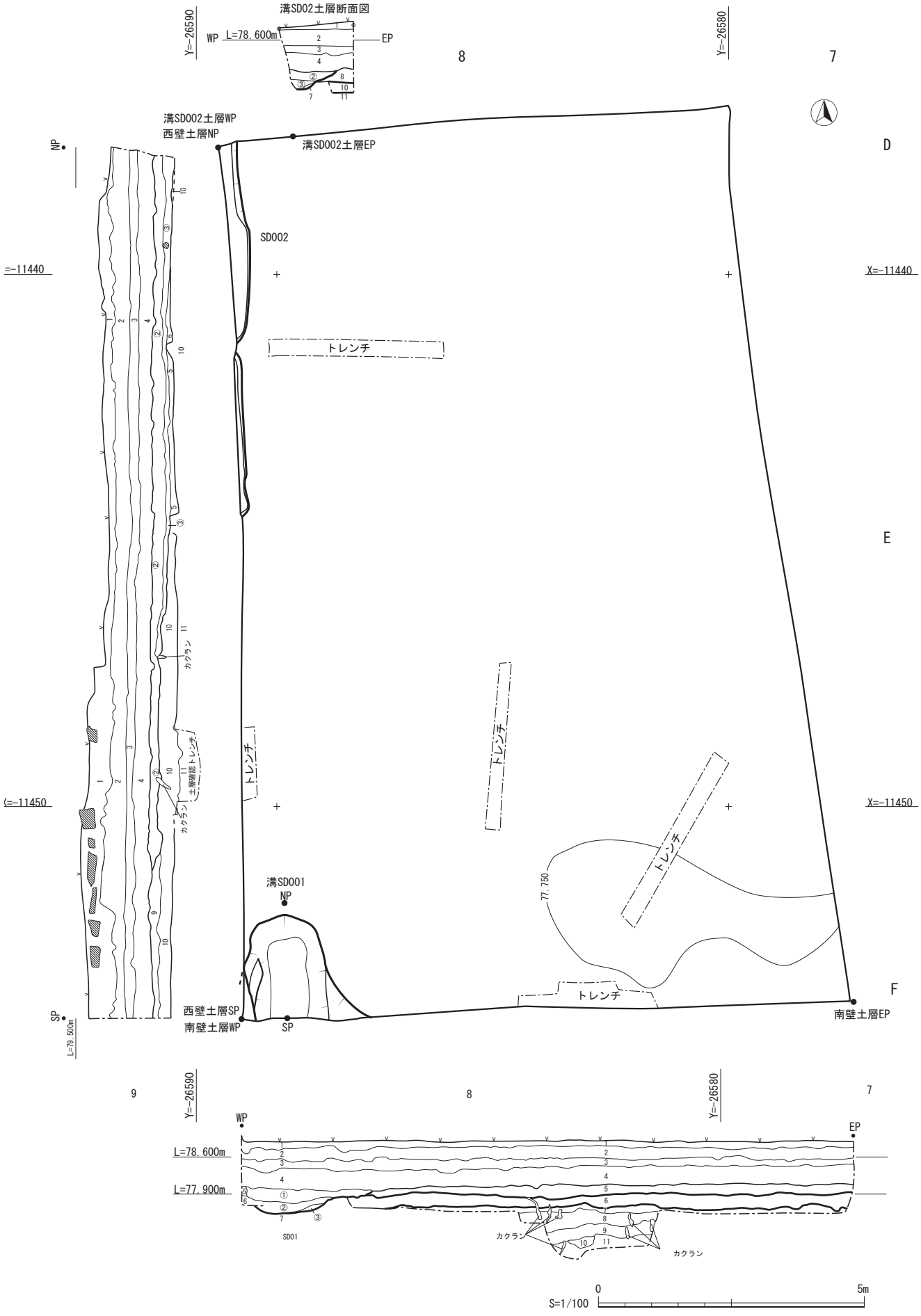
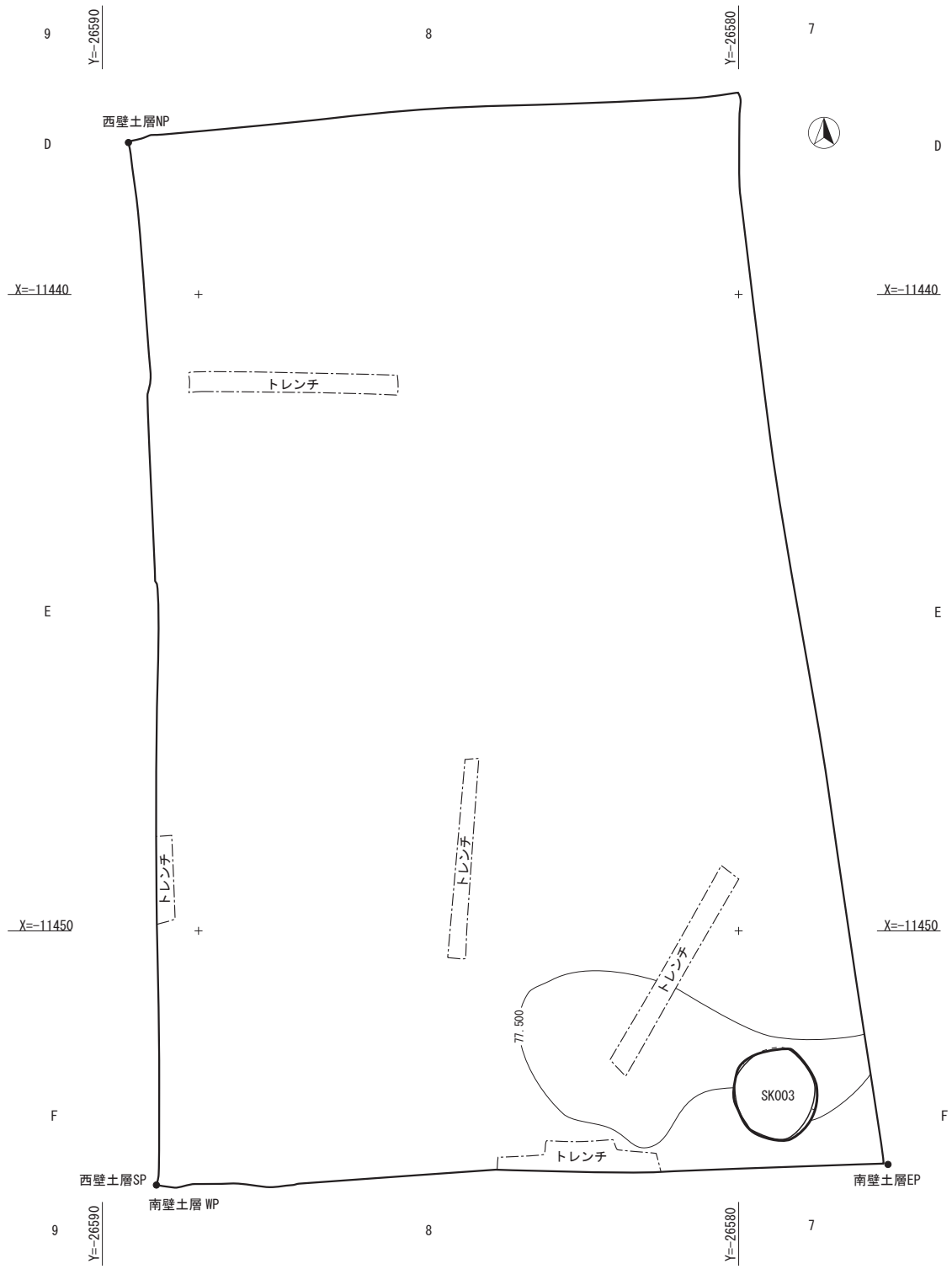


Fig. 8 立石遺跡群 6 区Ⅲ層遺構配置図及び調査区土層断面図 S-1/100



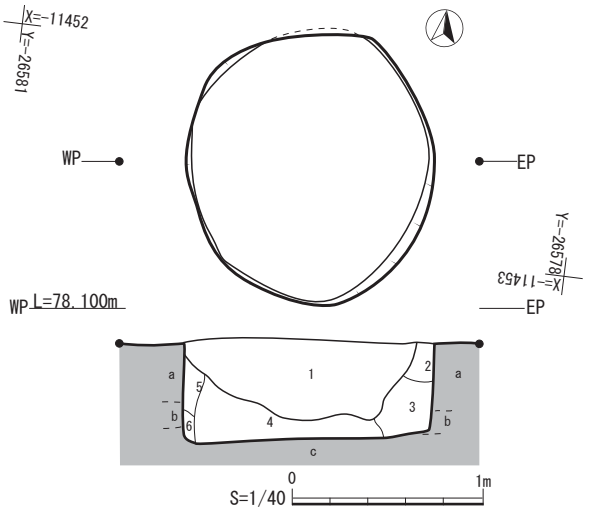
(調査区南壁)

Ⅰ-1　1.にぶい黄褐色シルト(Hue10YR5/3) 表土(耕作土) 土壌化進行
Ⅰ-2　2.灰黄褐色細礫混シルト(Hue10YR4/2) 水田床土か 土壌化進行
Ⅰ-3a　3.褐灰色細礫～シルト(シルト主体)(Hue10YR4/1) 基盤層ブロック(～径5mm)含 近現代農開発に伴う造成土 ややしまる
Ⅰ-3b　4.灰黄褐色細礫混シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径5mm)多含 炭(～径1cm)少含 近現代農地開発に伴う造成土
Ⅱ　5.黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径1cm)僅少含 いわゆるクロボクに該当する堆積か
Ⅲ　6.にぶい黄褐色シルト(Hue10YR5/3) 基盤層ブロック(～径1cm)少含 上位の8層 下位の10層との境界がやや曖昧な箇所有 縄文後晩期の遺物包含
Ⅳ-1　7.にぶい黄褐色シルト(Hue10YR5/4) アカホヤの二次堆積層 9層から漸移的に色調が変化 当層にて最終的な遺構確認 以下、遺物出土は認められていない
Ⅳ-2　8.にぶい黄橙色細粒砂～粘土(シルト主体)(Hue10YR6/4) アカホヤの二次堆積層
Ⅳ-3　9.にぶい黄橙色シルト～粘土(粘土主体)(Hue10YR6/4) アカホヤの二次堆積層 礫(～径1cm程度、火山砕屑物由来)少含
Ⅳ-4　10.明黄褐色シルト～粘土(粘土主体)(Hue10YR6/6) アカホヤの二次堆積層 礫(～径1cm程度、火山砕屑物由来)少含
Ⅴ　11.褐灰色シルト(Hue10YR5/1) アカホヤ由来のブロック(～径1cm)含 褐灰色粗粒砂～シルトブロック(シルト主体)(Hue10YR5/1)(～径5cm;ニガ白由来)含
アカホヤ二次堆積と下位のニガ白堆積との中間層か

溝SD01埋土
①.黒褐色シルト(Hue10YR3/1) 基盤層ブロック(～径1cm)少含 炭(～径1cm)少含
②.黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径5cm)少含
③.黒褐色シルト(Hue10YR3/1) 基盤層ブロック(～径4cm:径1～3cm主体)多含

溝SD02埋土
④.黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径1cm)少含
⑤.黒褐色シルト(Hue10YR3/1) 基盤層ブロック(～径3cm:～径1cm主体)少含
⑥.灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径5mm)多含

Fig.9 立石遺跡群 6 区Ⅳ層遺構配置図及び調査区土層断面図 S-1/100



1. 灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2)
基盤層ブロック(～径1cm)多含 炭(～径1cm)僅少含 細礫僅少含
2. にぶい黄褐色シルト(Hue10YR5/3)
基盤層ブロック(～径1cm)僅少含 炭(～径1cm)僅少含
3. 灰黄褐色シルト(Hue10YR5/2)
基盤層ブロック(b層由来:～径4cm)含 基盤層ブロック
(c層由来:～径2cm)少含 炭(～径1cm)僅少含
4. 灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2)
基盤層ブロック(c層由来:～径3cm:～径1cm主体)少含 炭(～径1cm)僅少
5. 灰黄褐色シルト(Hue10YR5/2)
基盤層ブロック(b層由来:～径1cm)少含 炭(～径1cm)少含
6. にぶい黄褐色シルト(Hue10YR5/3)
基盤層ブロック(c層由来:～径2cm)少含

a. にぶい褐色シルト(Hue7.5YR5/3) アカホヤの二次堆積(漸移層)
b. にぶい黄褐色シルト(Hue10YR6/4) アカホヤの二次堆積
c. 褐灰色粗粒～シルト(シルト主体)(Hue10YR4/1)
アカホヤブロック(～径2cm)含 ニガ白の二次堆積を主体とする中間層

Fig.10　6区土坑 SK003 平面・断面図

第3項　遺物包含層他の遺物（Fig.11・12）

①縄文時代の遺物

ア　石器

Fig.11 の1（実7）は、SD001 の埋土中位から出土した流れ込みの遺物で、西北九州産黒曜石製石鏃である。脚先がわずかに欠失している。2～3mm 幅の細かい調整剥離を施しており、先端・脚先は特に細かい調整で尖る。側縁はやや内湾している。表面左側縁の使用痕が顕著である。

Fig.11 の2（実3）は、表土剥ぎ時に出土した石鏃である。針尾産黒曜石製で、先端の欠損は新しい。一方の脚先折れは使用によるものと推定できる。脚先は丸みを持つ。側縁は3～4mm 幅の調整剥離を施している。両側縁とも外湾し、逆 Y 字状を呈する。

Fig.11 の3（実6）は、包含層出土のサヌカイト製の石鏃で、先端を欠失している。素材剥片の打点を右下方に置き、基部及び右側縁では打瘤部を除去するよう調整剥離を施す。左側縁は素材剥片の剥離面を大きく残す。

イ　土器

Fig.12 の2（実8）は、表土剥ぎ時に出土した浅鉢形土器の口縁部で、口縁部が丸みを持って内傾する。調整は外面は丁寧なミガキ、内面はミガキであるが一部ナデ調整が残存する。

Fig.12 の3（実7）は、Ⅲ層から出土した浅鉢口縁部片で、口唇部に2条の凹線と上下端に左上がりの擬縄文が入る。

Fig.12 の4（実 10）は、Ⅲ層から出土した浅鉢形土器の胴部片で、「く」字形に屈曲し、肩部に沈線で方形に区画された中に縄文が入り、区画の角には刺突文が入る。

Fig.12 の5（実9）は、包含層出土の精製浅鉢の胴部片で、外面はミガキ調整を施している。屈曲部には1条の沈線を施している。内面はミガキ調整である。

Fig.12 の6（実5）は、Ⅲ層から出土した黒色磨研土器の頸部で器形はほぼ直立し口縁部が内傾する深鉢形土器で、横方向の丁寧なミガキが入る精製土器である。頸部の屈曲する部分に稜が観察できる。その上方5mm 程の部分に斜め下方からの沈線が残存する。屈曲部上位には外面に丁寧な左上がりの縦方向のミガキが残存する。屈曲部下位は横方向のミガキが観察できる。

Fig12 の7（実6）は、Ⅱ～Ⅲ層より出土した粗製深鉢形土器の胴部片で、器壁が厚いので大形品であろう。横方向の条痕による調整が残存する。

Fig.12 の8（実2）は、Ⅱ～Ⅲ層より出土した黒色磨研土器の精製の深鉢形土器の肩部片で、頸部がほぼ直立し、頸部と肩部の不明瞭な境界部にヘラによる沈線が施され、微隆起状の段が残存する。その他の外面は丁寧な横方向のミガキで調整されている。内面もミガキ調整と考えられるが、器面が摩滅により不明なところが大きい。晩期後半の深鉢で弥生時代前期の壺へとつながる系譜のものである。

Fig.12 の9（実1）は、遺物包含層出土の黒色磨研系土器浅鉢形土器の底部片で、上げ底タイプのものである。外底部までミガキの入る精製土器である。外底面の底部中央は、一定方向のミガキを施した後、径に沿ってミガ

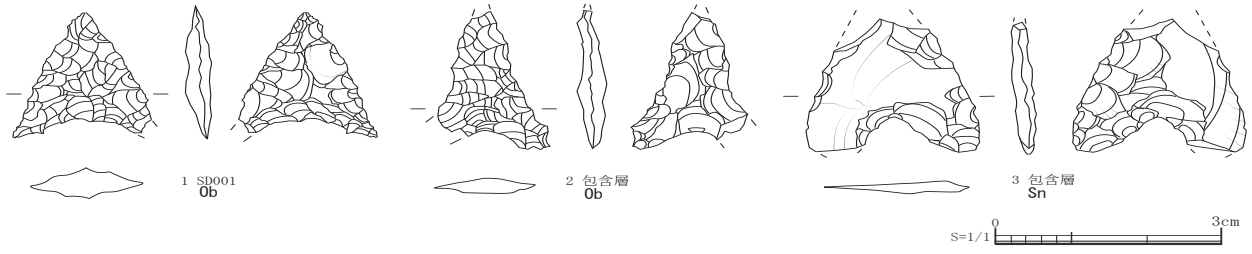


Fig.11　6区調査区内出土遺物（石鏃）

キが３重に残存する。内面は、底部に指頭圧痕が残存するが、その他は横方向及び縦方向のミガキ調整である。

Fig.12 の 10（実 11）は、Ⅱ～Ⅲ層より出土した小形の深鉢形土器で、口縁部が欠損しているが頸部から底部までは接合できた。内外面ミガキ仕上げの精製土器で、胴部の屈曲を境に頸部までは横ミガキ、底部までは縦ミガキである。

Fig.12 の 3・4 は、西平式から太郎迫式、Fig.12 の 5・6・7・8・9 は御領式から天城式に属することから、縄文土器は大きく 2 時期に分かれるものと考えられる。

②古代の遺物

土器

Fig.12 の 11（実 17）は、摩滅が顕著であるが、表土出土で土師器の底部片である。底部から体部に変化する部分にナデによる凹面を持つ。回転台土師器である。太宰府編年Ⅴ期並行期、網田編年Ⅴ期並行期と推定されヘラ切り調整で８世紀末から９世紀初頭にさかのぼる。流れ込みの土器である。

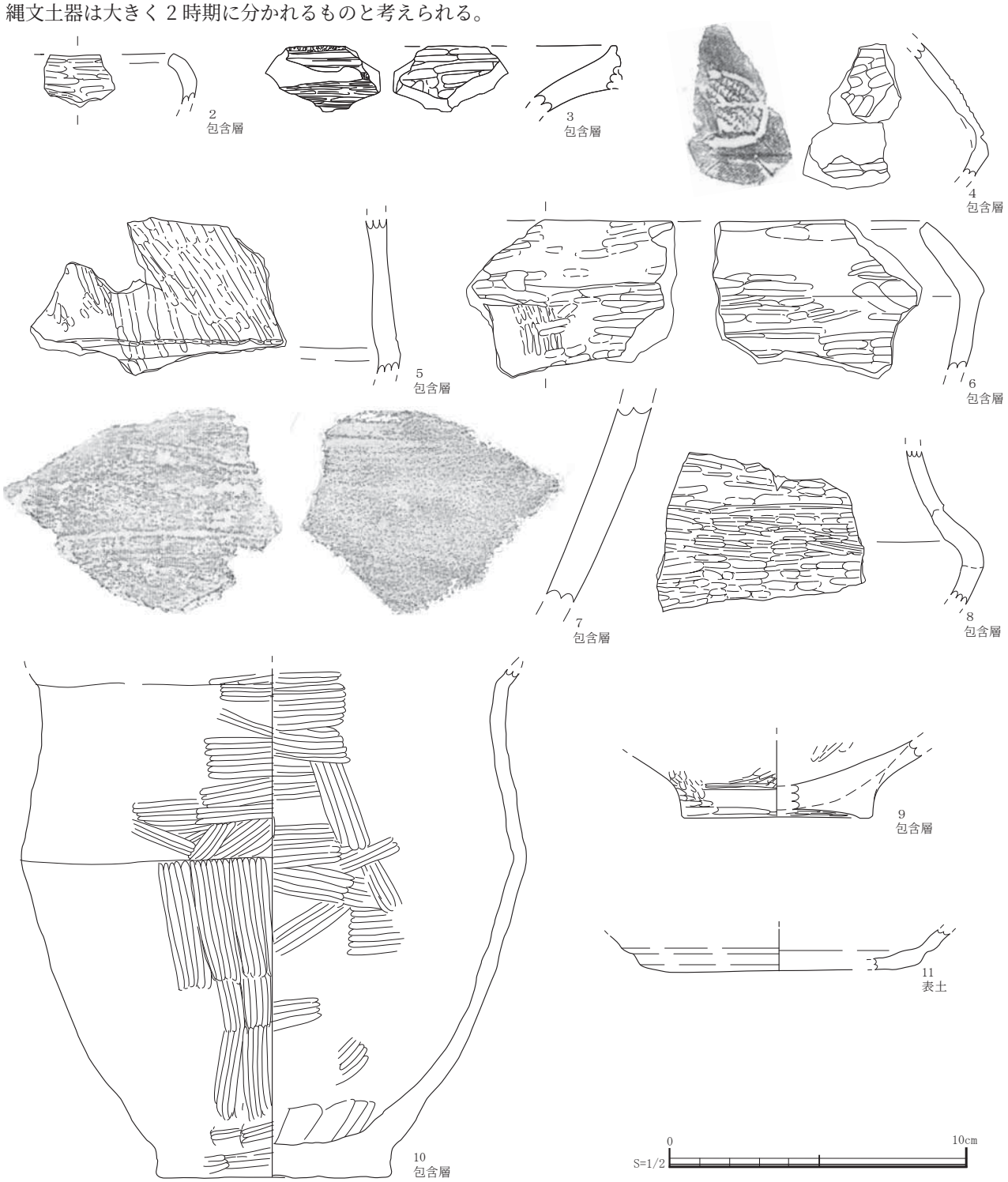


Fig.12　6 区調査区内出土遺物

第５節　11 区の調査成果

第１項　調査区の概要（Fig.13・14・15 ,PL.3・4・５）

１層（Ⅱｂ層）（クロボク層とアカホヤ２次堆積層の漸移層）上面の遺構に溝状遺構があったが、非常に浅く残りが悪く平面的に検出することが困難だったことから、２層（Ⅳ層）（アカホヤ２次堆積層２層目）上面まで掘り下げて遺構検出面とした。それでも、遺構がほとんど確認できなかったので、北端と南端を調査対象から外し、約 500 ㎡を調査した。

11 区からは、土坑２基と円形周溝状遺構１基が検出された。ピット状のものは、樹痕のみで、人為的な柱穴は見られなかった。

遺構は、調査区東半分の東側丘陵に向かって高くなっている箇所にあり、西側のやや低くなった部分からは遺構は検出できなかった。

第２項　遺構と遺物（Fig.6・15 ～ 18,PL. 3 ～ 5・12・16）

SX01（円形周溝状遺構）（Fig.16,PL.3・4）

B･C-3 グリッドの２層（Ⅳ層）（アカホヤ２次堆積層２面）から検出された。平面形は環形の円形周溝状遺構で、外径 460㎝、内径で 360㎝、深さは深い所でも 10㎝ほどしかない。一部途切れているところがあるが、床面の凹凸のためで、本来は繋がっていただろう。溝の深さから考えて本来はⅡｂ層もしくはⅢ層上面で検出されたと推定できる。

埋土は黒色シルトのほぼ単一層で、水成堆積と見られる。出土遺物がなく時期を特定できない。

SK002（Fig.15・17,Pl.5）

B-3 グリッドの２層（Ⅳ層）（アカホヤ２次堆積層２面）から検出された。平面形は楕円形である。壁は中位までほぼ直立し、上位はやや傾く。床面はほぼ平坦だが、中央部が下がる。長軸 136㎝、短軸 108㎝、深さ 116㎝を測る。中位までは人為的に埋め戻されたと見られる。ブロック状の堆積層が見られたが、その土層記録後に、壁側と下位にアカホヤ火山灰の２次堆積層（Ⅳ層）由来の自然堆積層と壁面の崩落土があることがわかり掘り下げたので、その部分は記録できなかった。出土遺物は、長さ 2.5cm、厚さ 7mm の礫面を残す濃青色のチャートの剥片が出土しているが、流れ込みの遺物でこの土坑に伴うものではない。時期を特定できない。

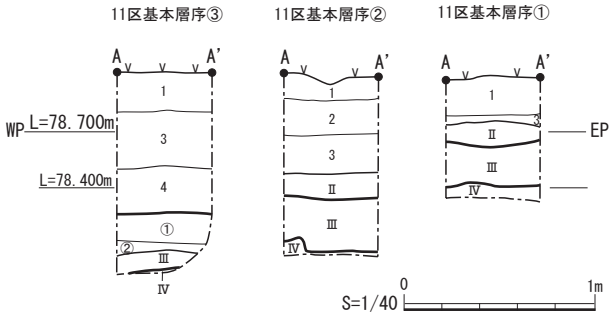
SK003（Fig.15・18,Pl.4・5）

B･C-3 グリッドの２層（Ⅳ層）（アカホヤ２次堆積層２面）から検出された。検出時には楕円形に見えたが、南側はアカホヤ火山灰の２次堆積層（Ⅳ層）であったので平面形は略円形である。壁は急に立ち上がるが凹凸が多く、床面はほぼ平坦である。長軸 126㎝、短軸 122㎝、深さ 108㎝を測る。中位まで南側から自然堆積した後、壁面が崩落する時期を挟んで、上位層が堆積している。出土遺物がなく時期を特定できない。

第３項　遺物包含層他の遺物（Fig.14・19,PL.12・23）

①旧石器時代（Fig.14,PL.12）

Fig.14 の１（実 10）は表土剥ぎ時出土の三面に調整を施した三稜尖頭器（角錐状石器）である。長さ約５cm で、尖端部は欠損している。主要剥離面側のうち、基部側に調整が加えられることが特徴である。表面左側面に素材剥片のネガ面、裏面の剥離面に素材剥片のポジ面が認められることから、厚みのある縦長剥片を素材としている。表面の稜状加工は、右側縁から左側縁方向にのみ限られていることや、裏面側に剥離が切られていること、石核段階の剥離が残っていることから、打面転移を繰り返す AT 上位に特



1. 灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 耕作土
2. 灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2)上層よりしまる
3. 灰黄褐色細礫～シルト(シルト主体)(Hue10YR5/2)
基盤層ブロック(～径5mm)含 ややしまる 床土
4. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～5mm)含 畑作に関わる堆積か
Ⅱ. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～5mm) 少含
Ⅲ. 灰黄褐色シルト(Hue10YR5/2) クロボク下の遺物包含層
Ⅳ. 明黄褐色シルト(Hue10YR6/6) アカホヤの二次堆積 基盤層

遺構埋土
①. 黒褐色シルト(Hue10YR3/1) 基盤層ブロック(～径5mm)僅少含
②. 褐灰色シルト(Hue10YR4/1) 基盤層ブロック(～径3cm:～径1cm主体)
多含 ややしまる
*南北方向に延びる浅い溝状遺構か 平面的には検出できていない

Fig.13　11 区基本層序①～③断面図

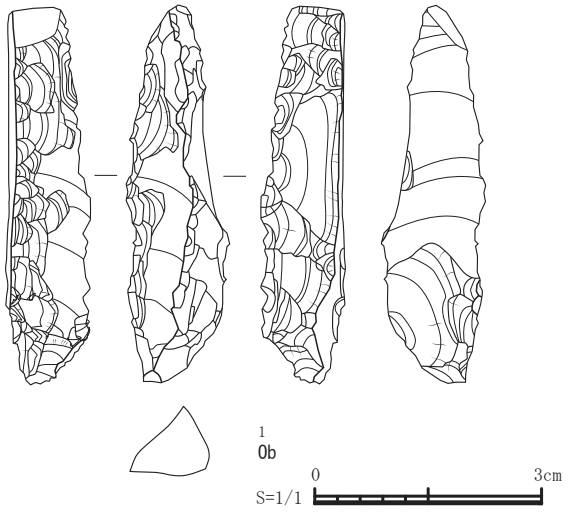


Fig.14　11 区調査区内出土遺物実測図 (石器）

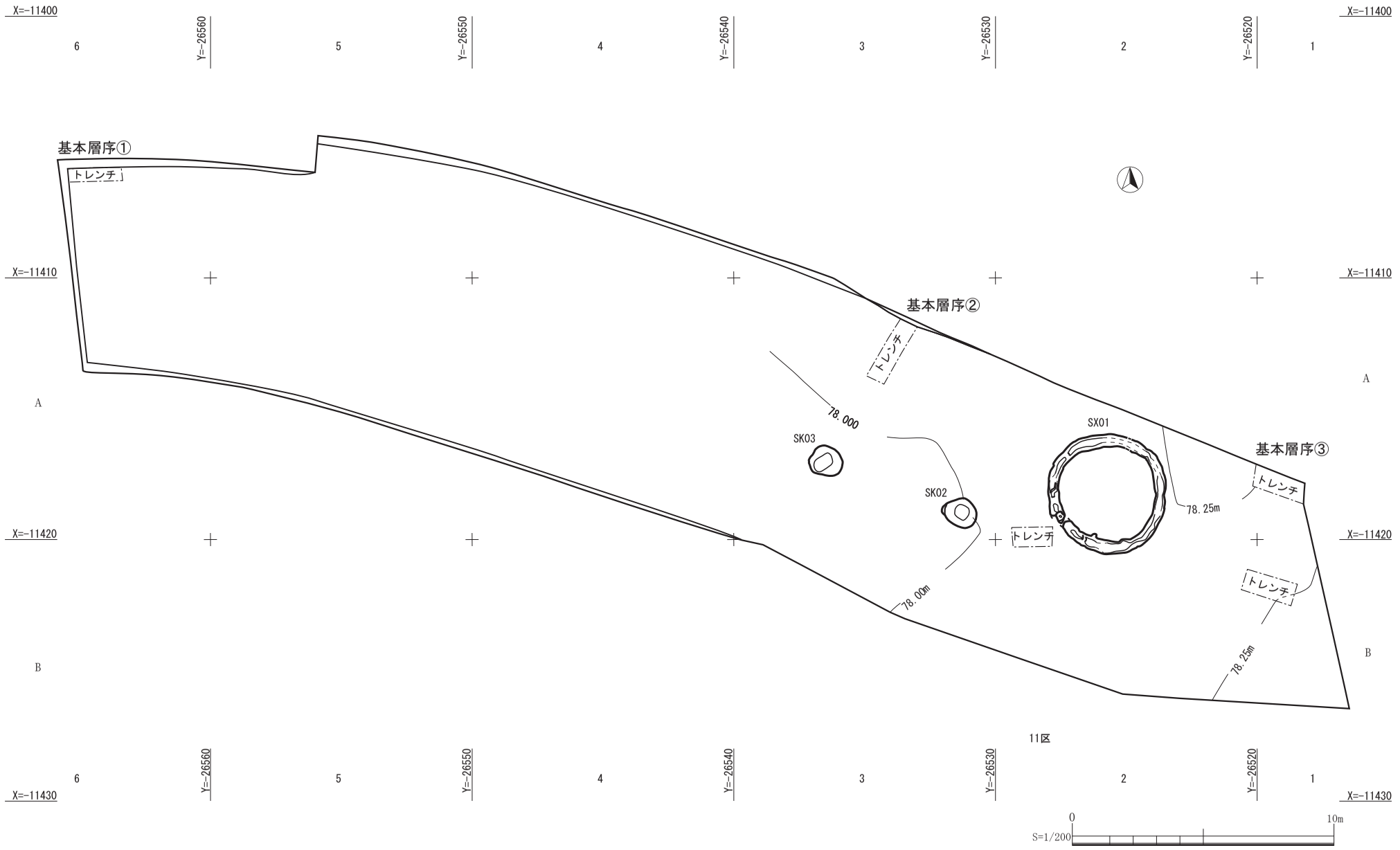


Fig.15 立石遺跡群 11 区遺構配置図 S=1/200

徴的な厚みのある不定形幅広剥片が想定されるが、本剥片は偶然取られた縦長剥片を用いている。
基部側の加工は、表面右側縁には認められない。尖端側は表面側にのみ入念な加工を施す。尖端部は使用による折れでの古い欠損と考えられる。新しい欠損部分でガラス質が観察でき、針尾産黒曜石と推定できる。搬入石材である。

②縄文時代

ア　石器

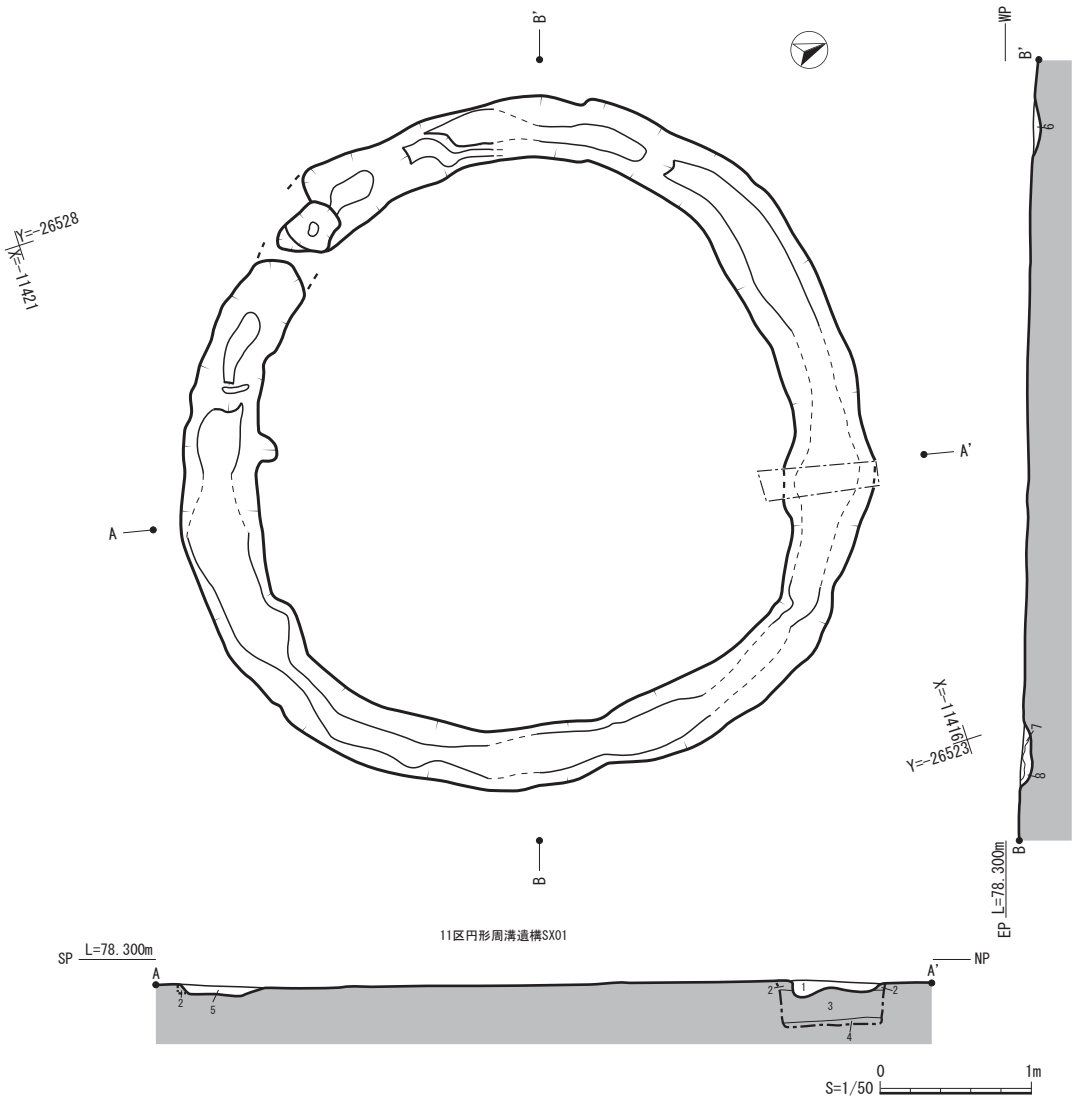
11 区からは、厚さ 2mm、長さ 12mm の微細剥片が１点出土している。

イ　土器（Fig.19,PL.16）

Fig.19 の１（実４）は、全体にナデ調整で一部ミガキで整形されている痕跡が残存する。上部は、粘土紐の接合痕の可能性もあり、底径 5.2cm、高さ 2.1cm 残存する。ミニチュアの浅鉢・器台・台付鉢の可能性がある。手捏ねで制作されており、粘土を中央に充填している技法である。

一方、現状で上方が接合痕でなく生きているとすれば、一方の径 5.2cm、他方の径 3.8cm、幅 2.1cm の土製の耳栓状耳飾りと考えられる。

ここでは、後者の考えを採用したい。



1. にぶい黄色シルト(Hue2.5Y6/3) 褐灰色シルトブロック(Hue10YR6/1)(～径1mm)含 2～4は基盤層のアカホヤ二次堆積層
2. 浅黄色シルト(Hue2.5Y7/4) 褐灰色シルトブロック(Hue10YR6/1)(～径1mm)含
3. 灰黄褐色シルト(Hue10YR5/2) 褐灰色シルトブロック(Hue10YR6/1)(～径1mm)含 下位は、にぶい黄橙色(Hue10YR6/4)に漸移変化
4. 明黄褐色シルト(Hue10YR7/6) 褐灰色シルトブロック(Hue10YR6/1)(～径1mm)含
5. にぶい黄褐色シルト(Hue10YR4/3) 褐灰色シルトブロック(Hue10YR6/1)(～径1mm)含
6. にぶい黄褐色シルト(Hue10YR5/3) 褐灰色シルトブロック(Hue10YR6/1)(～径1mm)含
7. にぶい黄褐色シルト(Hue10YR5/3) 褐灰色シルトブロック(Hue10YR6/1)(～径1mm)含
8. にぶい黄褐色シルト(Hue10YR4/3) 褐灰色シルトブロック(Hue10YR6/1)(～径1mm)含
7～8は漸移変化

Fig.16　11 区円形周溝遺構 SX001 平面・断面図

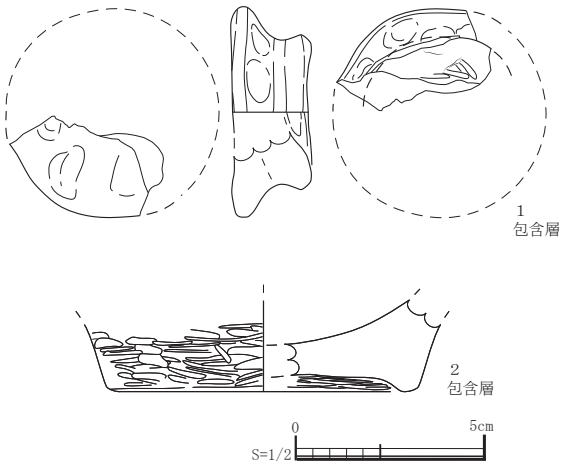
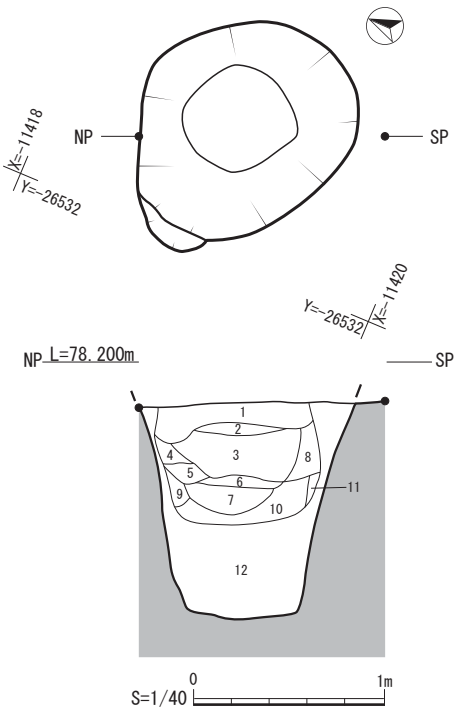


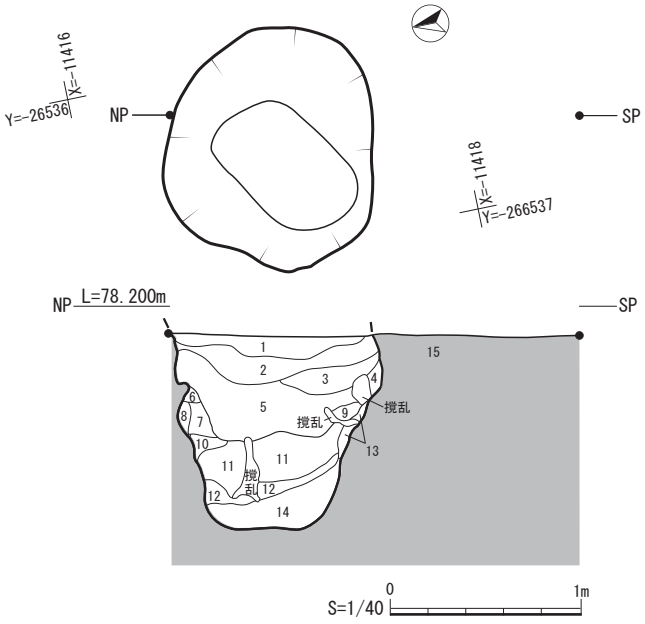
Fig.19 の 2（実 3）は、黒色磨研土器の精製土器で、底部である。上げ底で外面は横方向のミガキを施す。底部の外面は、一定方向のミガキで周縁は外周に沿ってミガキを施す。内底面には、炭化物の付着が見られる。黒色磨研土器の御領式から天城式で、ほかの土器は時期を特定できない。

Fig.19　11 区調査区内出土遺物実測図



1. にぶい黄褐色シルト(Hue10YR5/3) 基盤層ブロック(～径3cm)少含
2. にぶい黄褐色シルト(Hue10YR5/3) 基盤層ブロック(～径1cm)含
   中礫(～径8mm)少含
3. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径5mm)僅少含
   炭(～径1cm)僅少含
4. 灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径1cm)少含
5. 黒褐色シルト(Hue10YR3/1) 基盤層ブロック(～径1cm)僅少含
6. 灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径5mm)少含
7. 黒褐色シルト(Hue10YR3/1) 基盤層ブロック(～径5mm)僅少含
8. 灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径5mm)少含
   樹木根の影響を受け、ややゆるい
9. 黒褐色シルト(Hue10YR3/1) 基盤層ブロック(～径2cm)含
10. 灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径5cm、～径2cm主体)
    多含 ややしまる
11. 灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径5mm)含
    ややゆるい
12. 土色不詳 (SK03に近い堆積と推定：SK03土色11～14参照)

Fig. 17　11 区土坑 SK002 平面・断面図



1. 褐色シルト(Hue10YR4/4) 基盤層ブロック(～径1cm)少含
2. 灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径1cm)少含
3. にぶい黄褐色シルト(Hue10YR4/3) 基盤層ブロック(～径1cm)少含
4. 灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径5mm)少含
   黒褐色シルトブロック(Hue10YR3/2)(～径1cm)少含
5. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径1cm)少含　炭(～径1cm)少含
6. 灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径5mm)少含
7. 灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径1cm)少含
   黒褐色シルトブロック(Hue10YR3/2)(～径1cm)少含
8. 灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径2cm、～径1cm主体)含 ややゆるい
9. 明黄褐色中粒砂～シルト(シルト主体)(Hue10YR7/6)
   灰黄褐色シルトブロック(Hue10YR5/2)(～径2cm)少含基盤層由来土が主体となる堆積
10. 明黄褐色シルト(Hue10YR7/6) 灰黄褐色シルトブロック(Hue10YR5/2)(～径3cm)少含
    基盤層由来土が主体となる堆積
11. 灰黄褐色シルト(Hue10YR5/2) 基盤層ブロック(～径5cm、～径2cm主体)多含
12. 灰黄褐色シルト(Hue10YR5/2) 基盤層ブロック(～径1cm)少含 ややしまる
13. にぶい黄褐色シルト(Hue10YR5/3) 基盤層ブロック(～径1cm)多含
14. 明黄褐色粗粒砂～シルト(シルト主体)(Hue10YR7/6)
    灰黄褐色シルトブロック(Hue10YR5/2)(～径1cm)少含 ややしまる
    基盤層由来土を主体とする堆積
15. 灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径1cm)少含(自然の落ち込み)

Fig.18　11 区土坑 SK003 平面・断面図

③弥生時代

図化できなかったが、弥生土器の甕の胴部片が出土している。外面は、横方向の叩きを縦方向の細かいハケ調整で消しているもので、外面はススが全面に付着している。内面は、右上がりのハケ目（6 本 /cm）調整が残存する。

④近世

瓦質土器片（PL.27）

PL.23 の Photo.9 は図化できない破片であるが、火鉢等の器形と考えられる破片が出土している。

陶磁器片（PL.27）

Pl.23 の photo.7 は、外面に灰色釉を施した椀の破片が出土している。

Pl.23 の photo.8 は、茶色の鉄釉を施し内面の見込み部分に釉剝ぎが施された肥前系の椀と思われる。

高台外側が削れて高台の断面形が三角形状を呈する肥前系陶器も出土している。

いずれも近世後期のものと考えられる。

12.・17 区のIII層上面で検出される区画溝の続きの溝が埋没する時期のものと考えられる。

第６節　12・17 区の調査成果

第１項　調査区の概要　（Fig.20・21・23 ～ 49,Front.4）

12・17 区は概ね東西方向に連続した調査区で、17 区は 12 区の西側に隣接する。その境界は、南北座標における 11・12 グリッドライン（Y=-26620）付近である。12 区東側には 11 区が、南側には６区が所在し、調査区名は別であるが、地形的に差はなく遺跡としては一括して差し支えない範囲である。調査区の中では、一番低い地形にあたる。調査面積は、12 区が約 1,570㎡、17 区約 1,000㎡である。

第２項　遺構と遺物

ア　III層において検出した遺構（Fig.20･21･24 ～ 32,PL.6･7）

Ⅲ層は､黒褐色を呈するⅡ層下に堆積する遺物包含層で、縄文時代後晩期の遺物が僅かながら出土する。Ⅱ層については、安定した遺存状況ではなく、埋土色調との類似からも遺構検出が困難であったため、Ⅲ層が検出面となった。以下、詳細を述べる。

土地区画溝（Fig.20・21・24 ～ 29,PL.6 ～ 11・15・23）

６・12・17 区に亘り、広範囲に多数検出された溝状遺構群である。各溝状遺構は概ね東西・南北方向を指向し、直交する箇所を有するが、いずれの方向も複数が重複または並走して延びることから、多次にわたる掘削が行われたことが分かる。これら溝状遺構の配置から、土地を平面長方形に区画する意図が窺え、Ⅱ層の特徴も合わせて勘案すれば､畑地に付随する土地区画溝に該当すると考えられる。東側に位置する 11 区では類する遺構は全く検出されず、後世の改変により消失した可能性はあるものの、12 区において東西方向に延びる溝群は、11・12 区間で南北方向に展開すると想定される。（11 区の概要参照）12 区東端を概ね南北方向に走向する SD005 は、切り合い関係から後出し、掘方規模も小さくやや趣を異にするが、当該箇所において南北方向に展開する溝群の一部を為す可能性はある。

東西方向の溝群は、遺存状態が比較的良好なところでは５条の重複ないし並走が確認できる（12 区 SD001-a ～ c･002･003､17 区 SD008）。これらの溝は概ね東西 B グリッド中を延び、17 区における B-12 グリッド付近で南北方向の溝群と交わる。さらに、B- ９グリッド以南においても南北方向の溝（12 区 SD004）の分岐が確認でき、遺存状況不良のため間隙はあるものの、その配置から６区における SD001・002 が一連の遺構として捉えられる。17 区の D-13･14 グリッドにかけて検出された 17 区 SD006 も、東西方向の土地区画溝の一部に該当すると考えられる。

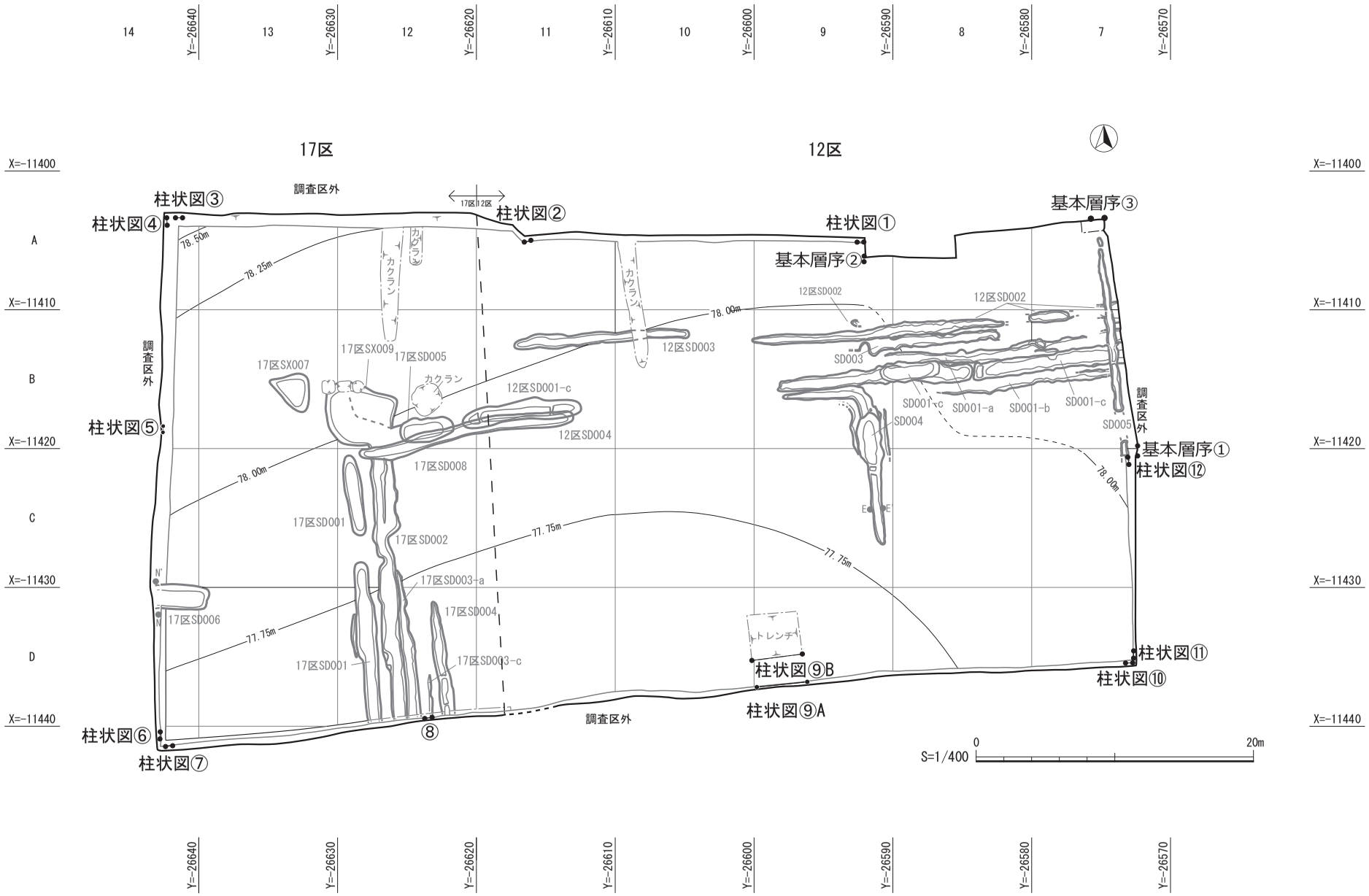


Fig.20 立石遺跡群 12・17 区基本層序ポイント及び柱状図ポイント図

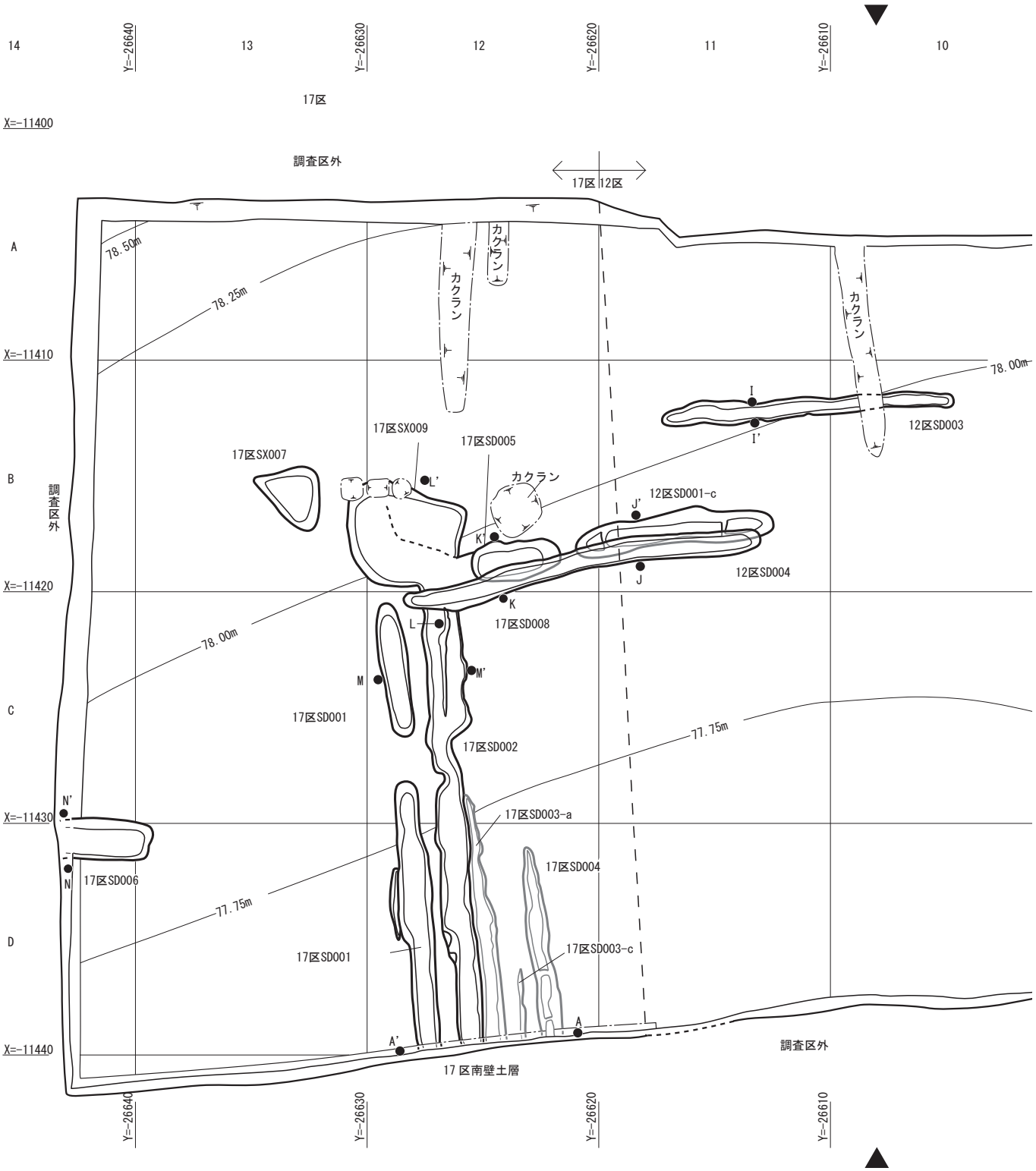
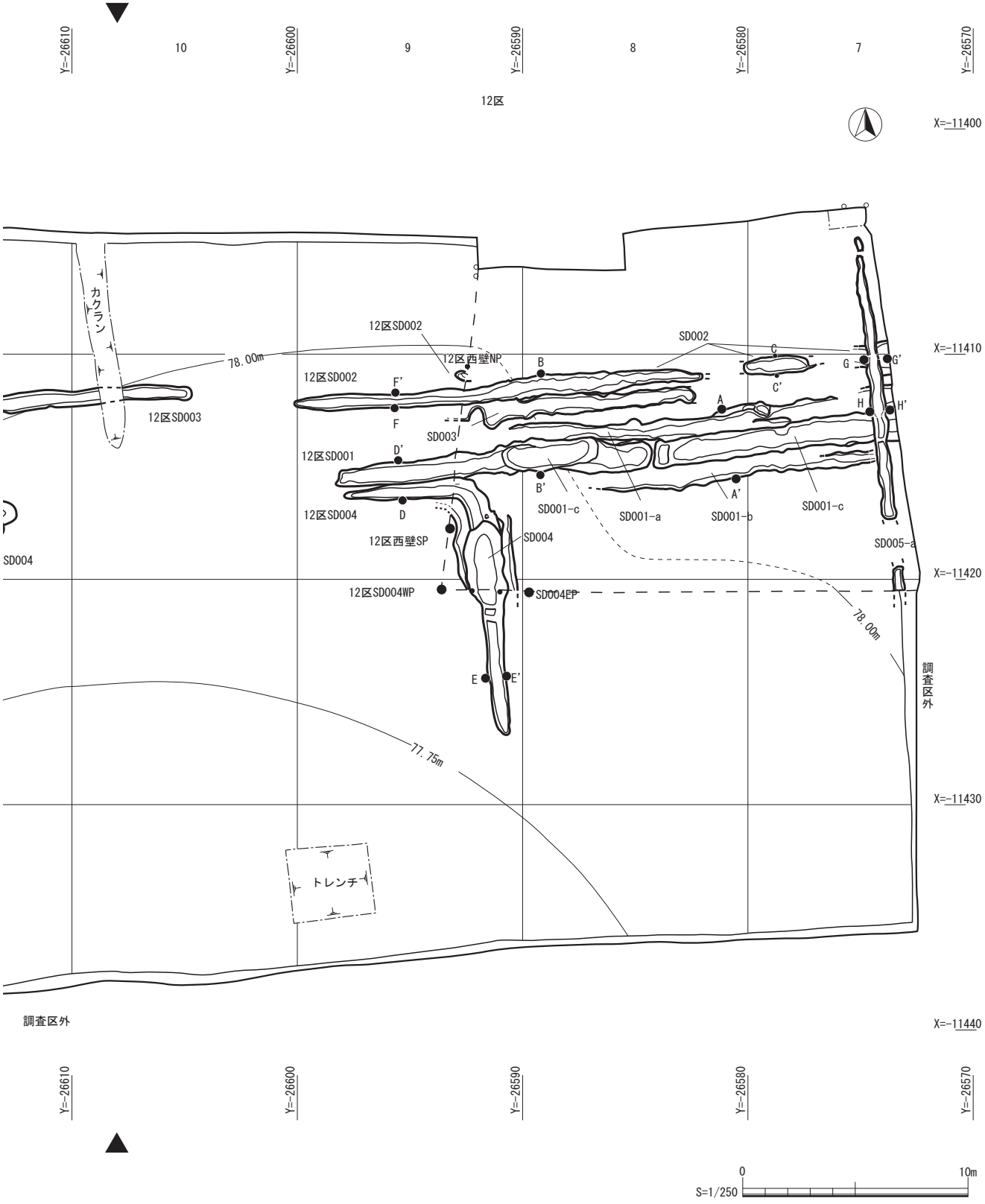
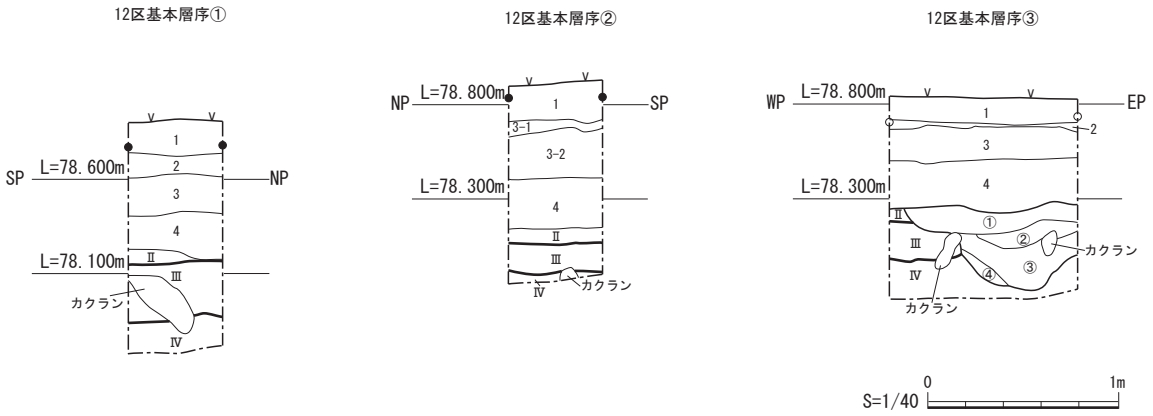


Fig.21 立石遺跡群 12・17 区Ⅲ層遺構配置図　S=1/250



Y=-26610
10
Y=-26600
9
Y=-26590
8
Y=-26580
7
Y=-26570
12区
X=-11400
X=-11410
X=-11420
X=-11430
X=-11440
カクラン
12区SD002
12区西壁NP
SD002
78.00m
12区SD002
12区SD003
SD003
12区SD001
12区SD004
12区西壁SP
SD004
12区SD004WP
SD004EP
SD001-c
SD001-a
SD001-b
SD001-c
SD005-a
78.00m
77.75m
調査区外
トレンチ
調査区外
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
G
G'
H
H'
0
10m
S=1/250



1. 暗褐色シルト（Hue10YR3/3）基盤層ブロック（～径５㎜）多含土壌化進行耕作土
2. 灰黄褐色シルト（Hue10YR4/2）基盤ブロック（～径１㎝）含旧耕作土
3. 灰黄褐色シルト（10YR5/2）基盤ブロック（～径５㎜）少含
3-1.暗褐色シルト(Hue10YR3/3) 基盤層ブロック(～径5㎜)含 ややしまる 床土
3-2.灰黄褐色シルト(Hue10YR5/2) 基盤層ブロック(～径5㎜)含 礫(径5㎜程度)含 ややしまる 床土
4. 灰黄褐色シルト（Hue10YR4/2）基盤ブロック（～径５㎜～１㎝程度）少含　造成土か
5. 黒褐色シルト（Hue10YR3/2）
Ⅱa. 赤褐色シルト（Hue7.5YR2/1）パミス（赤色粒）少ししまりなし
Ⅱb.極暗赤褐色シルト(Hue7.5YR2/2) 赤色粒わずか しまりあり
Ⅲa.黒褐色シルト(Hue10YR2/2) 赤色粒わずか しまりあり
Ⅲb.灰白色シルト(Hue10YR7/1) 赤色粒わずか しまりあり
Ⅲc.黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 赤色粒わずか しまりあり
Ⅳa.暗赤褐色シルト(Hue7.5YR3/3)
Ⅳb.オリーブ黒色シルト(Hue7.5Y3/2) やや粘質 ブロック状に灰色の土 1㎜くらいの赤色粒1%以下
Ⅴ.暗赤色シルト(Hue7.5YR3/4) 粘質が強い 白色粒ごくわずか
Ⅵa.極暗赤褐色シルト(Hue2.5YR4/2) 灰色ブロック土 鉄分状の赤色粒少しあり 間に黄褐色系土粘質土入る
Ⅵb.暗赤褐色シルト(Hue7.5YR3/2) 灰色・白色粒わずかに入る 下層にマンガン粒わずかに入る
Ⅶa.にぶい黄褐色シルト(Hue10YR3/4) 漸移層（Ⅴ1～Ⅴ11）粘質強い(ローム層の漸移層)
Ⅶb.にぶい赤色シルト(Hue7.5YR4/4) ローム層 茶色粘質土 粘土が強い マンガン粒入る 2%くらい

遺構05埋土
①.黒褐色シルト(Hue10YR3/1) 基盤層ブロック(～径5㎜)少含
②.灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径1㎝)少含
③.にぶい黄褐色シルト(Hue10YR5/3) 基盤層ブロック(～径2㎝)少含
④.にぶい黄褐色シルト(Hue10YR5/3) 基盤層ブロック(～径5㎜)含 ややゆるい

Fig.22 立石遺跡群 12・17 区基本層序①～③断面図

南北方向の溝群は、上述の 12 区 SD004・005 のほか、17 区における南北 12・13 グリッド中で５条が確認できる（17 区 SD001・002・003-a・003-c・004）。これら溝群の配置状況は東西方向の溝群と概ね同様と捉えられ、両溝群が土地区画溝として一体のものであることを物語る。また、B-12・13 グリッド以北及び以西は、明確な溝状遺構が検出されなかったが、土坑状の落ち込みとして調査した 17 区 SX007・009 はこれら溝群に対して配置が連続しており、区画溝の一部として認識した方が自然であろう。

各溝の検出面における規模については、深さは 10cm 強に過ぎないものから、深いところでは 76㎝を測る箇所まで多様だが、平均的には 30㎝前後から 50㎝程度となる。同じ溝の中でも 12 区 SD001-c や同 SD004 のように、細長い土坑状に一段深い掘方を持つ箇所が認められ、特徴的である。掘方の遺存状態が不良な溝（12 区 SD003、17 区 SD001 など）において、間隔が開きながらも断続的に検出されるのは、こうした掘方の特徴を反映したものと理解できる。幅については 60 ～ 180cm と開きがあるが、上述したように各溝の遺存状態、深さの違いに拠るところが大きく、全般的には較差はさほど大きくないと考えられる。

埋土は、Ⅱ層由来で黒褐色を呈する堆積が主体となり、Ⅲ層及び基盤層であるⅣ層由来のブロック土が混じる。水成堆積が認められる箇所はない。

これらの溝の分布状況により、区画された敷地は 12 区と 17 区で確認された南北方向の溝群（12 区 SD004、17 区 SD001 ～ 004）により、東西幅を復元すると 30 ～ 35m 程度となる。南北幅は不詳だが現状では 6 区の SD001 まで延びると仮定すれば 37m 以上となる。

出土遺物は僅少であるが、近世以降の陶磁器が最新遺物となり、本調査区周辺における農地開発時期を示すものと考えられる。

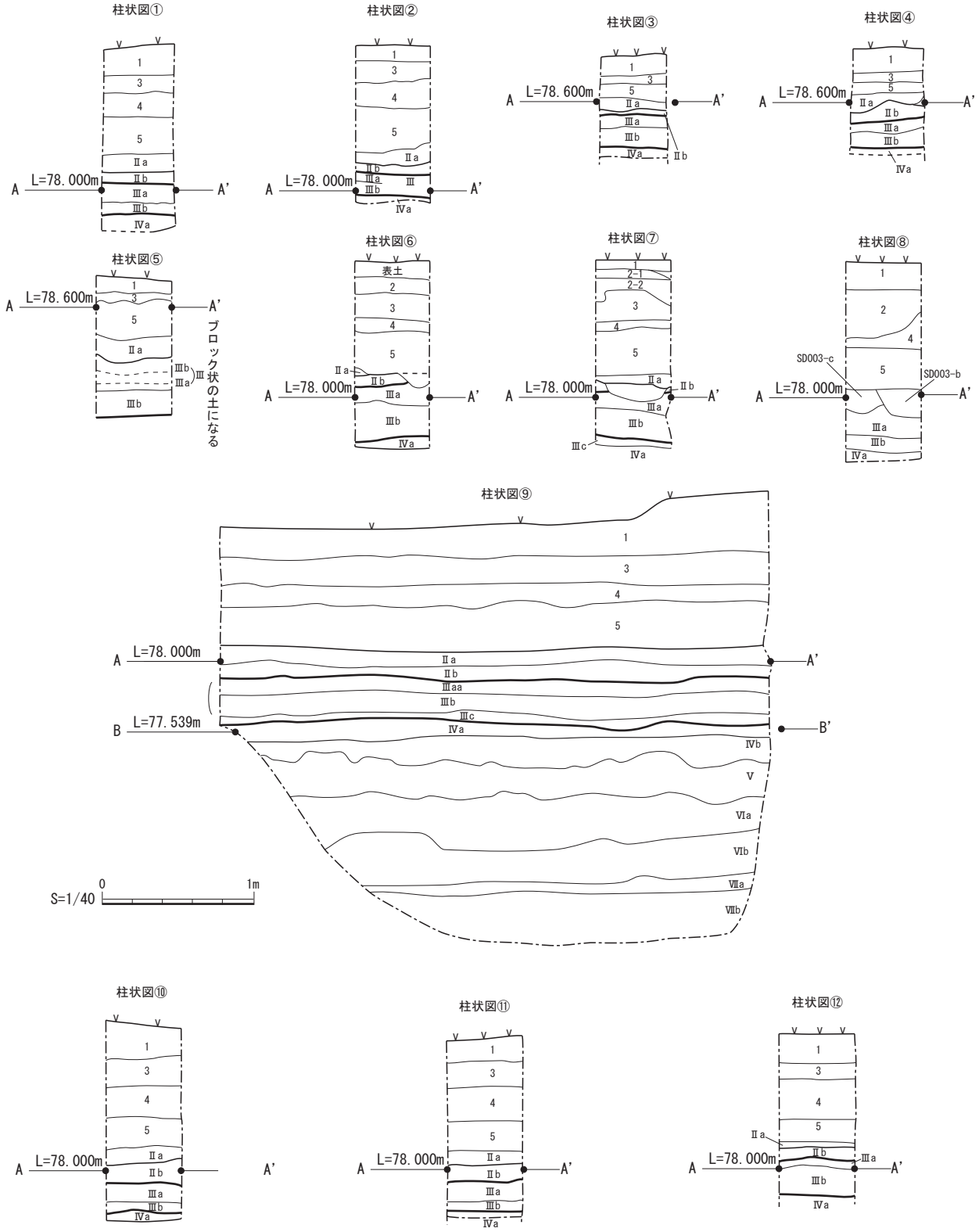


Fig.23 立石遺跡群 12・17 区柱状図

（区画溝からの出土遺物）

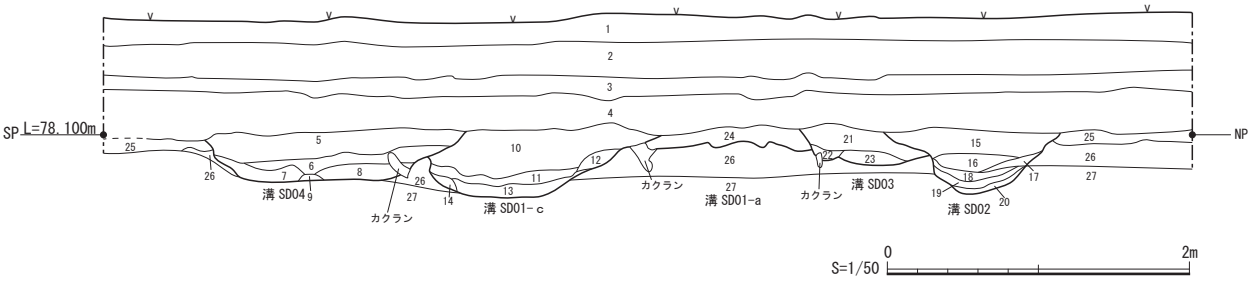
近世陶磁器（Fig.26,Pl.23）

いずれも埋土上層から出土したもので、埋没段階で流れ込んできた遺物である。

Fig.26 の 1（実 44）は、12 区 SD001-c から出土したもので、瓦質土器の火鉢と思われる破片である。外面にタタキ調整が残存する。

Fig.26 の 2（PL.23）（実 45）は、12 区 SD004 から出土したもので、唐津（肥前）系の陶器の椀である。青みがかった灰色の釉薬がかかっており、外面は体部の下半まで垂れた状況で観察できる。内面は、破片であるが全面に釉薬がかかる。下半は横方向の削り調整が残存する。

12区調査区西壁土層断面図（遺構01～04土層断面図）



1. 灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 表土 土壌化進行
2. 灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径1cm)含 床土 ややしまる 礫(～径5mm程度)含
3. 褐灰色細礫～シルト(シルト主体)(Hue10YR5/1) 床土 しまる
4. 灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径5mm)含 造成土か 礫(～径5mm程度)少含

遺構01-a埋土
24. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径5mm)僅少含

遺構01-c埋土
10. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径1cm)少含
11. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径2cm)含
12. 灰黄褐色シルト(Hue10YR5/2) 基盤層ブロック(～径2cm)少含
13. 灰黄褐色シルト(Hue10YR5/2) 基盤層ブロック(～径5cm:～径2～3cm主体)多含
黒褐色シルトブロック(Hue10YR3/2)(～径1cm)含
14. 灰黄褐色シルト(Hue10YR5/2) 基盤層ブロック(～径1cm)含
黒褐色シルトブロック(Hue10YR3/2)(～径1cm)少含

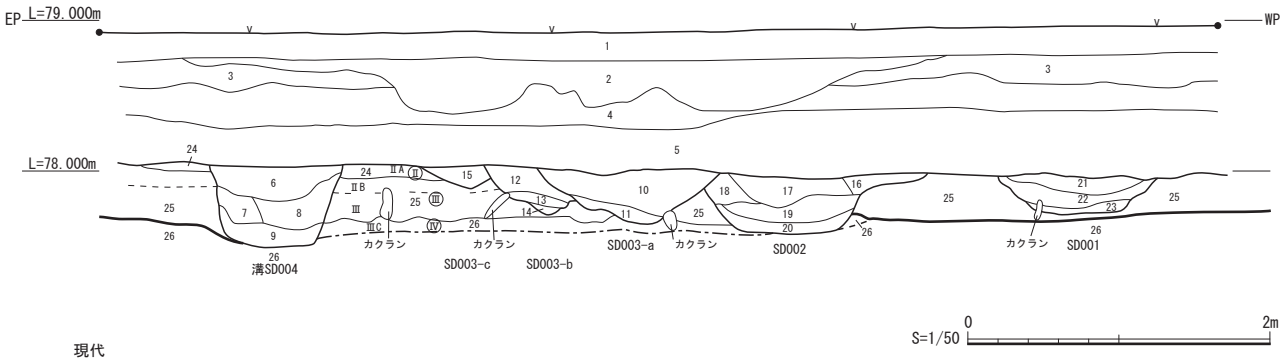
遺構03埋土
21. 黒褐色シルト(Hue10YR3/1) 基盤層ブロック(～径5mm)僅少含
22. 黒褐色シルト(Hue10YR3/1) 基盤層ブロック(～径1cm)含 ややしまる
23. 褐灰色シルト(Hue10YR4/1) 基盤層ブロック(～径1cm)含 ややしまる

Ⅲ-25. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) いわゆるクロボクに該当
Ⅳ-26. にぶい黄褐色シルト(Hue10YR4/3) 縄文後晩期～弥生頃の遺物包含層か
Ⅴ-27. にぶい黄橙色シルト(Hue10YR6/4) アカホヤの二次堆積

遺構02埋土
15. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径5mm)僅少含
16. 黒褐色シルト(Hue10YR3/1) 基盤層ブロック(～径5mm)僅少含
17. 灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径1cm)少含
18. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径5mm)僅少含
19. 黒褐色シルト(Hue10YR3/1) 基盤層ブロック(～径5mm)僅少含
20. 黒褐色シルト(Hue10YR3/1) 基盤層ブロック(～径1cm:～5mm主体)多含
ややしまる

遺構04埋土
5. 黒褐色シルト(Hue10YR3/1) 基盤層ブロック(～径1cm)僅少含
6. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径2cm)少含
7. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径3cm:～径1cm主体)含
8. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径1cm)含
9. 灰黄褐色シルト(Hue10YR5/2) 基盤層ブロック(～径2cm)少含
黒褐色シルトブロック(Hue10YR3/2)(～径1cm)少含

17区調査区南壁土層断面



現代
1. 耕作土 ややゆるい
2. 灰黄褐色細礫混シルト等混土(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径5cm:～径2cm主体)含 溝状落込み
3. 灰黄褐色細礫混シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径5mm)含 ややしまる 床土
4. 灰黄褐色細礫混シルト(Hue10YR5/2) 基盤層ブロック(～径5mm)含 農地開発に係る造成土か
5. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径5mm)含 細礫少含 農地開発に係る造成土か

SD001埋土
21. 黒褐色シルト(Hue10YR3/1) 基盤層ブロック(～径5mm)少含
22. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径5mm)僅少含
23. 褐灰色シルト(Hue10YR4/1) 基盤層ブロック(～径1cm)少含 ややしまる

SD002埋土
16. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径3cm)含
17. 黒褐色シルト(Hue10YR2/3) 基盤層ブロック(～径2cm)少含
18. 暗褐色シルト(Hue10YR3/3) 基盤層ブロック(～径1cm)僅少含
19. 黒褐色シルト(Hue10YR3/1) 基盤層ブロック(～径5mm)僅少含 ややゆるい
20. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径5mm)含 ややしまる

SD003-a
10. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径2cm)僅少含
11. 黒褐色シルト(Hue10YR3/1) 基盤層ブロック(～径1cm)含

SD003-b
12. 暗褐色シルト(Hue10YR3/3) 基盤層ブロック(～径5mm)僅少含
13. 黒褐色シルト(Hue10YR3/1) 基盤層ブロック(～径1cm)多含
14. 灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径2cm)含

SD003-c
15. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径1cm)少含SD004埋土
6. 黒褐色シルト(Hue10YR3/1) 基盤層ブロック(～径3cm)少含
7. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径1cm)僅少含
8. 暗褐色シルト(Hue10YR3/3) 基盤層ブロック(～径2cm)少含
9. 黒褐色シルト(Hue10YR3/1) 基盤層ブロック(～径2cm)僅少含 ややしまる

SD004埋土
6. 黒褐色シルト(Hue10YR3/1) 基盤層ブロック(～径3cm)少含
7. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径1cm)僅少含
8. 暗褐色シルト(Hue10YR3/3) 基盤層ブロック(～径2cm)少含
9. 黒褐色シルト(Hue10YR3/1) 基盤層ブロック(～径2cm)僅少含 ややしまる

Fig.24　12 区西壁土層断面図（溝 SD001 ～ 004）（上）
17 区南壁土層断面図（下）

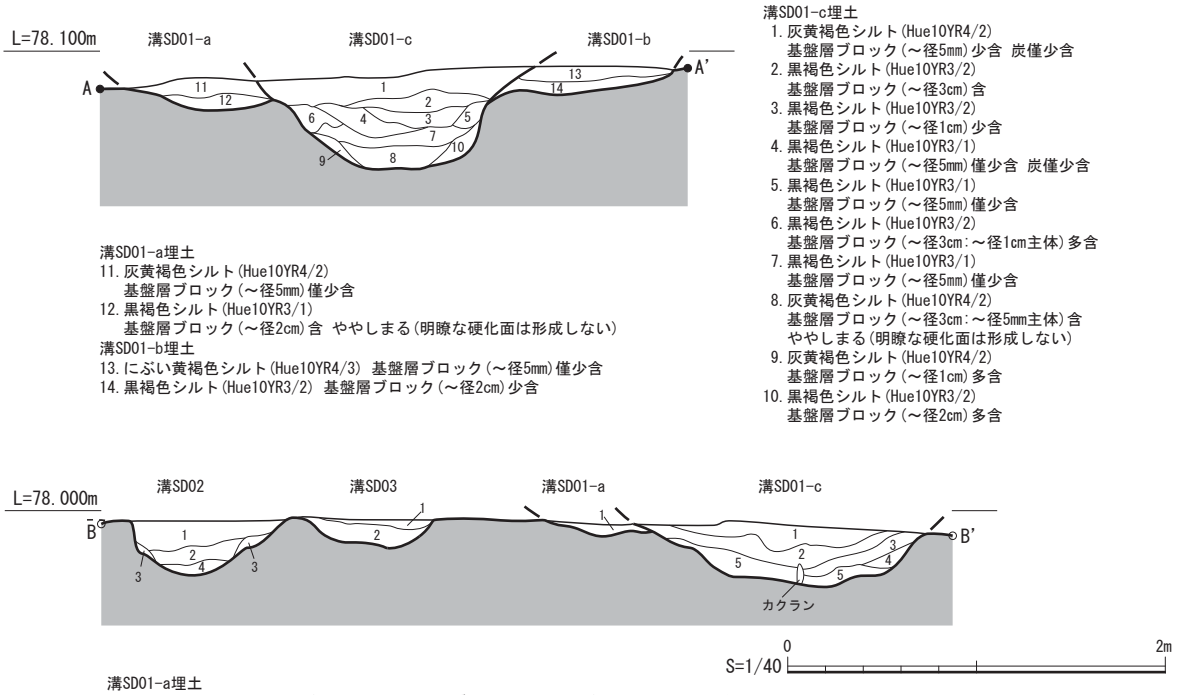


Fig.25　12 区 A － A', B － B' 土層断面図

PL.23 の photo. 1 は 17 区 SD006 の埋土上層から出土した肥前系の陶器である。外面が高台を除き、鉄釉がかかる。内面は青みがかった灰色の釉薬がかかり、見込みに呉須で 11 弁の花文が描かれている。高台は直線的に削られて作り出されている。

PL.23 の photo.2 は、17 区 SD002 の D-12 グリッドから出土した肥前系の端反りの皿で、口縁端部は欠損し、灰色の釉薬が内外面にかかる。器壁は約 5mm である。

PL23 の photo.3 は、17 区 SD005 の B-12 グリッド出土の径 4.5cm の高台を持つ椀で、高台の内面は無釉、内面の見込みに幅 7mm の釉剥ぎを施す。断面は淡い灰色で黒色粒を観察できる。

PL.23 の photo.4 は、17 区 SD003 の D-12 グリッド出土の肥前系の陶器で、外面に約 2cm の間隔で 2 条の沈線が並行してめぐる。内面にも幅 5mm、下方に同様の沈線が 2 条施されている。袋ものであるが器形は明確でない。

近世後期を中心とする時期のものと考えられる。

PL.23 の photo.5 は、17 区 SD007 の B-13 グリッド出土の肥前系陶器で、白色の釉薬と刷毛目を利用した文様を施すものである。

PL.23 の photo.6 は、17 区 SD007 の B-3 グリッド出土の肥前系の染付で、断面は灰色で黒色の粒を含む。釉薬はやや緑色がかった灰白色を呈するもので、内面は釉薬がからない部分があり、花瓶等の器形が考えられる。

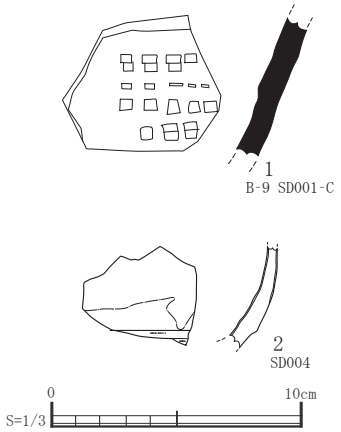


Fig. 26　12 区 溝 出土遺物

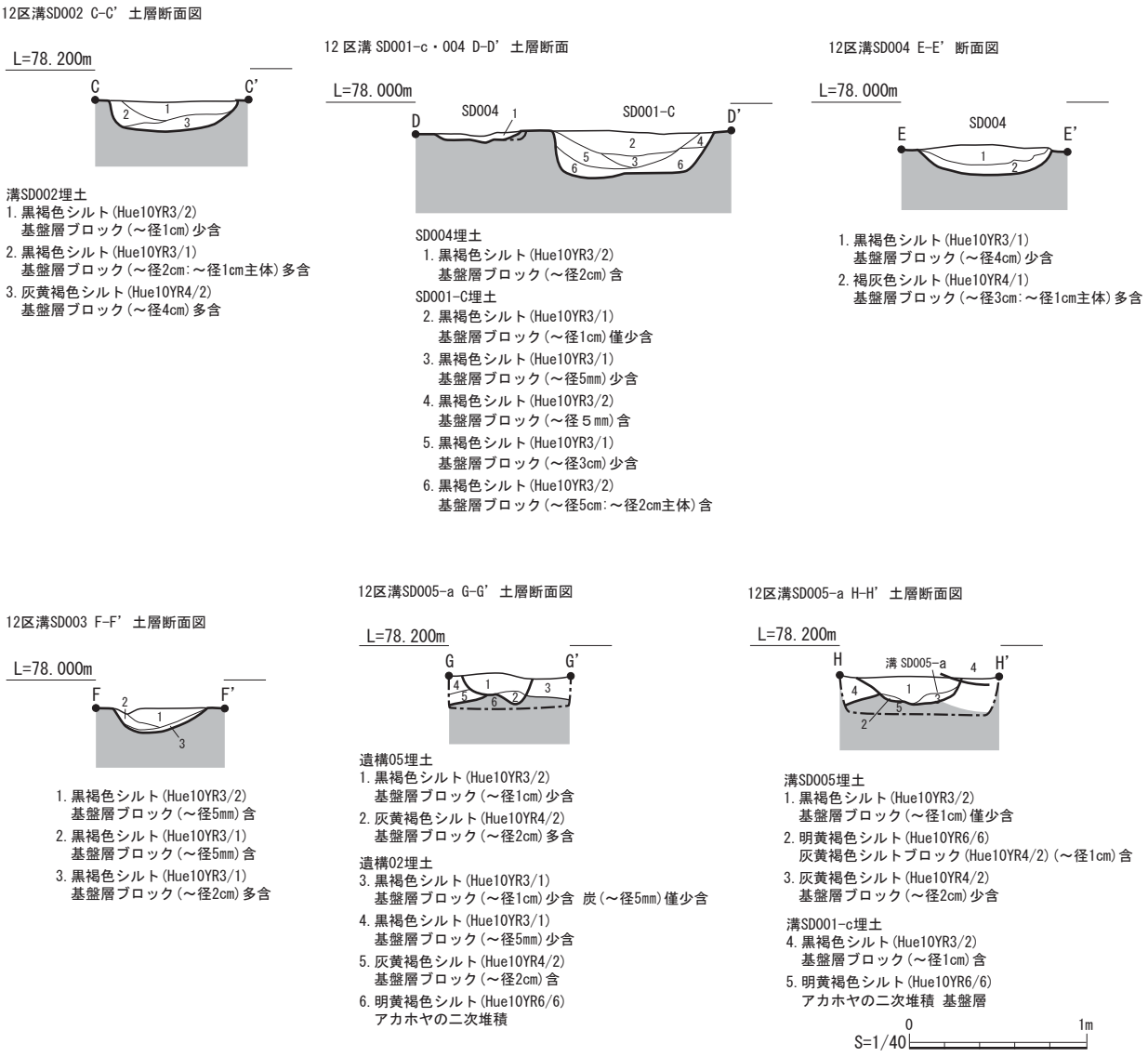


Fig.27　12 区 C － C ～ H － H' 土層断面図

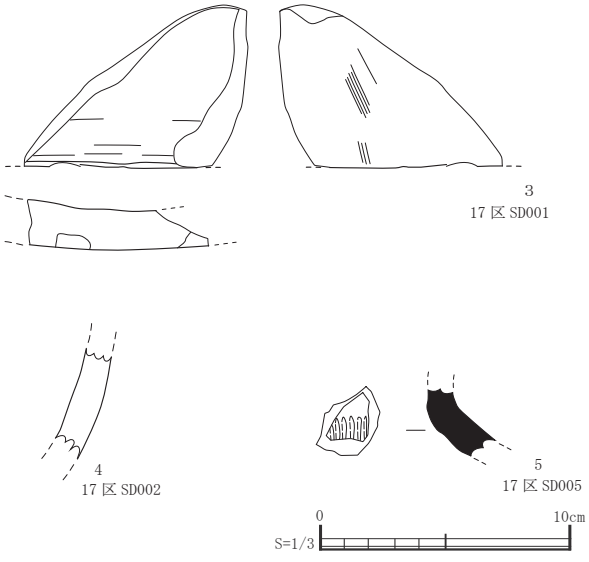


Fig. 28　17 区 溝 出土遺物

PL.15 の Photo.5 は、12 区 SD004 出土の須恵器の甕の頸部で内面は屈曲直前まで顕著に同心円タタキが残存する。

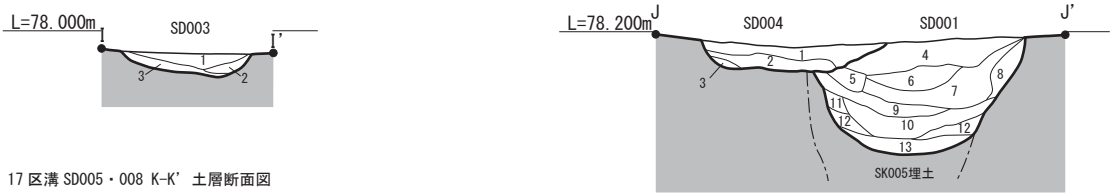
PL.15 の Photo.6 は、17 区 SD006 出土の須恵器の大甕の破片で内外面に平行タタキが残存するものである。

須恵器は磨耗があり、周辺から流れ込んできたことが伺える。

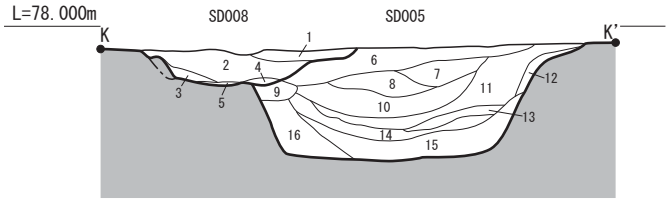
イ　IV層において検出した遺構（Fig.35,PL.9 ～ 11）

縄文時代後晩期の包含層と目されるIII層下に堆積するアカホヤ火山灰の２次堆積層（IV層）において検出した遺構である。埋土の特徴がIII層に近似していることから、遺構面はIII層中にあるものと推定される。多くは出土遺物に乏しく、詳細な時期と用途の比定は難しい。

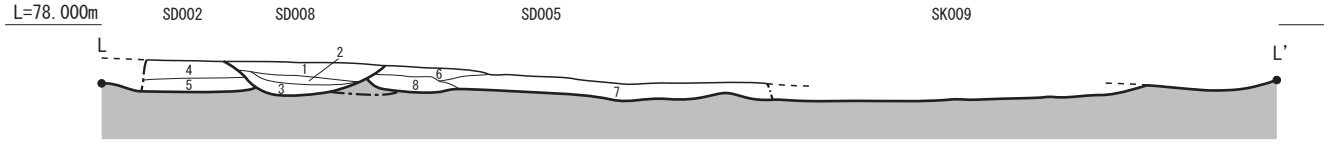
12区溝SD003 I-I’断面図



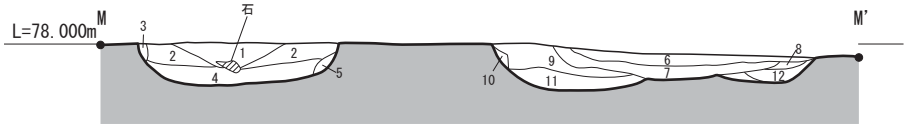
17区溝 SD005・008 K-K’土層断面図



17区溝 SD002・005・008 L-L’土層断面図



17区溝 SD001・002 M-M’土層断面図



SD001埋土
1. 黒褐色シルト(Hue10YR2/2) 基盤層ブロック(～径5mm)僅少含 ややゆるい
2. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径5mm)僅少含
3. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径1cm)含
4. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径2cm)少含
5. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径5mm)僅少含
6. 灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径2cm)多含
7. 黒褐色シルト(Hue10YR3/1) 基盤層ブロック(～径1cm)少含
8. 黒褐色シルト(Hue10YR3/1) 基盤層ブロック(～径5cm:～径2cm主体)多含
9. 灰黄褐色シルト(Hue10YR5/2) 基盤層ブロック(～径5mm)少含
10. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径5mm)少含 炭(～径5mm)僅少含
11. 灰黄褐色シルト(Hue10YR5/2) 基盤層ブロック(～径1cm)含
12. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径3cm:～径1cm主体)多含
13. 黒褐色シルト(Hue10YR3/1) 基盤層ブロック(～径1cm)含

SD002埋土
4. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径5mm)僅少含
5. 黒褐色シルト(Hue10YR3/1) 基盤層ブロック(～径3cm)少含
6. 黒褐色シルト(Hue10YR3/1) 基盤層ブロック(～径5mm)僅少含
7. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径1cm)少含
8. 灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径5mm)僅少含
9. 灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径1cm)少含
10. 灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径5mm)含
11. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径3cm:～径1cm主体)含
12. にぶい黄褐色シルト(Hue10YR5/3) 基盤層ブロック(～径1cm)含
黒褐色シルトブロック(Hue10YR3/1)(～径1cm)少含

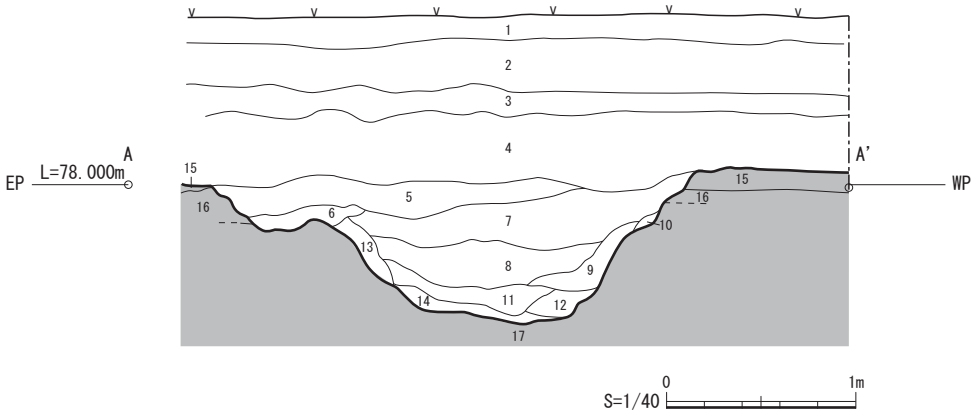
SD003土層注記
1. 黒褐色シルト(10YR3/1) 基盤層ブロック(～径1cm)少含
2. 灰黄褐色シルト(10YR4/2) 基盤層ブロック(～径2cm)含
3. 灰黄褐色シルト(10YR4/2) 基盤層ブロック(～径3cm:～径1cm主体)多含

SD004埋土
1. 灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径5mm)少含
2. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径1cm)含
3. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径2cm)多含

SD005埋土
6. 灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径5mm)少含
7. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径3cm:～径1cm主体)含
8. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径1cm)少含
9. 灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径1cm)多含
10. 灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径5cm:～径2cm主体)含
11. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径1cm)少含
12. にぶい黄褐色シルト(Hue10YR5/3) 基盤層ブロック(～径3cm)多含
13. 灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径2cm:～径1cm主体)多含
14. 灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径5mm)僅少含
15. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径5mm)含
16. 黒褐色シルト(Hue 10YR3/1) 基盤層ブロック(～径3cm:～径1cm主体)多含

SD008埋土
1. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径3cm)含 炭(～径1cm)僅少含
2. 褐灰色シルト(Hue10YR4/1) 基盤層ブロック(～径5mm)僅少含
3. 褐灰色シルト(Hue10YR4/1) 基盤層ブロック(～径1cm)多含
4. 褐灰色シルト(Hue10YR4/1) 基盤層ブロック(～径5mm)含
5. 褐灰色シルト(Hue10YR4/1) 基盤層ブロック(～径5mm)少含
6. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径5mm)少含
7. 黒褐色シルト(Hue10YR3/1) 基盤層ブロック(～径1cm)含
8. 灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径1cm:～径5mm主体)含

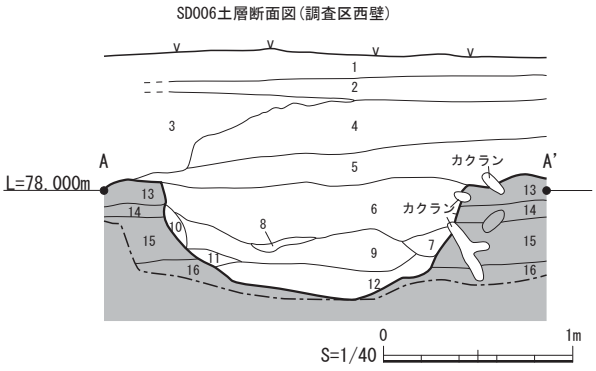
Fig.29　12・17区Ⅰ－Ⅰ'～Ⅿ－Ⅿ'土層断面図



表土(耕作土)
1.表土(耕作土)
旧耕作土
2.にぶい黄褐色シルト(Hue10YR4/3) 基盤層ブロック(アカホヤ二次堆積由来:～径5mm)多含 礫(～径5mm～2cm)少含 ややしまる
床土
3.褐灰色細礫混シルト(Hue10YR5/1) 基盤層ブロック(～径5mm)少含 礫(～径7mm)少含 床土 下位に鉄分沈着 しまる
4.黒褐色粗粒～シルト砂シルト(シルト主体)(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径5mm)含 礫(～径8mm)少含 農地改善に伴う造成土か ややしまる
遺構04埋土
5.黒褐色シルト(Hue10YR3/1) 基盤層ブロック(～径1cm)少含
6.黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径2cm)含
7.灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径3cm:～径1cm主体)含
8.黒褐色シルト(Hue10YR3/1) 基盤層ブロック(～径3cm)少含
9.黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径1cm)少含
10.灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径1cm)多含
11.黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径1cm)僅少含 ややしまる
12.黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径2cm)含 ややしまる
13.黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径2cm)多含 ややゆるい
14.黒褐色シルト(Hue10YR3/1) 基盤層ブロック(～径3cm)多含 ややしまる

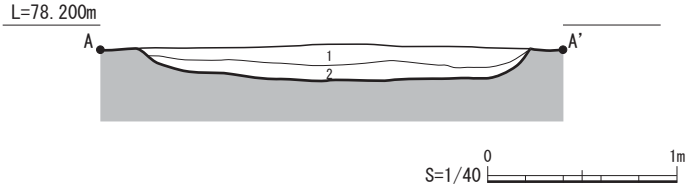
15.黒褐色シルト(Hue10YR3/2) いわゆるクロボクと呼称される堆積
16.灰黄褐色シルト(Hue10YR5/2) 縄文後晩期～弥生時代にかけての遺物包含層か
17.明黄褐色シルト(Hue10YR6/6) アカホヤ二次堆積 基盤層

Fig.30　17 区溝 SD004 土層断面図



1.灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2)シルト 耕作土
2.褐灰色細礫混シルト(Hue10YR4/1) 床土 しまる
3.客土 多様な堆積の混土 ゆるい
4.灰黄褐色細礫混シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径5mm)含
5.黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径1cm)含
6.黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径5mm)僅少含
7.黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径1cm)僅少含 ややゆるい
8.灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径5mm)少含 焼土ブロック(～径5mm)少含
9.黒褐色シルト(Hue10YR3/1) 基盤層ブロック(～径5mm)僅少含
10.灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径5mm)僅少含
11.灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径1cm)含
12.黒褐色シルト(Hue10YR3/2) 基盤層ブロック(～径2cm)含
13.黒褐色シルト(Hue10YR3/2) クロボクに該当
14.灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 13・15層の中間層
15.灰黄褐色シルト(Hue10YR5/2) 基盤層ブロック(～径5mm)少含 縄文後～晩期の遺物包含層
16.明黄褐色シルト(Hue10YR7/6) アカホヤの二次堆積に該当か 基盤層

Fig.31　17 区溝 SD006 土層断面図



1.灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径1cm)含 炭(～径5mm)僅少含
2.黒褐色シルト(Hue10YR3/2)シルト 基盤層ブロック(～径2cm:～1cm主体)含

Fig. 32　17 区土坑 SD007 土層断面図

【12 区】

SK005（Fig.33・35,PL.10）

B-11 グリッドに位置する、平面形は円形の土坑である。Ⅲ層検出遺構の SD001-c 掘方に上半を切られる。検出面における規模は、長軸 88cm、短軸 79cm、深さは最大で 78cm である。掘方の断面形は逆台形状を呈し、しっかりと掘り込まれる。埋土は、灰黄褐色、にぶい黄褐色を主体とするシルト層で、基盤層由来の偽礫を含み、人為的な埋戻しが想定される。遺構面を考慮すると、本来の深さは１m 前後と推定するが、機能面において具体的には判然としない。

出土遺物は皆無で、帰属時期については不詳である。

SK006-b・006-c（Fig.35・36・41PL.10・13）

D-9 グリッドに位置する、掘方の重複する２基の土坑である。SK006-b 掘方が SK006-c を掘り込む。SK006-b の平面形は概ね円形で、長軸が 177cm、短軸は 150cm 程度と考えられる。検出面からの深さは 72cm である。掘方の断面形は逆台形に近く、埋土は褐色、にぶい黄褐色を主体とするシルト層で、焼土や基盤層由来のブロック土が混じり、人為的な埋戻しを経ていると考えられる。

焼土ブロックは３～５cm 単位で、回収したもので 15 cm 四方であるが、特に上層に含まれる。中層に厚さ２cm、長さ５cm の炭が出土している。

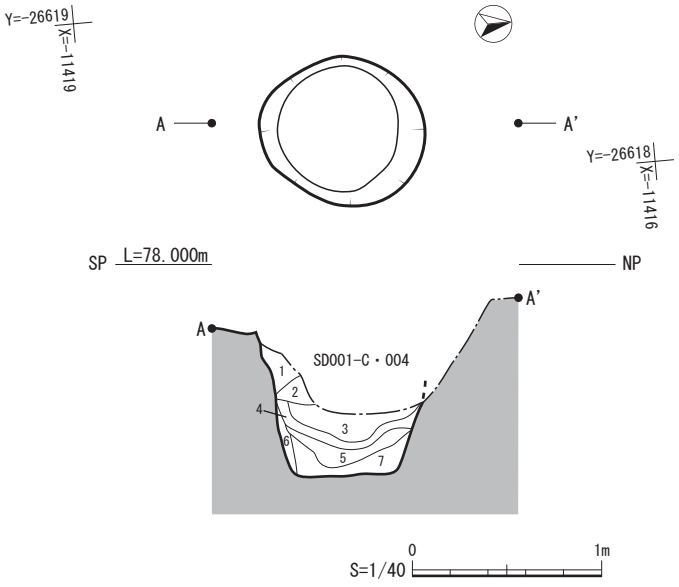
SK006-c は、上述のとおり SK006-b により掘方の半分近くを失っている。平面形は楕円形を呈するものと考えられる。検出面における規模は短軸が 71cm、深さは 53cm である。埋土は SK006-b と近似し、焼土及び炭化物を若干含む。

出土遺物は、長さ 3.3cm、厚さ 2mm の片側側片に細かい使用痕跡が残存し、上部が折れた縦長剥片が１点と、土器細片少数に止まり、帰属時期ははっきりしないが、SK006-b は規模から考えて、落とし穴の可能性を持つと考える。

Fig.41 の１（実 30）は、西北九州産黒曜石を素材とする表裏両面とも同一方向の剥離を示す鈴桶技法による石刃と考えられる。上部及び下部は折損し、左側縁裏面側に使用痕が認められる使用痕剥片である。

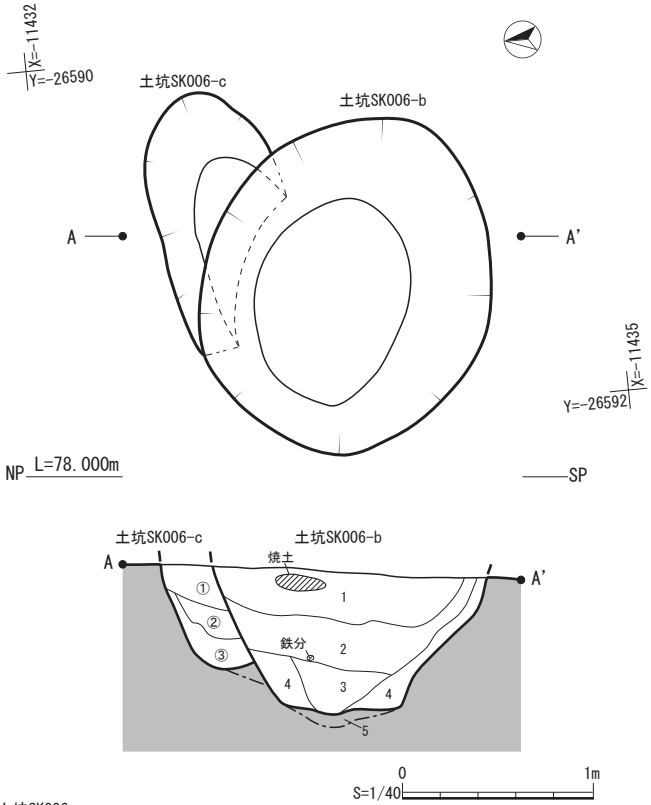
SK007（Fig.34・35,PL.10・20）

C-7 グリッドに位置する土坑である。平面形は概ね円形で、長軸 125cm、短軸 111cm、検出面からの深さは最大で 42cm である。掘方の断面形は皿状を呈し、埋土はにぶい黄褐色を主体とするシルト層で、アカホヤ火山灰由来のブロック土を含む。



1. 褐灰色シルト(Hue10YR5/1) 基盤層ブロック(～径2cm)少含
2. にぶい黄褐色シルト(Hue10YR5/3) 基盤層ブロック(～径1cm)少含
3. 灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径3cm：～径2cm主体)含
4. にぶい黄褐色シルト(Hue10YR5/3) 基盤層ブロック(～径2cm)含
5. 灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径1cm)少含
6. 灰黄褐色シルト(Hue10YR5/2) 基盤層ブロック(～径2cm：～径1cm主体)含
7. にぶい黄褐色シルト(Hue10YR6/3) 基盤層ブロック(～径1cm)多含

Fig.33　12 区土坑 SK005 平面・断面図



土坑SK006-c
①. にぶい黄褐色シルト(Hue10Y5/4) 焼土、スミを含む006-bが入ったか
②. 焼土、1cmくらいの黄白色粘質埋土
③. 黄褐色シルト(Hue10YR5/6)ににぶい黄褐色(Hue10YR5/6)の土が混じった土
4層の土に上の3層が混じったような土

Fig.34　12 区土坑 SK006 平面・断面図

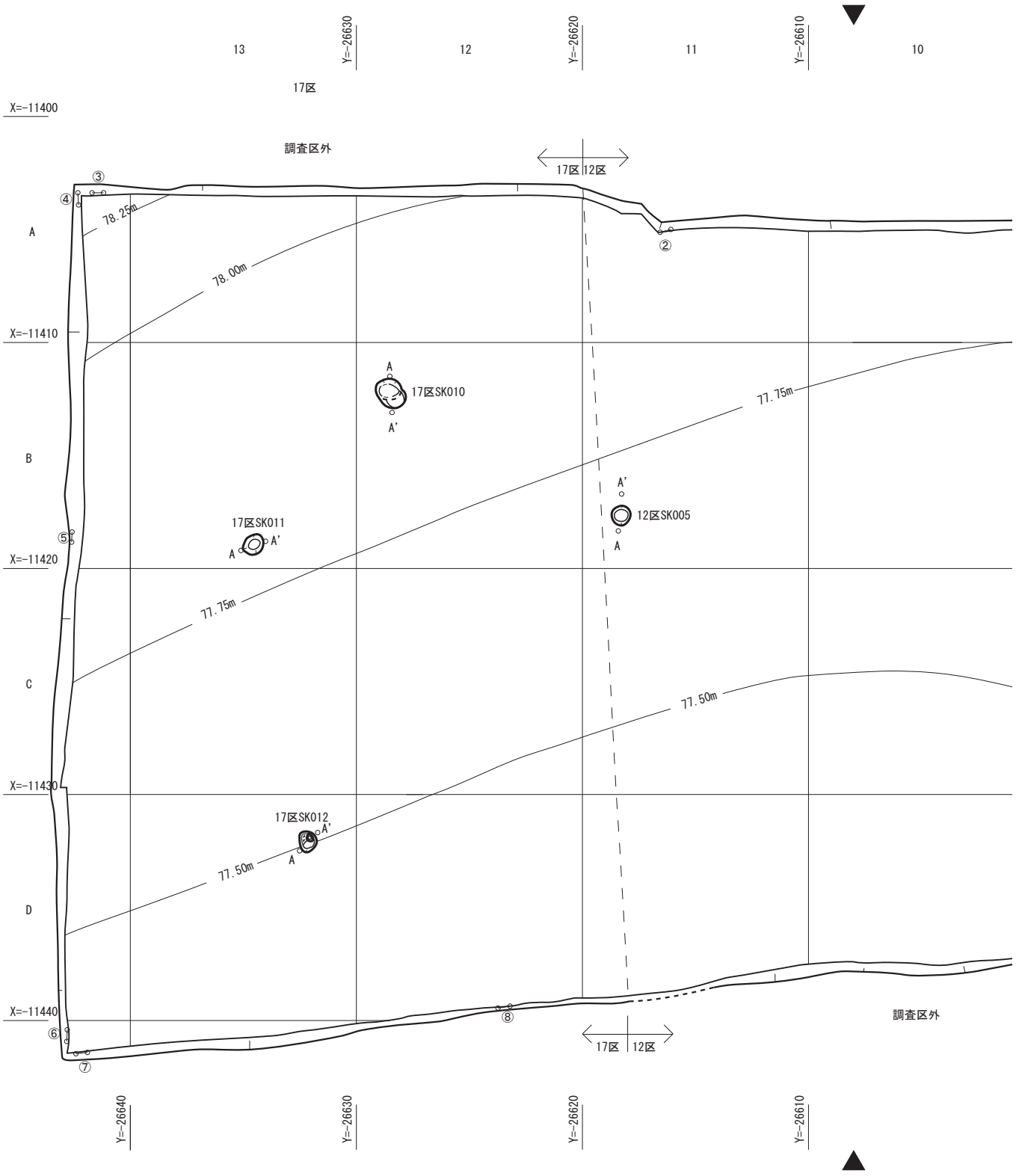
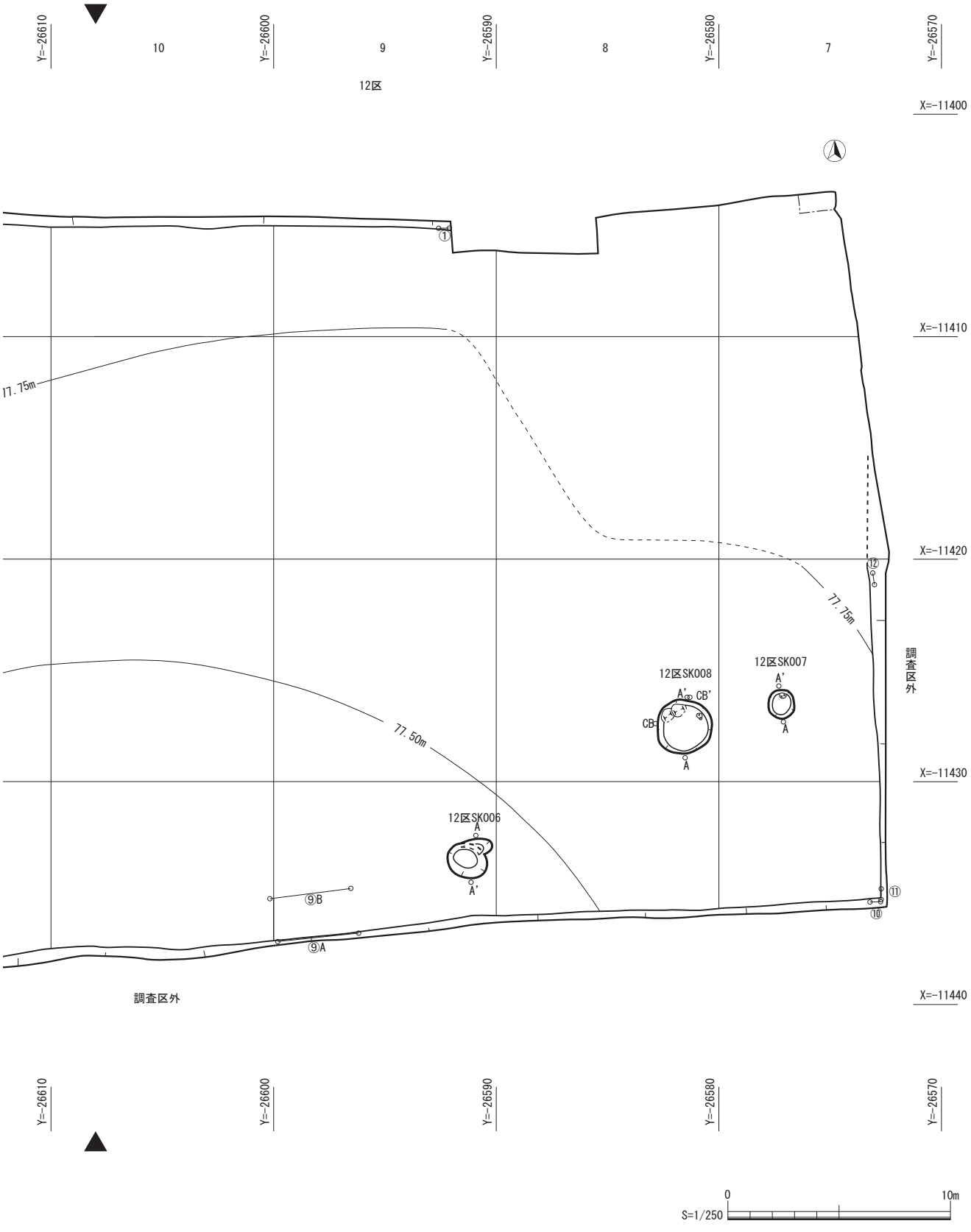
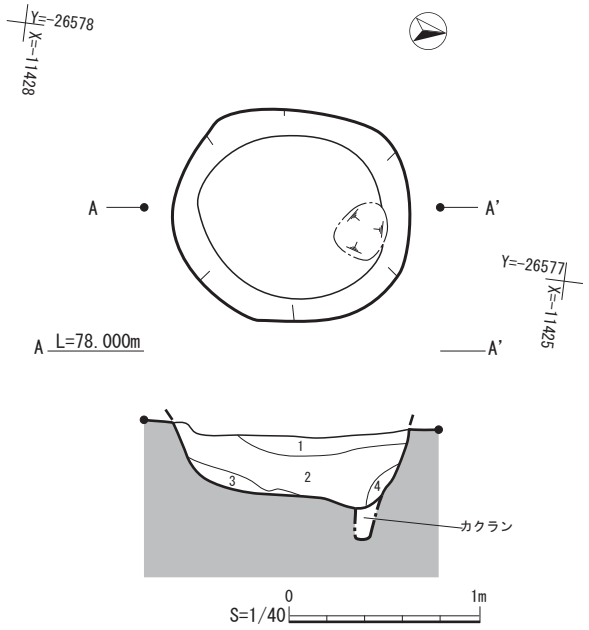


Fig.35　立石遺跡群 12・17 区IV層遺構配置図　S=1/250


Y=-26610
10
Y=-26600
9
Y=-26590
8
Y=-26580
7
Y=-26570
12区
X=-11400
X=-11410
X=-11420
X=-11430
X=-11440
17.75m
77.75m
77.50m
12区SK008
A'
CB'
CB
A
12区SK007
A'
A
12区SK006
A
A'
⑨B
⑨A
①
⑫
⑪
⑩
調査区外
調査区外
0
10m
S=1/250



1. にぶい黄褐色シルト(Hue10YR5/3) 基盤層ブロック(～径2cm)少含
2. にぶい黄褐色シルト(Hue10YR4/3) 基盤層ブロック(～径3cm)少含
3. 灰黄褐色シルト(Hue10YR4/2) 基盤層ブロック(～径2cm)含
4. 灰黄褐色シルト(Hue10YR5/2) 基盤層ブロック(～径2cm)多含

Fig.36　12 区土坑 SK007 平面・断面図

Fig.41 の 6（PL20-1）（実 46）は、磨消縄文土器の浅鉢の口縁部で端部に磨消縄文が残存する。内外面は横方向のミガキで調整している。

他に埋土から、長さ 1.7㎝、厚さ 0.4㎝のものや、長さ 2.3㎝、厚さ 0.6㎝等の摩滅した土器細片が出土しているのみである。流れ込みの遺物でこの土坑に伴うものではない。

また、撹乱が入っており、肥前系の白色の刷毛目の釉薬、花瓶等と推定できる染付等が出土している。土坑の埋土から考えて混入と考えたい。

SK008（Fig.35・37,PL.10）

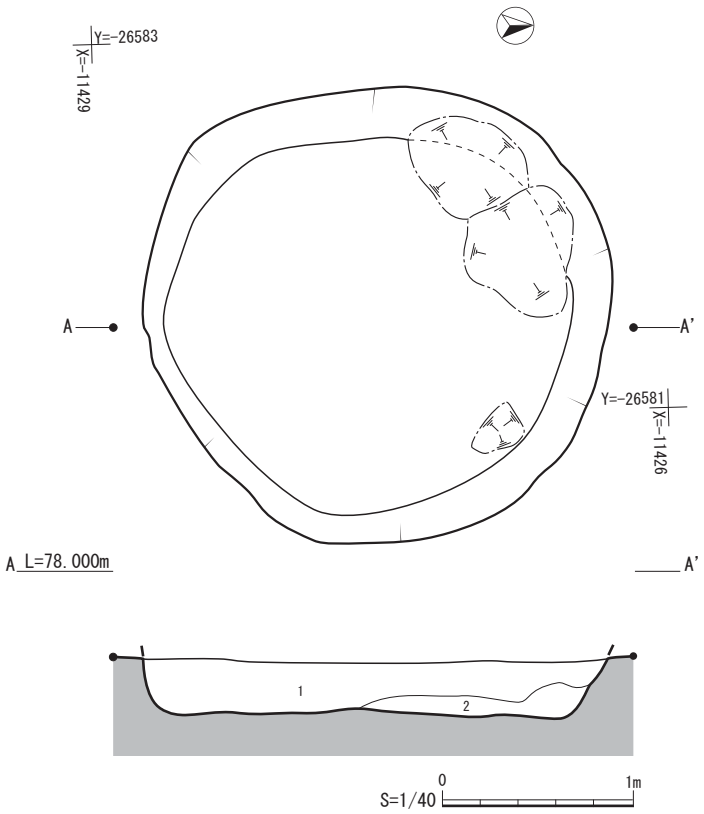
C-8 グリッドに位置する平面形が円形の土坑である。検出面における規模は、長軸 250cm、短軸 241cm、深さ 29cm を測る。掘方は浅いが、断面形は逆台形状を呈し、埋土上層には焼土ブロックや炭の混入が目立つが、炭化材や被熱痕跡は認められないことから、本土坑における火の使用は無かったものと想定される。

縄文土器細片は若干認められたものの、いずれも樹木根による撹乱土中からの出土であり、本遺構には伴わないものと判断した。帰属時期は不明である。

【17 区】

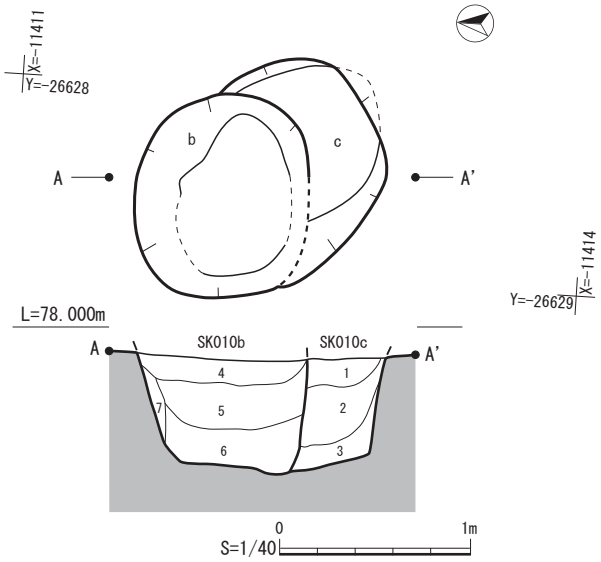
SK010（Fig.35・38,PL.11）

B-12 グリッドに位置する土坑で、平面形は円形状を呈する土坑 2 基が重複している。掘り込む方を SK010-b、先行する方を SK010-c とする。検出面における規模は、SK010-b が長軸 107cm、短軸 91cm、深さ



1. にぶい黄褐色シルト(Hue10YR5/3) 基盤層ブロック(～径2cm)少含
　焼土ブロック(～径2cm:～径5mm主体)含 炭(～径1cm:～径5mm主体)少含
2. 灰黄褐色シルト(Hue10YR5/2) 基盤層ブロック(～径2cm)少含 炭(～径5mm)少含
　遺物はなく用途不明
　黄色の上の包含層の土に類似
　可能性として焚火・炉跡で自然に埋まった

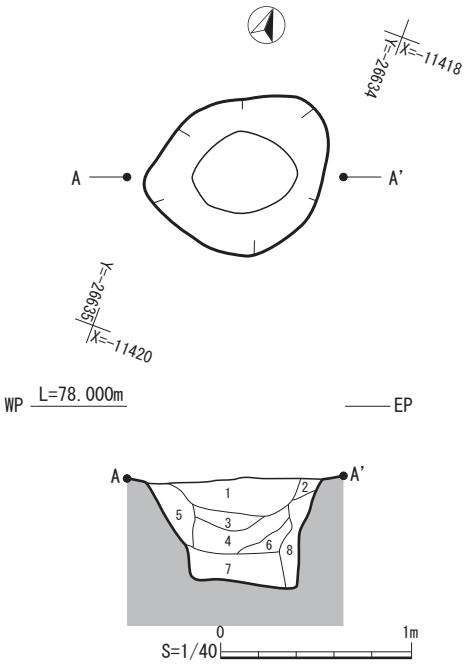
Fig.37　12 区土坑 SK008 平面・断面図



SK010-b
　土層の逆転に近い土層だが1が自然堆積土とすれば遺構の土とも考えられる
1. 褐色シルト(Hue10Y4/6) にぶい褐色混シルト(Hue10YR4/3)
2. 褐色シルト(Hue10YR4/4) 黄褐色シルトブロック混
3. にぶい黄褐色シルト(Hue10YR4/3)

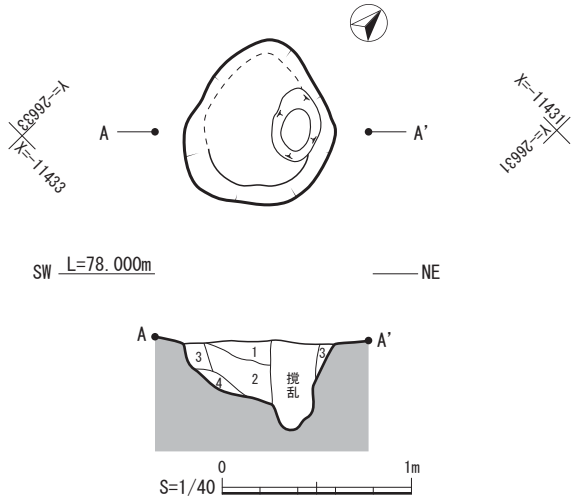
SK010c
4. 黄褐色シルト(Hue10Y5/6) 白色粒(黄褐色粒)を含む
5. 黒褐色シルト(Hue7.5YR3/2)
6. 黒褐色シルト(Hue7.5YR2/2) 5より粘性強い
7. 褐色シルト(Hue10YR4/4) 4と5の土が混じった土

Fig.38　17 区土坑 SK010 平面・断面図



1. 褐灰色シルト(Hue10YR4/1)
基盤層ブロック(～径3cm)少含 炭(～径1cm)少含
2. 灰黄褐色シルト(Hue10YR5/2)
基盤層ブロック(～径1cm)多含
3. にぶい黄褐色シルト(Hue10YR5/3)
基盤層ブロック(～径3cm)含
4. 黒褐色シルト(Hue10YR3/2)
基盤層ブロック(～径4cm)少含
5. 灰黄褐色シルト(Hue10YR5/2)
基盤層ブロック(～径1cm)少含 炭(～径5mm)僅少含
6. 灰黄褐色シルト(Hue10YR5/2)
基盤層ブロック(～径2cm)含
7. にぶい黄褐色シルト(Hue10YR5/3)
基盤層ブロック(～径4cm:～径2cm主体)含
8. 褐灰色シルト(Hue10YR7/6)
基盤層(アカホヤ二次堆積) 由来土を主体とする堆積
灰黄褐色シルトブロック(Hue10YR6/2)(～径1cm)少含

Fig.39　17 区土坑 SK011 平面・断面図



1. にぶい褐色シルト(Hue7.5YR5/4) 焼土少し入る10%
2. 褐色シルト(Hue7.5YR4/4) 焼土入る20%以上
3. 明黄褐色シルト(Hue10YR6/8) 黄褐色シルト
(Hue10YR5/6)を含む 4層のブロック土を含む
4. 明黄褐色シルト(Hue10YR6/6)

Fig.40　17 区土坑 SK012 平面・断面図

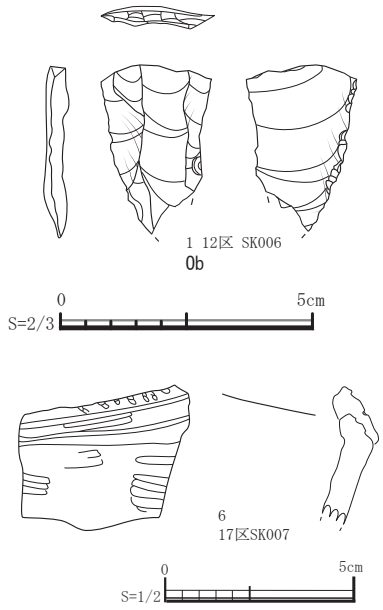


Fig. 41　12 区 SK006、17 区 SK007 出土遺物

59cm、SK010-c が径 121cm 程度と想定され、深さは最大で 59cm を測る。両土坑の規模は概ね似通っている。埋土は褐色、黄褐色を主体とするシルト層で、基盤層由来のブロック土を包含する。SK010 ｂの埋土下層に黒褐色シルト層を含む。

出土遺物は無く、本遺構の帰属時期は不明である。

SK011（Fig.35・39,PL.11）

B-13 グリッドに位置する土坑で、平面形は楕円形状を呈する。検出面における規模は、長軸 93cm、短軸 83cm、深さ 58cm である。掘方の断面形は逆台形状を呈し、掘り込みは比較的明瞭である。埋土は褐灰色、灰黄褐色を呈するシルト層でⅣ層由来の偽礫を多く含む。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

SK012（Fig.35・40,PL.9）

D-13 グリッドに位置する土坑である。平面形はやや歪な円形で、検出面における規模は、長軸 87㎝、短軸 81㎝、深さ 33㎝を測る。掘方の断面形は皿状を呈し、にぶい褐色や褐色を呈するシルト層が主体となり、焼土ブロックを含むが、掘方壁面には被熱痕跡は認められず、二次的に混入したものと理解できる。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

第３項　遺物包含層他の遺物

①縄文時代

ア　石器（Fig.42 ～ 44,PL.12 ～ 15）

石鏃（Fig.42,PL.12・13）

Fig.42 の２（実 12）は、12 区 A-10 グリッドⅢ層から出土した西北九州産黒曜石製の石鏃である。基部及び尖端部を欠失している。左右両側縁とも大きく外湾し、全体の形状は、逆 Y 字形を呈する。

Fig.42 の３（実 11）は、12 区 A-10 グリッドのⅢ層から出土した西北九州産黒曜石製の石鏃である。基部の抉りは浅い。尖端部を欠失している。

Fig.42 の４（実９）は、12 区 B-8 グリッドのⅢ層から出土した白色チャート製の石鏃である。上半部は欠失しており、その断面は三角形を呈する。厚さ 6mm と厚みがあり、残存する部分だけでも 1.3g を測る。基部の抉りは、逆 U 字状に施され深いが、脚先端部分は薄く、表面に素材剥片の剥離面が残存している。

Fig.42 の５（実４）は、B-8 グリッドのⅢ層から出土した白色が混じる漆黒色チャート製の石鏃である。両側縁は、やや膨らむ形状を呈する。基部の抉りは、深さが 6mm で脚先は内側に向かって尖る。裏面左側縁尖端部付近に細かい調整剥離が施されており、再加工されている可能性もある。

Fig.42 の６（実２）は、12 区 SD001-a 出土の西北九州産黒曜石製の石鏃で、右脚部の末端を欠失している。素材剥片の剥離面を裏面にわずかに残す。

Fig.42 の７（実 5）は、SD001-b（近世の溝）から出土したサヌカイト製の石鏃である。尖端部をわずかに欠失している。側縁は緩やかに膨らむ。基部の抉りの深さは 5mm と深い。脚部は内側に向かって尖る。表面の下半部に素材剥片の剥離面を残す。

Fig.42 の８（実１）は、12 区 B-9 グリッドのⅢ層から出土した西北九州産黒曜石製の石鏃である。やや灰色を呈する。下半部は欠失しているため、全体の形状は不明である。求心的な調整剥離を施し、両側縁を直線的に成形している。尖端は細かい調整剥離が施されており、尖る。折れた断面の厚さは 2mm と薄い。

Fig.42 の９（実 26）は、12 区 B-10 グリッドⅢ層から出土した西北九州産黒曜石製の小形の石鏃である。全長 14mm, 幅 12 ㎜を測る。尖端部及び左脚端部を欠失する。裏面に素材剥片の剥離面を残し、裏面・表面とも左側縁の調整剥離が細かい。

Fig.42 の 10（実 13）は、12 区 C-9 グリッドⅢ層から出土した西北九州産黒曜石製の石鏃である。裏面は３mm 程度の調整剥離が施されるが、表面の調整剥離は大まかである。基部の抉りの深さは約 8mm と深い。脚端部は薄く尖り、右脚部末端を欠失する。

Fig.42 の 11（実 16）は、12 区 C-8 グリッド出土の姫島産黒曜石製の石鏃である。左側縁表面側に２～３mm の細かい調整剥離を規則的に施している。裏面に素材剥片の剥離面が残存する。厚みは 4mm 程で重さは 1.6g である。側縁の調整に比べて基部の調整が大まかで、抉りは浅い。側縁が半ばで屈曲しており、やや五角形に近い形状である。脚部先端は尖る。尖端部をわずかに欠失する。

Fig.42 の 12（実 34）は、12 区 C-9 グリッドのⅢ層から出土した西北九州産黒曜石製の石鏃である。側縁、基部とも２～ 3mm の細かな調整で脚先端は内側に向かって尖る。尖端をわずかに欠失している。

Fig.42 の 13（実 15）は、B-11 グリッドⅢ層から出土したサヌカイト製の石鏃である。脚部末端を欠失しており、非対称で端部は丸みを帯びる。

Fig.42 の 14（実 36）は、12 区 C-9 グリッドⅢ層から出土のサヌカイト製の石鏃である。尖端部付近で両側縁が外湾し、逆 Y 字形を呈する。左右非対称で２次的な調整による可能性もある。基部の抉りは浅い。

Fig.42 の 15（実 35）は、12 区 C-9 グリッドⅢ層から出土したサヌカイト製の石鏃である。両脚端部が欠失している。残存の全長 13mm、残存幅 12mm で、やや横広の形状と考えられる。

Fig.42 の 16（実 24）は、12 区 C-9 のⅢ層から出土したサヌカイト製の石鏃である。尖端及び左脚部を欠失する。上半はやや内湾気味に尖端部に至り、下半はふくらみ、基部に向けてすぼまる。基部の抉りの深さは 7mm で、脚部は尖る。

Fig.42 の 17（実 14）は、12 区 C-10 グリッドのⅢ層から出土した黒色チャート製の石鏃である。

表面の左側縁は半ばで屈曲し、尖端部に至り、略五角形状を呈する。基部の抉りは浅い。右側の脚部末端を欠失している。

Fig.42 の 18（実 8）は、12 区Ⅳ層上面を精査中に出土したサヌカイト製の石鏃である。側縁の調整剥離の幅が３～ 5mm で広い。裏面には、素材剥片の面が１部残存する。基部の抉りは浅く、非対称である。

Fig.42 の 19（実 27）は、12 区の北西部のⅢ層から出土したサヌカイト製の石鏃である。全長 15mm、幅 18mm と推定される幅広の形状を呈する。尖端及び左脚部末端を欠失している。

Fig.42 の 20（実 19）は、17 区Ｏ-12 グリッド SD001 ～ SD004 Ⅲ層から出土したサヌカイト製の石鏃である。

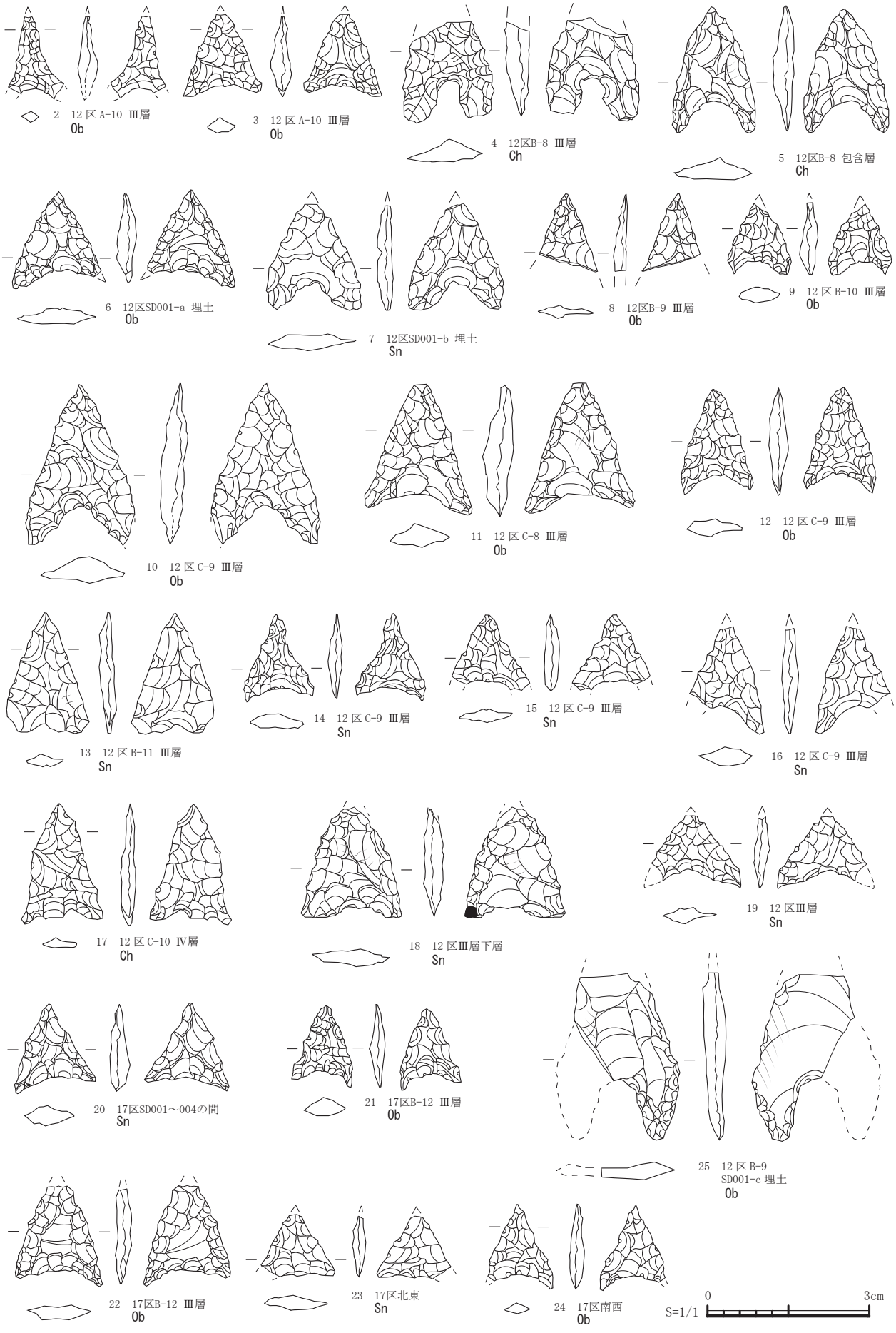


Fig.42　12・17区出土石器

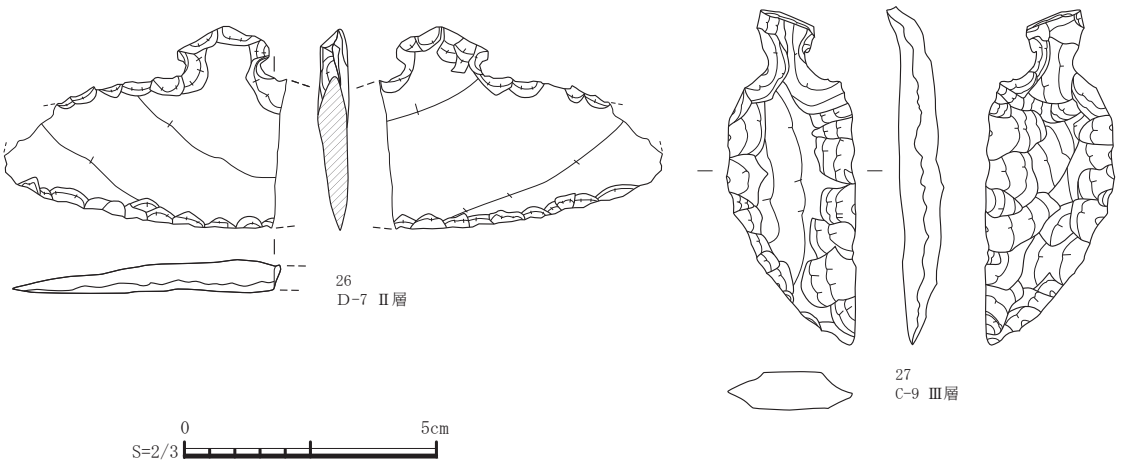


Fig.43-1　12 区調査区内出土石器（石匙）

左側縁はやや内湾、右側縁がやや外湾し、左右非対称である。長幅比が 1:1 の形状である。側縁・基部とも大まかな調整剥離を施している。基部の抉りは浅い。

Fig.42 の 21（実 21）は、17 区 B-12 グリッドⅢ層から出土した西北九州産黒曜石製の石鏃である。全長 14mm の小形の形状である。右脚部は、内側に向かって尖るが、調整は大まかで、左右非対称である。

Fig.42 の 22（実 20）は、17 区 B-12 グリッドⅢ層から出土した西北九州産黒曜石製の石鏃である。推定の長さは 20mm 程である。尖端部を欠失している。表裏面とも中央に素材剥片の剥離面を残す。幅広の剥片を素材とし、打点部側を尖端に置く。基部の抉りは浅く、縁辺からの調整は大まかで側縁はやや内湾し、脚は尖る。

Fig.42 の 23（実 28）は、17 区北東Ⅲ層から出土したサヌカイト製の石鏃で、推定全長 11mm、推定幅 17mm の幅広で小形の形状である。尖端部付近の調整剥離は細かいが、全体的に大まかな調整を施す。

Fig.42 の 24（実 18）は、17 区南西Ⅲ層から出土した西北九州産黒曜石の石鏃で推定全長 16mm である。

両側縁は、左右非対称で、尖端部及び脚部は尖る。

Fig.42 の 25（実 29）は、12 区 B-9 グリッド SD001-c から出土した西北九州産黒曜石製の石鏃である。鈴桶技法の刃器状剥片を利用した剥片鏃である。主要剥離面及び表面に石刃技法の剥離面が残存する。全長 30mm 以上はあると推定できる。右側縁には両面から細かい調整剥離が施され、基部の抉りの深さは 10mm 程と深い。

石匙（Fig.43- 1,PL.13）

Fig.43-1 の 26（実 17）は、12 区 D-7 Ⅱ層から出土したサヌカイト製の横形の石匙である。横広の剥片を素材とし、表裏両面に大きく素材剥片の剥離面を残す。つまみ部は､両面から大まかな剥離により作りだしている。

Fig.43-1 の 27（実 25）は 12 区 C-9 グリッドのⅢ層から出土したサヌカイト製の縦形の石匙で、素材剥片の剥離面は表面中央部に残存する。表裏面とも周縁から調整剥離を施す。尖端部は、やや摩滅しており、一部を欠失している。使用によるものと考えられる。

石斧（Fig.43-2・44,PL.14）

Fig.43-2 の 28（実 23）は、12 区 A-9 グリッドのⅢ層から出土した安山岩製の刃部磨製石斧である。刃部に使用痕が認められる。基部側を大きく欠失し、全体形は不明である。

Fig43-2 の 30（実 22）は、12 区 C-9 グリッドのⅢ層から出土した蛇紋岩製の石斧で左側縁から基部にかけて欠失する。刃部中央が一部欠損し、摩滅している。

Fig.44 の 33（実 32）は、17 区 A-13 グリッドⅢ層から出土した、全長 147mm、幅 69mm、厚さ 19mm、重量 282.1g の打製石斧である。礫面を表裏両面に大きく残し、周縁から調整剥離を施し成形している。

Fig.44 の 34（実 31）は、17 区北西で出土した全長 169mm、幅 97mm、厚さ 24mm、重量 449.6g の打製石斧である。表裏両面に礫面を持つ。片刃で約 20 °の角度を持つ。先端から 100mm 程のところに、両側縁ともくぼみが見られる。

その他の石器（Fig43-2,PL.13・15）

Fig.43-2 の 29（実 37）は、12 区 A-11 グリッドのⅢ層から出土した敲石で、下端部に敲き痕が見られる。

Fig.43-2 の 31（実 38）は、12 区 SD002 出土の砂岩製の砥石である。長側面３面は磨り痕が残存する。１面は欠損で、両端も欠損している。

Fig.44 の 32（実 33）は、12 区 C-14 グリッドのⅢ層から出土した緑色片岩製の打製石器で幅 60mm、厚さ 8mm を測る。右半部を欠失しており全体の形状は不

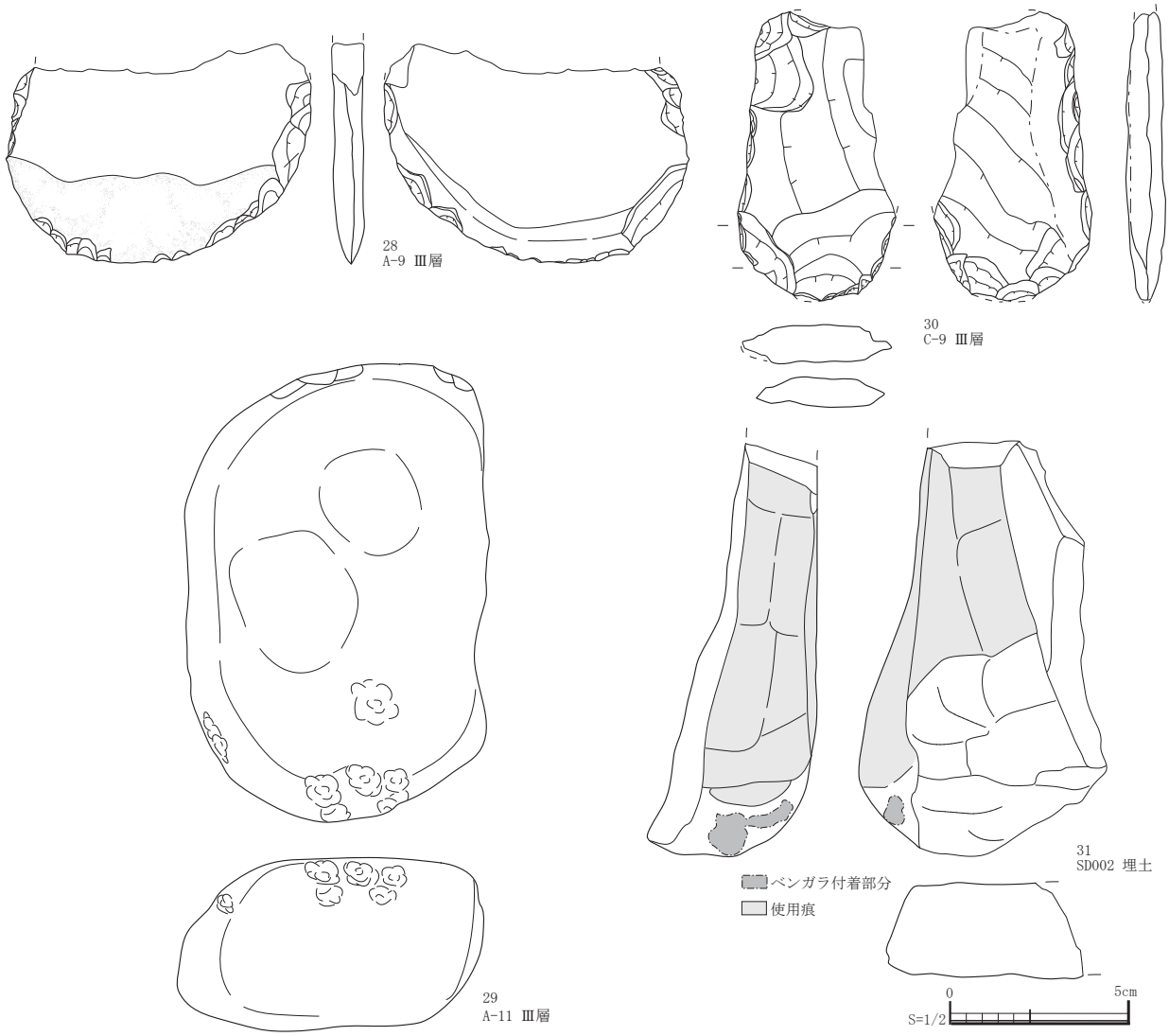


Fig.43-2　12 区調査区内出土石器（打製石斧・石皿・砥石）

明であるが、使用痕跡が顕著に残存することから穂摘具等の機能が考えられる。

PL.15 の photo.1 は、17 区Ⅲ層出土の縦長剥片で主要剥離面の左側縁、表面の右側縁に使用痕が残存する。

PL.15 の photo.2 は、17 区Ⅲ層出土の縦長剥片で、表面の右側縁に幅 2 mm の調整剥離が施されている。サイドスクレーパーである。表面には礫面が残存する。

PL.15 の photo.3 は、黒曜石の原石である。

PL.15 の photo.4 は、17 区 E-13 グリッド出土の幅 35mm 厚さ 9mm の緑色片岩で、Fig.44 の 32 と同じ石材であることから穂積具等に加工するために持ち込まれてきた石材の可能性が高い。

イ　土器

縄文時代後期前半（Fig.45.PL.17・18）

Fig.45 の 7･8（実 12）は、同一個体と推定できる。B-11 グリッドのⅢ層から出土した阿高系土器の深鉢である。胴部下位にも文様帯があり、口縁部の文様帯が 2 段の凹線による施文があることから阿高 2 式土器に比定できる。口縁部は波状を呈し、端部に凹点を施すが、刺突具もしくは指頭によるものと推定できる。口縁部直下も凹点、その下が横位の凹線、その下が渦巻き条の凹線と左上がり、右上がりのやや曲線的な凹線により文様帯が構成される。文様帯の下位には下方からの凹点 2 ヶ所で文様帯が構成される。体部外面下半は幅 1.2cm 程のヘラ削りで調整されている。内面には条痕が一部残存することから、条痕調整後、指ナデによる調整が丁寧に行われているが、指頭圧痕が残る。

Fig.45 の 9（実 32）は、12 区 B-9 グリッドの SD001-c の埋土 1 層から出土した南福寺式土器の深鉢である。口縁端部は面を持ち、口縁部は直線的である。

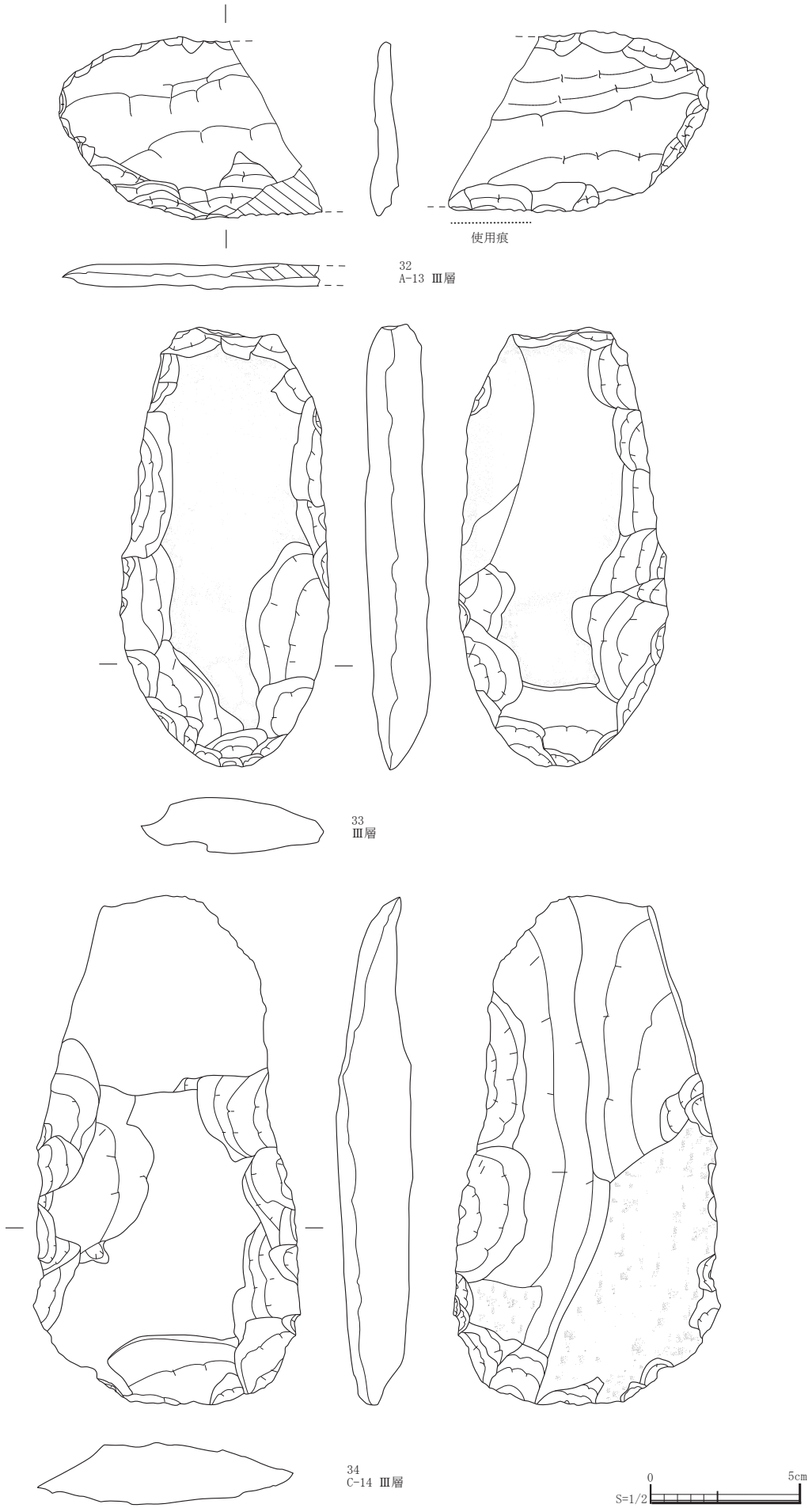


Fig.44　17区調査区内出土石器(打製石斧)

口縁部外面はやや屈曲し、口縁端部にかけて左上がりの凹線が工具等で施文されている。胴部は、縦方向の削り調整で、口縁部付近から下の胴部上半は横方向の削り調整である。

類例を見ると、文様帯が口縁部付近に限られるもので、南福寺式土器と考えられる。

Fig.45 の 10（実 34）も Fig.45 の 9（実 32）と同様、12 区 B-9 グリットの SD001-c の埋土 1 層出土の南福寺式土器の深鉢である。凹線の形態が若干異なるため、別個体の可能性があるが、同様の形式で南福寺式土器と考えられる。

Fig.45 の 11(実 50)は､17 区南側サブトレンチ出土(Ⅲ層）のもので、口縁端部に凹点を施し、口縁部に右下がり及び右上がりの凹線を施すものである。阿高式系土器である。

Fig.45 の 12（実 33）は、Ⅲ層 12 区 D-11 グリッド出土のもので、凹点と凹線で文様帯が構成されているものである。上部・下部の文様帯が不明で詳細な型式は不明であるが、阿高式系土器～北久根山式土器の深鉢である。

Fig.45 の 13（実 51）は、17 区 B-14 グリッドのⅢ層から出土したもので、下から上への沈線文を持つ深鉢である。区画されているものではない。深浦式土器の可能性もあるが、焼成が良好で沈線文を持つ弥生土器の可能性もある。

PL.17 の Photo.1 は、磨消縄文土器の浅鉢の頸部、PL.21 の Photo.2 は磨消縄文土器の深鉢の頸部で共に横方向の沈線と偽縄文が残存する。太郎迫式土器と考えられる。

縄文時代後期後半から晩期（Fig.46 ～ 48,PL.18 ～ 20）

Fig.46 の 14（実 35）は、12 区 A-10 グリッドのⅢ層から出土した浅鉢で、胴部最大径の部分に羽状の沈線が施されているもので、黒色磨研土器の鳥井原式と考えられる。

Fig.46 の 15（実 36）は、2 区 A-10 グリッドのⅢ層から出土した精製浅鉢の頸部である。頸部外面下位に 5 条以上の横位の沈線を施す。内外面横方向のヘラミガキである。磨消縄文で太郎迫式土器と考えられる。

Fig.46 の 16（実 18）は B-7 グリッドのⅢ層から出土したである。深鉢口縁部で口縁端部は面を持ち、ミガキで調整している。外面口縁端部直下に横方向の沈線が残存する。内外面ミガキの痕跡がなく、粗製の深鉢の可能性が強い。

Fig.46 の 17（実 37）は、D-7 グリッドのⅢ層から出土した精製深鉢頸部で左上がりの縄文が残存する。磨消縄文帯以外は沈線と内外面はミガキ調整の磨消縄文土器である。後期と推定できる。

Fig.46 の 18（実 41）は、12 区 C-9 グリッドⅢ層から出土した鉢頸部で内面に横方向のミガキが顕著である。外面の上半はヨコ方向のミガキ、下半はタテ方向のミガキが施されている。

Fig.46 の 19（実 19）は、Fig.46 の 21（実 16）に類似するが、口縁部上部に擬似縄文を残す磨消縄文土器の深鉢である。12 区 A-10 グリッドのⅢ層からの出土である。口縁が波状を呈し、口縁端部に 2 条の沈線を施す。内外面丁寧なミガキ調整である。太郎迫式に比定される。

Fig.46 の 20（実 31）は、C-11 グリッドのⅢ層からの出土である。黒色磨研土器の浅鉢で口縁部が緩やかな波状口縁で口縁端部に 2 条の沈線が施されている。内面は摩滅により詳細は不明であるが、外面は左上がりのミガキで調整している。

Fig.46 の 21（実 16 ）は、A-10 グリッドのⅢ層からの出土である。口縁端部外面に 2 条の凹線を持つ精製の黒色磨研土器である。内外面横方向の丁寧なミガキである。

Fig.46 の 22（実 16）は、底部外面に丁寧なミガキ調整を施した上げ底の底部である。黒色磨研土器御領式に比定される。Fig.46 の 21 と同一個体と考えられる。

Fig.46 の 23（実 13）は、C-11 グリッドのⅢ層から出土した黒色磨研土器の深鉢頸部から体部下半である。頸部の稜線は残存しない。外面下半に一部条痕調整が残存するが、外面は胴部下半が縦方向や横方向のミガキ、口縁部に立ち上がり再度屈曲するまでが横方向のミガキ、口縁部までは縦方向のミガキを基調としながら部分的に横方向のミガキで仕上げている部分がある。

Fig.47 の 24（実 38）は、12 区 C-11 グリッドのⅢ層から出土したで深鉢底部と胴部の破片である。底部付近は指ナデ調整であるが、外面は下から上方向の削りによる調整。内面はナデ調整である。

Fig.47 の 25（実 30）は、A-10 グリッドⅡ層から出土した精製深鉢である。内外面ともに横方向のミガキ調整である。

Fig.47 の 26（実 40）は、D-9 グリッドのⅢ層出土の深鉢胴部から底部である。外面に縦方向のミガキ調整が残存する。黒色磨研土器である。御領式から天城式と考えられる。

Fig.47 の 27（実 39）は、D-9 グリッドのⅢ層から出土した深鉢底部で上げ底である。外底面は一定方向の磨きで、外面も横方向のミガキ調整である。

Fig.47 の 28（実 15）は、B-9 グリッドのⅢ層から出土したの深鉢の頸部である。外面は、頸部より上位は左上がりの縦方向のミガキが 2 段にわたり調整している。内面も右上がりのミガキ調整が残存する。典型的な深鉢

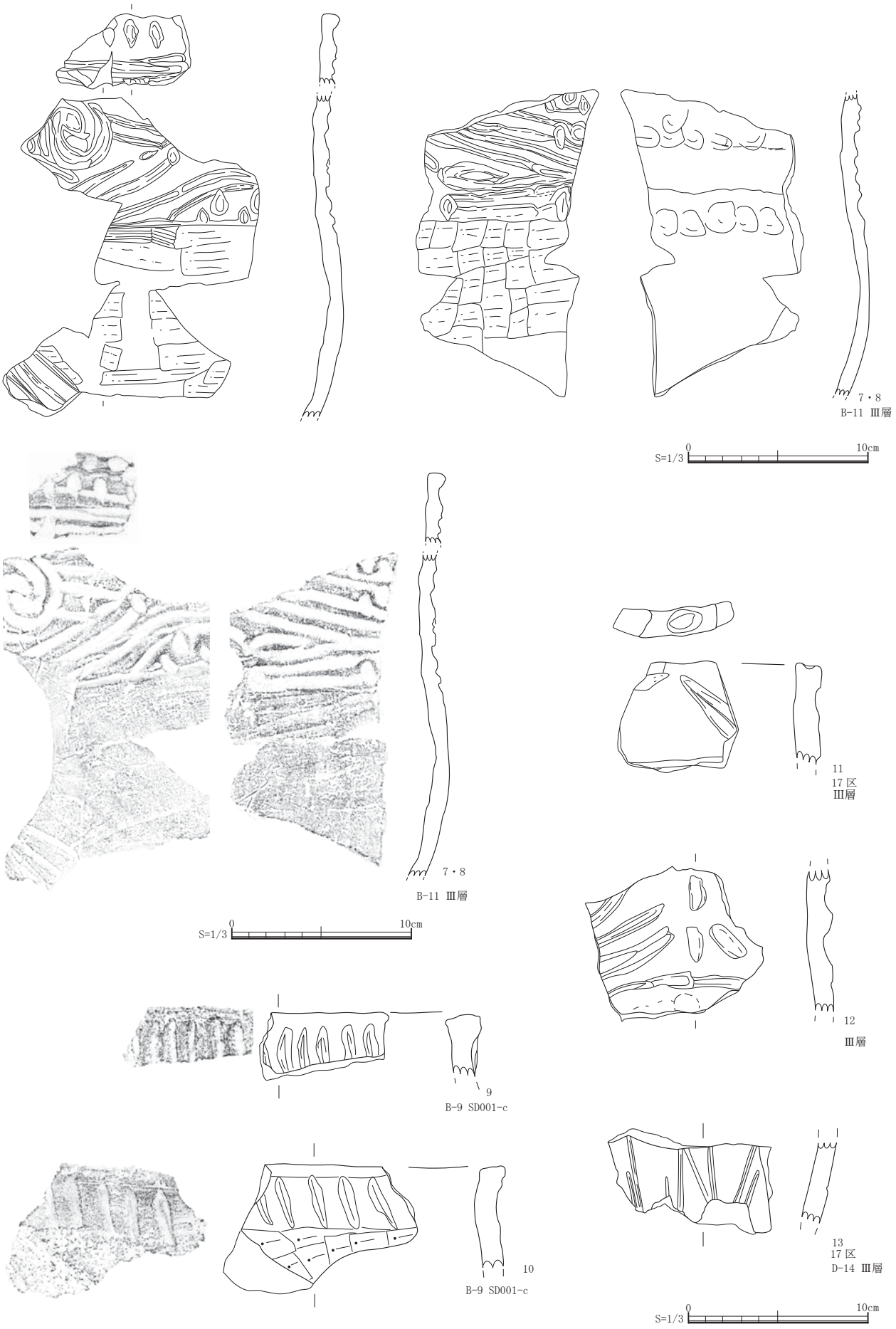


Fig. 45　12 区調査区内出土縄文土器 1（阿高系土器）

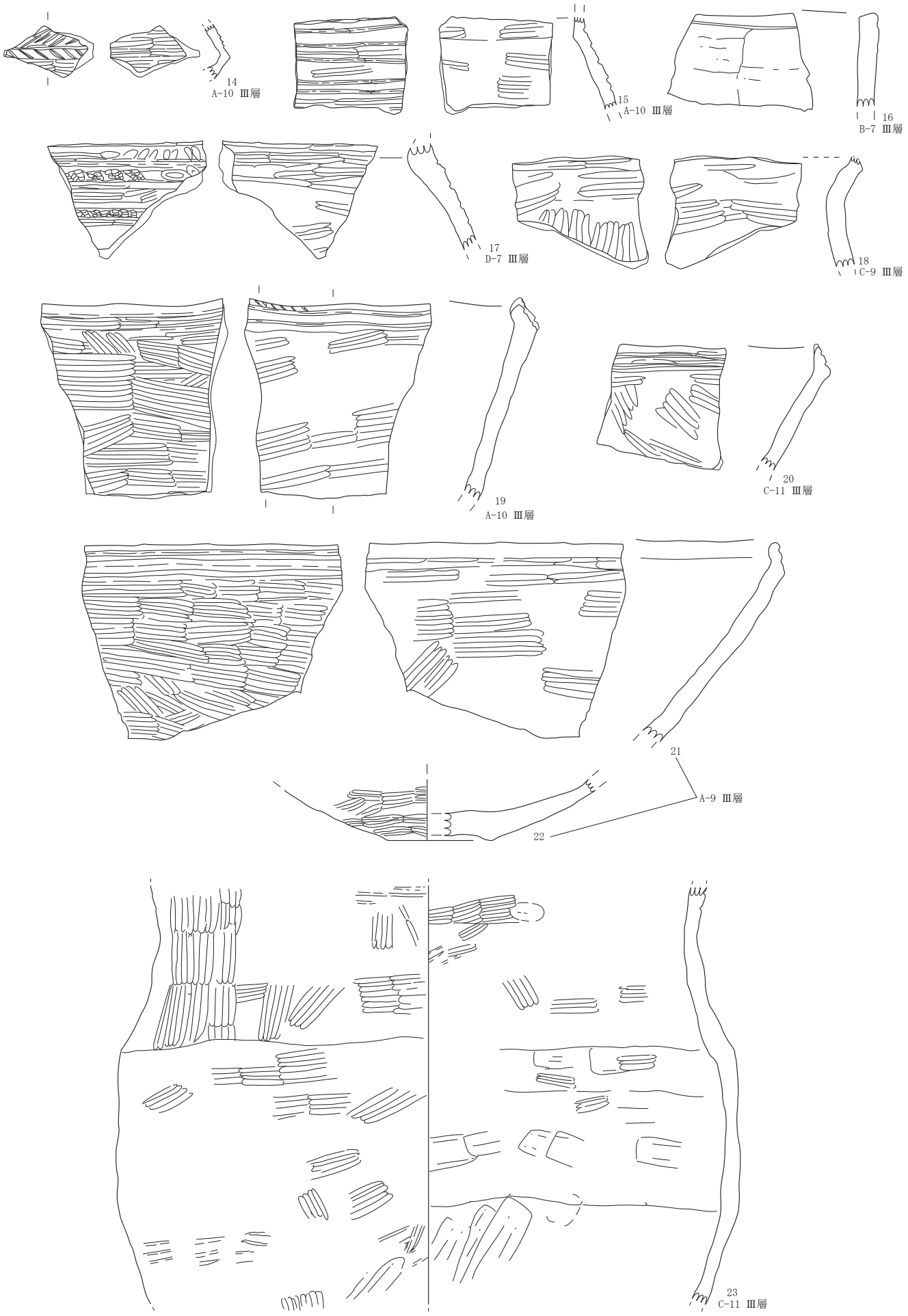


Fig.46　12 区調査区内出土縄文土器 2 S=1/3 0 10cm

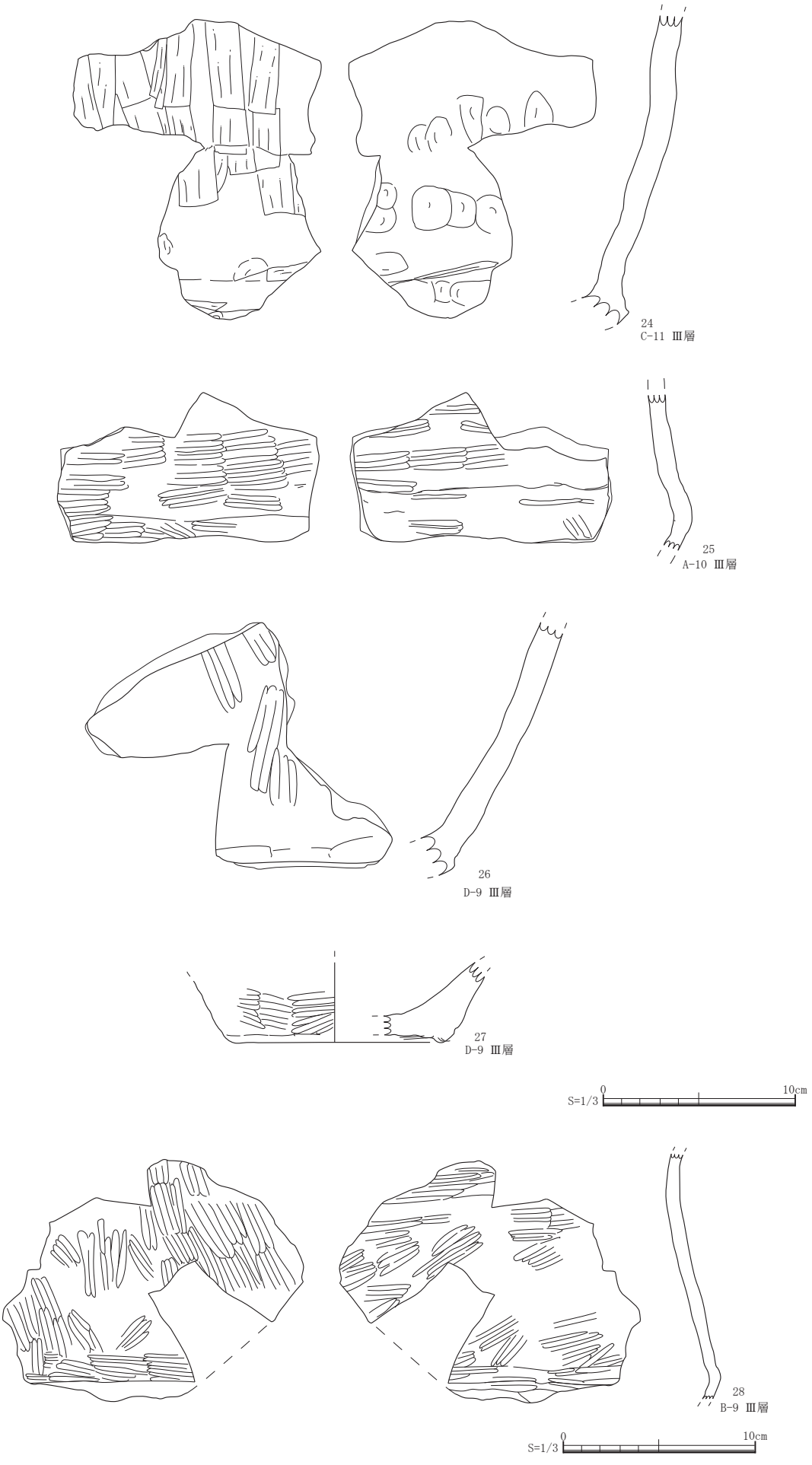


Fig.47　12 区調査区内出土縄文土器 3

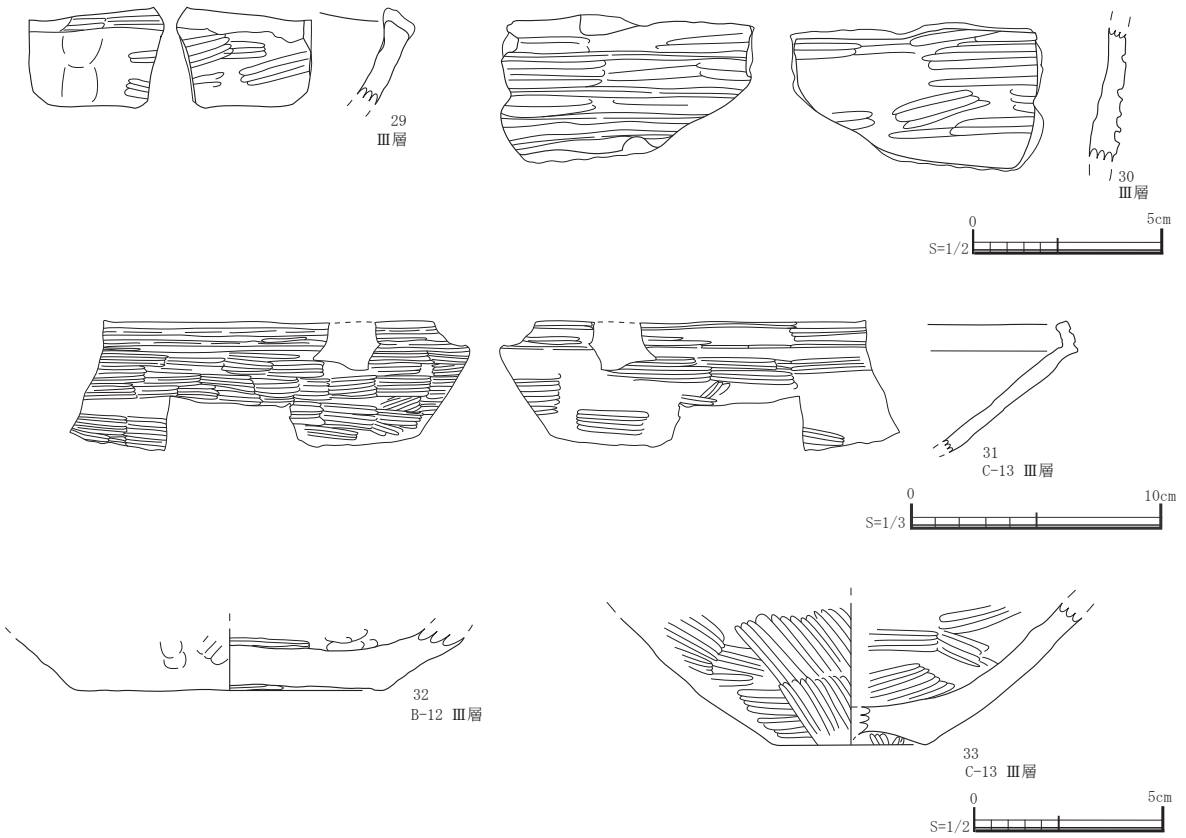


Fig.48　17 区出土縄文土器

である。内面上部は、横方向のミガキで調整している。頸部に不明確な綾を持つことから天城式から古閑式の段階と推定できる。

Fig.48 の 29（実 53）は、17 区南東のⅢ層から出土した浅鉢の口縁部で端部がやや肥厚し、内側に粘土を継ぎ足して口縁部を内側に屈曲させている。端部を指ナデと横方向のヘラミガキで、内側を横方向の丁寧なヘラミガキで調整している。黒色磨研土器古閑式併行期か。

Fig.48 の 30（実 52）は、17 区 D-14 グリッドのⅢ層から出土した深鉢の口縁部で、条線が４条施されている。口縁端部及び頸部部分が欠損すると推定される。黒色磨研土器古閑式と推定される。

Fig.48 の 31（実 55）は、黒色磨研土器の浅鉢で口縁端部に凹線が２条施されている。内外面に 1.5cm 程の単位でミガキが横方向に施されている。御領式に比定される。

Fig.48 の 32（実 49）は、17 区 B-12 グリッドから出土した粗製深鉢の底部である。内外面ともに一部ミガキ調整がのこる。

Fig.48 の 33（実 48）は、17 区 C-13 グリッドⅢ層から出土した黒色磨研土器の浅鉢の底部で上げ底になっている。外面が左上がりのミガキ調整、内面は右上がりのミガキ調整である。

PL.17 の Photo.3 は黒色磨研土器の深鉢の頸部で明瞭な屈曲を持つ。天城式併行期か。

PL.19 の Photo.2 は黒色磨研土器の深鉢の頸部で内外面に横方向のミガキが顕著に残存する。天城式併行期か。

PL.20 の Photo.1 は、内外面にスス（炭化物が）付着している。外面には条痕と縄文に似た痕跡が残存する。

②弥生時代

Fig.49-1 の 34（実 25）は、12 区 B-7 グリッドのⅡ層出土の弥生土器の甕の口縁部で、外面は横方向のタタキのち縦方向のハケ目調整で、タテハケが残存する。口縁端部に近い部分はヨコナデを施している。内面は端部付近がヨコナデ調整で下部に横方向のハケ目が残存する。

Fig.49-1 の 35（実 28）は、12 区 C-11 グリッドのⅡ層出土の弥生土器の甕の胴部下半で、上部は横方向のタタキ調整で、胴部に当たる範囲は約 3cm で５条の単位が残存する。下半部は縦方向のハケ目が約２cm の幅単位で残存する。23・24 は同一個体と考えられる。

Fig.49-1 の 36（実 26）は、12 区 B-8 グリッドのⅡ層出土の弥生土器甕の脚部で外面幅 1.5cm 単位の９本程度のタテハケ目が残存し、内底面にも幅約 1.5cm の単位の６本のハケ目が残存する。底部内面は、丁寧な指ナデ調整である。

Fig.49-1 の 37（実 43）は、12 区 C-11 グリッドのⅢ層から出土した弥生土器壺の口縁部で、端部に幅 8mm

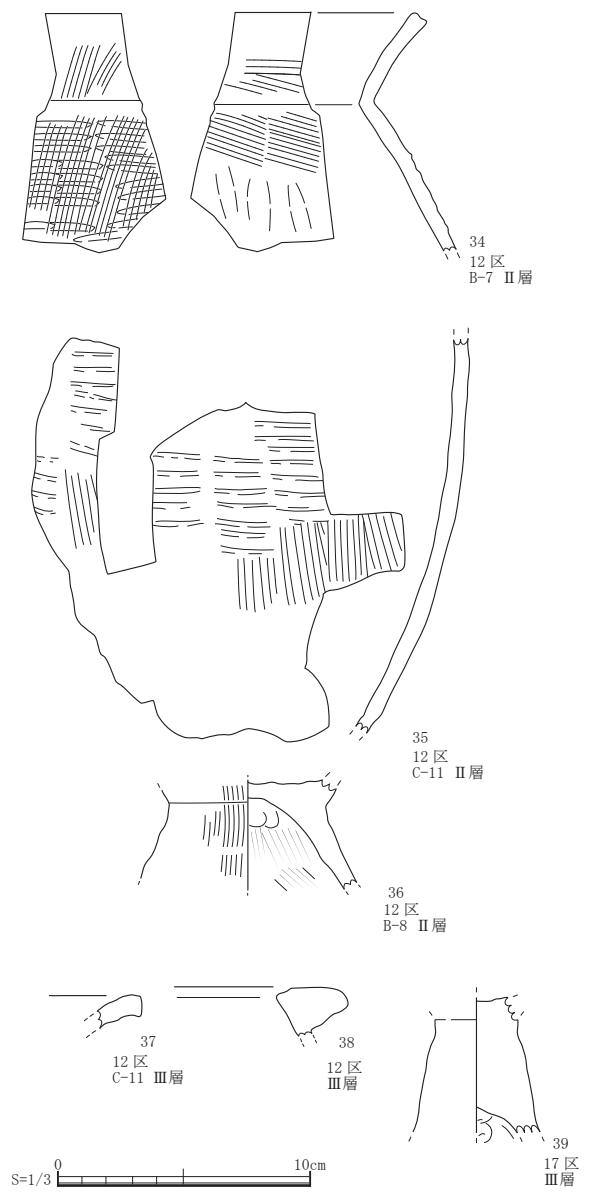


Fig.49-1　12・17 区調査区内出土　弥生土器

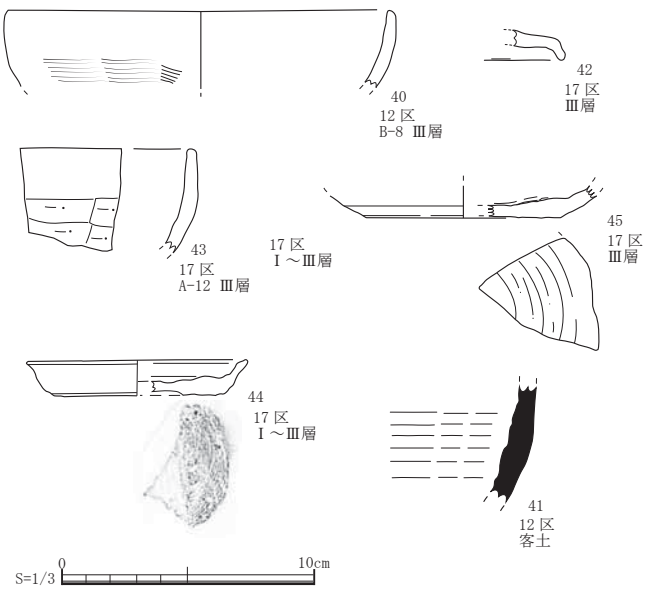


Fig.49-2　12・17 区調査区内出土土師器・須恵器

の面を持つ。

Fig49-1 の 38（実 24）は、12 区Ⅲ層から出土した弥生土器の甕の口縁部で中期前半の城越式土器に併行する時期のものと推定できる。

Fig49-1 の 39（実 54）は、17 区北東部のⅢ層から出土した高杯の脚部である。摩滅が激しく、流れ込みの遺物と考えられる。丁寧な調整を施していたと考えられるが、摩滅の為と考えられる。詳細な調整は不明である。

③古代

Fig.49-2 の 40（実 29）は、12 区 B-8 グリッドⅢ層から出土した土師器の杯で、口縁端部は丸くおさめられている。外面に横方向の刷毛目調整が残存する。

Fig.49-2 の 43（実 56）は、17 区 A-12 グリッドⅢ層から出土した土師器の杯で、口縁端部は丸くおさめられている。外面に横方向の削りが見られ、古墳時代に遡る可能性もある。

Fig.49-2 の 42（実 61）は、17 区Ⅲ層から出土した土師器杯の蓋の口縁である。

Fig.49-2 の 45（実 57）は、17 区北西部Ⅱ～Ⅲ層から出土した土師器杯の底部で、外面・底面にヘラ削りが残存する。網田編年Ⅴ期併行期と考えられる。

Fig.49-2 の 41（実 61）は 12 区客土出土の須恵器の破片で、鉢か壺であると思われる。

PL23 の 1 ～ 14 は 17 区北東や南西から出土した須恵器の甕の破片である。外面内面に平行タタキが残存する。PL.23 の photo.13 は内面に同心円タタキの痕跡も残存する。

④中世

Fig.49-2 の 44（実 62）は、17 区東側中央付近のⅢ層から出土した土師器小皿である。口径 8.6cm、底径 6.6cm、器高 1.4cm の皿で外底面に糸切りの痕跡が顕著に残る。底部外面の調整は、糸切りを施した手前側は未調整で、内面も荒い指ナデ調整である。口縁も歪んでいる。

⑤近世

PL.23 の Photo.10 は、Ⅲ層から出土したで陶器の摺鉢である。内外面釉薬はかからず、内面に 4 本／ cm の摺り目が施されている。

PL.23 の Photo.11 は、17 区南西のⅢ層掘削中から出土したもので、区画溝内に伴う可能性のある遺物である。

肥前系陶器で、内面は全面に鉄釉の褐色の釉薬がかかり、外面は一部のみに、釉薬が垂れている様子がうかがえる。

Tab.2　遺物観察表（石器）

Fig No.	遺物 No.	PL No.	調査区	出土地点	層位	登録番号	器種	石材	全長（cm）	全幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	備考	実測番号
11	1	12	6区	SD001	埋土	6	打製石鏃	西北九州産黒曜石	2.3	1.8	0.5	0.84	両面加工、丁寧な剥離調整で先端は鋭利	7
11	2	12	6区		包含層	11	打製石鏃	針尾産黒曜石	2.3	1.3	0.3	0.78	両面加工	3
11	3	12	6区		包含層	7	打製石鏃	安山岩	2.3	2.3	0.2	1.48	両面加工、鋭い剥離の縁はそのまま加工せず使用している。	6
14	1	12	11区		包含層		角錘石器	針尾産黒曜石	5.0	1.4	1.0	6.30		10
41	1	13	12区	D-9G SK006	埋2層	64	剥片	西北九州産黒曜石	3.3	2.2	0.5	2.70		30
42	2	12	12区	A-10G	Ⅲ層	47	打製石鏃	西北九州産黒曜石	1.5	1.0	0.4	0.32	両面加工	12
42	3	12	12区	A-10G	Ⅲ層	47	打製石鏃	西北九州産黒曜石	1.6	1.4	0.4	0.51	両面加工	11
42	4	12	12区	B-8G	Ⅲ層	7	打製石鏃	チャート	1.9	1.6	0.4	1.30	両面加工、断面は山形	9
42	5	12	12区	B-8G	包含層	7	打製石鏃	安山岩	3.0	1.6	0.4	0.86	両面加工、節理が縦方向に入る	4
42	6	12	12区	SD001-a	埋土	34	打製石鏃	西北九州産黒曜石	1.8	1.7	0.3	0.56	両面加工	2
42	7	12	12区	SD001-b	埋土	36	打製石鏃	サヌカイト	2.0	1.4	0.3	0.86	風化が著しい	5
42	8	12	12区	B-9G	Ⅲ層	33	打製石鏃	西北九州産黒曜石	1.4	1.0	0.2	0.18	両面加工	1
42	9	12	12区	B-10G	Ⅲ層	41	打製石鏃	黒曜石	1.3	1.2	0.3	0.50	両面加工	26
42	10	12	12区	C-9G	Ⅲ層	35	打製石鏃	西北九州産黒曜石	3.3	2.0	0.45	1.50	両面加工	13
42	11	12	12区	C-8G	Ⅲ層	11	打製石鏃	姫島産黒曜石	2.3	2.2	0.5	1.60	両面加工	16
42	12	12	12区	C-9G	Ⅲ層	36	打製石鏃	西北九州産黒曜石	2.0	1.2	0.4	0.50	両面加工	34
42	13	12	12区	B-11G	Ⅲ層	53	打製石鏃	安山岩	2.2	1.4	0.3	0.90	両面加工	15
42	14	12	12区	C-9G	Ⅲ層	36	打製石鏃	安山岩	1.5	1.3	0.3	0.40	両面加工	36
42	15	12	12区	C-9G	Ⅲ層	36	打製石鏃	安山岩	1.3	1.4	0.3	0.40	両面加工	35
42	16	12	12区	C-9G	Ⅲ層	36	打製石鏃	安山岩	2.0	1.5	0.3	0.60	両面加工	24
42	17	12	12区	C-10G	Ⅳ層	43	打製石鏃	黒色チャート	2.2	1.5	0.3	0.50	両面加工	14
42	18	12	12区		Ⅲ層下面	32	打製石鏃	安山岩	2.1	1.8	0.3	1.10	両面加工	8
42	19	12	12区	北西	Ⅲ層	4	打製石鏃	サヌカイト	1.2	1.7	0.3	0.50	両面加工	27
42	20	15	17区	SD001～004の間	Ⅲ層	54	打製石鏃	サヌカイト	1.7	1.5	0.4	0.50	両面加工	19
42	21	15	17区	B-12G	Ⅲ層	63	打製石鏃	西北九州産黒曜石	1.4	1.1	0.3	0.20	両面加工	21
42	22	15	17区	B-12G	Ⅲ層	63	打製石鏃	西北九州産黒曜石	1.6	1.6	0.3	0.60	両面加工	20
42	23	15	17区	北東	Ⅲ層	36	打製石鏃	サヌカイト	1.2	1.4	0.3	0.40	両面加工	28
42	24	15	17区	南西　精査中	Ⅲ層	22	打製石鏃	西北九州産黒曜石	1.6	1.3	0.3	0.40	両面加工	18
42	25	13	12区	B-9G SD001	埋土	20	打製石鏃	黒曜石	1.5	3.3	0.3	1.50	両面加工	29
43-1	26	13	12区	D-7G 精査中	Ⅱ層	29	石匙	安山岩	5.3	4.0	0.6	13.30	両面加工	17
43-1	27	13	12区	C-9G 掘削中	Ⅲ層	37	石匙	安山岩	6.5	2.5	0.9	13.30	両面加工	25
43-2	28	15	12区	A-9G	Ⅲ層	46	刃部磨製石斧	安山岩	7.1	8.3	0.9	67.60		23
43-2	29	13	12区	A-11G	Ⅲ層	54	叩き石	安山岩	13.0	8.2	4.7	775.00	ベンガラ付着？	37
43-2	30	14	12区	C-9G 清掃中	Ⅲ層	12	打製石斧	蛇紋岩	8.1	4.4	1.1	50.30		22
43-2	31	13	12区	SD002	埋土	37	砥石	砂岩	11.5	6.8	2.3	407.40	ベンガラ付着	38
44	32	15	17区	C-14G	Ⅲ層	53	穂積貝	蛇紋岩	8.7	6.0	0.8	56.50		33
44	33	14	17区	A-13G	Ⅲ層	62	打製石斧	安山岩	14.7	6.9	1.9	282.10		32
44	34	14	17区	北西	Ⅲ層	18	打製石斧	安山岩	16.9	9.7	2.4	449.60		31
PLのみ		15-1	17区	包含層	Ⅲ層	4	剥片	黒曜石	2.3	1.7	0.3	1.20		
〃		15-2	17区	包含層	Ⅲ層	4	剥片	黒曜石	3.1	2.3	0.5	3.60		
〃		15-3	17区	包含層	Ⅲ層	63	塊	黒曜石	3.7	2.9	2.7	26.80		
〃		15-4	17区	E-13 G	Ⅲ層		打製石斧	緑泥片岩	2.5	3.5	0.9			

Tab.3　遺物観察表（土器）

Fig No.	遺物 No.	PL No.	調査区	出土地点	層位	登録番号	種類	器種	部位	口径（cm）	残存器高（cm）	底径（cm）	外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整	内面調整	備考	実測番号
7	1	15	6区	SD001	埋土	4	瓦	平瓦	破片	長5.7	幅7.8	厚1.9	黄灰 2.5Y4/1	褐灰 10YR4/1	長石・角閃石	良	ナデ、ケズリ	ナデ		14
12	2	23	6区		包含層	11	縄文土器	精製浅鉢	口縁部	-	1.7	-	浅黄橙 10YR8/4	灰白 5Y7/2	長石・石英	良	ミガキ	ナデ		8
12	3	23	6区		包含層	5	縄文土器	精製浅鉢	口縁部	-	2.2	-	にぶい黄褐 10YR5/4	橙 5YR6/6	長石・角閃石	良	2条の凹線、縄文、ミガキ	ミガキ		7
12	4	23	6区		包含層	13.11	縄文土器	精製浅鉢	肩部	-	4.4	-	にぶい黄橙 10YR7/2	灰黄褐 10YR6/2	長石・角閃石	良	ミガキ、縄文、沈線	ミガキ		10
12	5	23	6区		包含層	12	縄文土器	精製浅鉢	胴部	-	5.1	-	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/2	長石・角閃石	良	ミガキ、沈線	ミガキ		9
12	6	23	6区		包含層	9	縄文土器	精製深鉢	口縁部	-	5	-	にぶい橙 7.5YR7/3	淡黄 2.5Y8/4	長石・角閃石	良	ミガキ	ミガキ	内面に薄い黒斑あり	5
12	7	23	6区		包含層	5	縄文土器	粗製深鉢	胴部	-	6.4	-	にぶい黄橙 10YR6/4	浅黄橙 10YR8/3	長石・角閃石	良	条痕	条痕		6
12	8	23	6区		包含層	12	縄文土器	精製深鉢	胴部	-	5.1	-	浅黄 2.5Y7/3	灰黄 2.5Y7/2	長石・角閃石	良	ミガキ	ナデ		2
12	9	23	6区		包含層	12	縄文土器	精製浅鉢	底部	-	2.6	6.4	浅黄橙 10YR8/6	浅黄 2.5Y7/3	長石・角閃石	不良	ミガキ	ミガキ		1
12	10	23	6区		包含層	9	縄文土器	精製深鉢	口～底部	約17	18.1	8	赤褐色 7.5YR7/4	淡赤褐色 7.5YR7/4	長石・角閃石	良	横ミガキ、縦ミガキ	横ミガキ、ハケ	縄文晩期	11

Fig No.	遺物 No.	PL No.	調査区	出土地点	層位	登録番号	種類	器種	部位	口径（cm）	残存器高（cm）	底径（cm）	外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整	内面調整	備考	実測番号
12	11	23	6区		表土	3	土師器	杯	底部	-	1.2	(8.0)	橙 5YR6/8	橙 7.5YR6/6	長石・赤色酸化粒・角閃石	良	回転ナデ	回転ナデ、ナデ		17
19	1	16	11区		包含層	1	土製	耳栓	破片	長 5.5	幅 2.1	-	黄褐 10YR5/8	黄褐 10YR5/8	長石・石英・雲母	良	ナデ、指おさえ	ナデ		4
19	2	16	11区		包含層	1	縄文土器	精製浅鉢	底部	-	2.4	(8.3)	橙 7.5YR7/6	黒 10YR2/1	長石・石英・角閃石	良	ミガキ	ナデ	内面に炭化物付着	3
23	1	15	12区	B-9G SD001c	埋2層	7	瓦質土器	火鉢か	胴部	-	5.4	-	黒 2.5Y2/1	黒 2.5Y2/1	長石・雲母・角閃石	良	格子目タタキ、ナデ	ナデ	SD004を含む可能性あり	44
23	2	23	12区	C-9G SD004	埋土	22	陶磁器	椀	胴部	-	4	-	釉薬；明青灰 5B7/1	にぶい黄橙 10YR6/3	密	良	回転ナデ、回転ケズリ	回転ナデ	施釉	45
28	3	15	17区	SD001	埋1層	38	瓦	平瓦	破片	長 6.4	幅 8.9	厚 1.7	褐 7.5YR4/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石・石英・角閃石	良	ケズリ、ナデ	ナデ		60
28	4	15	17区	SD002	埋1層	30	瓦質土器	こね鉢	胴部	-	4.4	-	暗灰黄 2.5Y5/2	黄灰 2.5Y5/1	長石・角閃石	良	ナデ	横ナデ		58
28	5	15	17区	SD005	埋1層	42	須恵器	甕	頸部	-	2.6	-	黄灰 2.5Y6/1	黒褐 2.5Y3/1	長石・黒色粒	良	回転ナデ、縦方向タタキ	回転ナデ	施釉	59
41	6	20	17区	SK007	埋土	47	縄文土器	精製深鉢	口縁部	-	3.7	-	にぶい黄橙 10YR6/3	黒褐 10YR3/2	長石・雲母・角閃石	良	端部に縄文、2条沈線、横ミガキ	横ミガキ	波状口縁	46
45	7	17	12区	B-11G	Ⅲ層	53.69	縄文土器	深鉢	口縁部・胴部	-	23以上	-	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい黄橙 10YR6/4	長石・角閃石	良	凹線文様、ケズリ	指ナデ	阿高式土器	12
45	8	19	12区	B-11G	Ⅲ層	53.69	縄文土器	深鉢	胴部	-	16.7	-	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい黄橙 10YR6/4	長石・角閃石	良	凹線文様、ケズリ	指ナデ	阿高式土器、17区の遺物No.63と接合	12
45	9	18	12区	B-9G SD001c	埋土	6	縄文土器	精製深鉢	口縁部	-	2.3	-	にぶい褐 7.5YR5/4	明褐 7.5YR5/6	長石・石英	良	縦凹線文、ケズリ	ナデ	南福寺式土器	32
45	10	18	12区	B-9G SD001c	埋土	6	縄文土器	深鉢	口縁部	-	4	-	明褐 7.5YR5/6	にぶい褐 10YR5/3	長石・石英・雲母	良	縦凹線文、ケズリ	ナデ	南福寺式土器	34
45	11	22	17区	南側サブトレ	Ⅲ層	16	縄文土器	深鉢	口縁部	-	4	-	褐 7.5YR4/4	褐 7.5YR4/4	長石・雲母	良	凹線文、ナデ	ケズリ後ナデ	深浦式土器	50
45	12	18	12区		Ⅲ層	67	縄文土器	深鉢	胴部	-	5.3	-	明赤褐 2.5YR5/6	赤褐 5YR4/6	長石・角閃石	良	凹線文、ナデ	ナデ	阿高式～北区根山式系土器	33
45	13	20	17区	B-14G	Ⅲ層	58	縄文土器	深鉢	胴部	-	3.1	-	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄橙 10YR7/4	長石・角閃石	良	ナデ、縦方向沈線	ナデ	外面にスス付着	51
46	14	22	12区	A-10G	Ⅲ層	50	縄文土器	精製浅鉢	肩部	-	2	-	にぶい黄橙 10YR7/4	灰黄褐 10YR6/2	長石・角閃石	良	横ミガキ、傾列列点文	横ミガキ	鳥井原式土器	35
46	15	19	12区	A-10G	Ⅲ層	50	縄文土器	精製浅鉢	頸部	-	3.5	-	灰黄褐 10YR6/2	灰黄褐 10YR6/2	長石・角閃石	良	ミガキ、沈線	横ミガキ	太郎迫式土器	36
46	16	19	12区	B-7G	Ⅲ層	17	縄文土器	粗製深鉢	口縁部	-	3.6	-	灰黄褐色 10YR5/2	にぶい黄橙 10YR6/2	長石・角閃石	良	沈線、ケズリ後ナデ	ナデ		18
46	17	18	12区	D-7G	Ⅲ層	28	縄文土器	精製深鉢	頸部	-	4.1	-	黒褐色 10YR3/2	黒褐色 10YR3/1	長石・角閃石	良	沈線、擦り消し縄文	横ミガキ		37
46	18		12区	C-9G	Ⅲ層	36	縄文土器	精製深鉢	口縁部	-	4.3	-	赤褐色	赤褐色	長石・赤色酸化粒・角閃石	良	横ミガキ、縦ミガキ	横ミガキ		41
46	19	19	12区	A-10G	Ⅲ層	33	縄文土器	精製深鉢	口縁部	-	7.9	-	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/4	長石・石英・角閃石	良	2条沈線、横ミガキ	横ミガキ	太郎迫式土器、波状口縁	19
46	20	19	12区	C-11G	Ⅲ層	60	縄文土器	精製深鉢	口縁部	-	4.9	-	暗褐色 10YR3/3	にぶい黄橙 10YR6/3	長石・雲母・角閃石	良	2条沈線、横ミガキ	ミガキ	波状口縁か	31
46	21	18	12区	A-9G	Ⅲ層	46	縄文土器	精製浅鉢	口縁部	-	7.9	-	浅黄 2.5Y7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	長石・角閃石	良	横ミガキ、縦ミガキ、二条沈線	横ミガキ、ハケ	外面に黒斑あり	16
46	22	18	12区	A-9G	Ⅲ層	46	縄文土器	精製浅鉢	底部	-	23	(4.0)	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR6/4	長石・角閃石	良	ミガキ	ナデ	外面に黒斑あり	16
46	23	19	12区		Ⅲ層	14	縄文土器	深鉢	頸部～胴部	-	24.2	-	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石・石英・角閃石	良	ミガキ、ケズリ後ナデ	ミガキ、ケズリ後ナデ	内外面にスス付着	13
47	24	20	12区	C-11G	Ⅲ層	60	縄文土器	粗製深鉢	胴部	-	10.8	-	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	長石・石英・雲母・黒灰色礫	良	ケズリ	指ナデ		38
47	25	18	12区	A-10G	Ⅲ層	50	縄文土器	精製深鉢	胴部	-	5.5	-	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石・角閃石	良	2	横ミガキ		30
47	26	18	12区	D-9G	Ⅲ層	18	縄文土器	精製深鉢	胴部	-	8.8	-	灰黄褐 10YR4/2	にぶい黄褐 10YR3/3	長石・石英・雲母	良	ミガキ	ミガキ、ケズリ後ナデ		40
47	27	20	12区	D-9G	Ⅲ層	31	縄文土器	粗製深鉢	底部	-	2.8	7.4	明黄褐 10YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/2	長石・石英・角閃石	良	ミガキ	ナデ		39
47	28	18	12区	B-9G	Ⅲ層	4	縄文土器	精製深鉢	胴部	-	12.8	-	灰黄褐 10YR4/2	にぶい黄橙 10YR6/3	長石・石英・雲母	良	ミガキ	ミガキ		15
48	29	20	17区	南東	Ⅲ層	21	縄文土器	精製浅鉢	口縁部	-	2.6	-	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/2	長石・石英・角閃石	良	横ミガキ	横ミガキ	波状口縁、端部に黒斑あり	53
48	30	20	17区	D-14G	Ⅲ層	58	縄文土器	深鉢	胴部	-	3.5	-	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	長石・角閃石	良	ミガキ、沈線	横ミガキ		52
48	31	20	17区	C-13G	Ⅲ層	52・53	縄文土器	精製浅鉢	口縁部	-	5.3	-	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	長石・石英・黒色粒	良	端部に2条凹線、横ミガキ	横ミガキ	外面に黒斑あり	55
48	32	19	17区	B-12G	Ⅲ層	63	縄文土器	粗製深鉢	底部	-	1.6	8	橙 7.5YR6/3	灰黄褐 10YR6/2	長石・角閃石	良	ケズリ後ナデ、ミガキ	指ナデ、ミガキ		49
48	33	19	17区	C-13G	Ⅲ層	52	縄文土器	精製浅鉢	底部	-	3.8	4	黒褐 10YR3/1	灰黄褐 10YR5/2	長石・角閃石	良	ミガキ	ミガキ		48
49-1	34	21	12区	B-7G	Ⅱ層土器集中部	14・18	弥生土器	甕	口縁～胴部	-	9.5	-	浅黄 2.5Y7/3	浅黄 2.5Y7/3	長石・角閃石	良	ハケ後横ナデ、タタキ後ハケ目	ハケ目、指抑え		25
49-1	35	21	12区	C-11G	Ⅲ層	14	弥生土器	甕	胴部	-	15.7	-	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR6/3	長石・角閃石	良	タタキ後ナデ、ハケ目	ナデ	外面は被熱にるる赤変か、内面には煮炊き痕あり。	28

Fig No.	遺物 No.	PL No.	調査区	出土地点	層位	登録番号	種類	器種	部位	口径（cm）	残存器高（cm）	底径（cm）	外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整	内面調整	備考	実測番号
49-1	36	21	12 区	B-8G	Ⅲ層	5	弥生土器	甕	脚部	-	4.4	-	灰黄褐 10YR5/2	灰黄褐 10YR5/2	長石・角閃石	良	ハケ目後ナデ	ハケ目、指ナデ		26
49-1	37	22	12 区	C-11G	Ⅲ層	68	弥生土器	壺	口縁部	-	1.3	-	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	長石	良	横ナデ	横ナデ		43
49-1	38	19	12 区	A-10G	Ⅲ層	13	弥生土器	甕	口縁部	-	2	-	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石・石英・褐色粒	良	ナデ	ナデ		24
49-1	39	22	17 区	北東	Ⅲ層	23	土師器	高杯	脚部	-	5.4	-	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	長石・石英・角閃石・赤色酸化粒	良	ナデ	ナデ、横ナデ指ナデ		54
49-2	40	22	12 区	B-8G	Ⅲ層	10	土師器	杯	口縁部	15	3	-	明赤褐 5YR5/8	明赤褐 5YR5/8	長石・石英・角閃石	良	横ナデ、横ハケ	横ナデ、ナデ		27
49-2	41	22	12 区		客土	21	須恵器	杯	胴部	-	4.5	-	黄灰 2.5Y5/1	暗黄灰 2.5Y5/2	長石・石英	良	ナデ	ヘラケズリ後回転ナデ		29
49-2	42	22	17 区		Ⅲ層	27	土師器	杯蓋	口縁部・胴部	-	1.2	-	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石・石英・赤色粒	良	ナデ	ナデ		61
49-2	43	22	17 区	A-12G	Ⅲ層	61	土師器	杯	口縁部	-	4.1	-	明赤褐 5YR5/8	明赤褐 5YR5/8	石英・角閃石	良	横ナデ、ケズリ後ナデ	横ナデ、ナデ		56
49-2	44	22	17 区		Ⅲ層	9	土師器	皿	口縁～底部	(8.6)	1.4	(6.6)	にぶい褐 7.5YR6/4	橙 7.5YR6/6	長石	良	ナデ、糸切り	ナデ		62
49-2	45	22	17 区	北西	Ⅰ～Ⅲ層	7	土師器	杯	底部	-	1.3	(7.6)	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	長石・赤色粒	良	ナデ、ケズリ	ナデ、横ナデ		57
PLのみ		23-7	11 区		包含層		陶磁器	椀	胴部	-	1.2	-	灰黄 2.5Y6/2	灰黄 2.5Y6/2	蜜（白色粒）	良	施釉	施釉		
		23-8	11 区		包含層		陶器	椀	底部	-	1.8	-	にぶい黄褐 10YR5/3	釉薬）暗灰黄 2.5Y4/2	密	良	回転ナデ、ヘラケズリ、施釉、削り出し高台	回転ナデ、釉剥ぎ	鉄釉	
		23-9	11 区		包含層		瓦質土器	火鉢	口縁部	(18.0)	2	-	-	黄灰 2.5Y4/1	長石	良	剥離	回転ナデ		
		15-5	12 区	SD004	埋土	104	須恵器	壺	頸部	-	3.0	-	にぶい黄褐	暗灰黄 2.5Y5/2	長石・黒色粒	良	回転ナデ	同心円文当て具痕		
		15-6	17 区	SD006	埋１層	45	須恵器	壺	胴部	-	7.0	-	暗灰黄 2.5Y5/2	暗灰黄 2.5Y4/2	長石・黒色粒	良	平行痕タタキ	平行痕タタキ		
		19-1	12 区	B-7G	Ⅱ層土器集中部	14	縄文土器	深鉢	胴部	-	2.2	-	灰黄褐 10YR5/2	灰黄褐 10YR5/2	長石・石英・角閃石	良	ナデ、凹線文	ナデ		
		19-2	12 区	B-7G	Ⅱ層土器集中部	14	縄文土器	深鉢	胴部	-	3.5	-	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	長石・石英・角閃石	良	ナデ、凹線文、列点文	ナデ		
		19-3	12 区	B-7G	Ⅱ層土器集中部	14	縄文土器	深鉢	口縁部	-	3.8	-	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	長石・石英・角閃石	良	ミガキ	ミガキ		
		18-1	12 区	A-11G	Ⅲ層	6	縄文土器	深鉢	胴部	-	4.5	-	褐 7.5YR4/4	暗褐 7.5YR3/4	長石・石英・角閃石	良	条痕	ナデ		
		18-2	12 区	A-11G	Ⅲ層	6	縄文土器	深鉢	胴部	-	3.4	-	褐 7.5YR4/4	暗褐 7.5YR3/4	長石・石英	良	条痕	ナデ		
		19-1	12 区	A-10G	Ⅲ層	47	縄文土器	深鉢	頸部	-	3.0	-	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/3	長石・石英・角閃石	良	条痕、一部ミガキ	ミガキ		
		19-2	12 区	A-11G	Ⅲ層	48	縄文土器	深鉢	口縁部	-	4.4	-	褐 7.5YR4/4	にぶい褐 7.5YR5/4	長石・石英・角閃石	良	ミガキ	ナデ		
		20-2	12 区	包含層	Ⅲ層	1	縄文土器	鉢	口縁部	-	3.6	-	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	長石・石英・角閃石	良	ミガキ	ナデ、ミガキ		
		20-1	17 区	C-13G	Ⅲ層	52	縄文土器	鉢	胴部	-	6.5	-	灰黄褐 10YR5/2	にぶい黄橙 10YR6/3	長石・石英・角閃石	良	条痕	ナデ		
		22-1	12 区	包含層	Ⅲ層	1	土師器	杯	底部	-	1.1	-	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	長石・赤色酸化粒	良	ナデ	ナデ	摩滅が著しい。	
		23-1	17 区	SD006	埋土上層	50	陶器	椀	胴部～高台	6.5 以上	3.6	4.0	暗オリーブ褐 2.5Y3/3	灰白 7.5Y7/1	蜜	良	削り出し高台、鉄釉施釉	見込みに呉須で 11 弁の花文、施釉	肥前系	
		23-2	17 区	SD002	埋土	59	陶磁器	皿	杯部	-	2.0	-	灰白 7.5Y7/1	灰白 7.5Y7/1	蜜（黒色粒）	良	回転ケズリ、施釉	回転ナデ、施釉	肥前系	
		23-3	17 区	SD005	埋土	44	陶磁器	椀	底部	-	1.7	4.5	灰白 10Y9/1	灰白 10Y9/1	蜜（黒色粒）	良	削り出し高台、鉄釉施釉	回転ナデ、施釉、釉剥ぎ		
		23-4	17 区	SD003	埋土	40	陶器	鉢	胴部	-	3.5	-	暗灰黄 2.5Y4/2	暗灰黄 2.5Y5/2	蜜（白色粒）	良	回転ナデ、二条沈線	回転ナデ、二条沈線	肥前系	
		23-5	17 区	SD007	埋土	47	陶器	鉢	胴部	-	4.0	-	灰白 N8/	灰白 N8/	白色粒	良	回転ナデ、釉薬とハケによる文様	回転ナデ、釉薬	肥前系	
		23-6	17 区	SD007	埋土	47	染付	花瓶か	胴部	-	4.0	-	灰白 7.5Y7/1	灰白 7.5Y7/1	蜜（黒色粒）	良	回転ナデ、釉薬、横位線の染付	回転ナデ、釉薬	肥前系	
		23-10	17 区	包含層	Ⅲ層	4	須恵器	擂鉢	胴部	-	3.0	-	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄褐 10YR5/3	蜜（黒曜石・白色粒）	良	7 本単位の擂目	ナデ		
		23-11	17 区	包含層	Ⅲ層	3	須恵器	壺	胴部	-	5.2	-	にぶい黄褐 10YR4/3	灰黄褐 10YR4/2	蜜	良	回転ナデ、施釉（釉たれあり）	施釉	鉄釉	
		23-12	17 区	包含層	南壁面Ⅲ層	1	須恵器	甕	胴部	-	5.5	-	褐 7.5YR4/3	灰黄褐 10YR5/2	長石・黒色粒	良	平行痕タタキ	平行痕当具		
		23-13	17 区	包含層	Ⅲ層	9	須恵器	甕	胴部	-	3.3	-	褐灰 10YR4/1	褐灰 10YR5/1	長石・黒曜石	良	平行痕タタキ	平行痕当具		
		23-14	17 区	包含層	Ⅲ層	28	須恵器	甕	胴部	-	4.5	-	褐灰 10YR4/1	褐灰 10YR6/1	褐色粒	良	平行痕タタキ後ハケ目	平行痕当具		

第Ⅳ章　遺構・遺物の分析

第１節　縄文時代の土坑

11 区で検出した SK002 は、長軸 136㎝、短軸 108㎝、深さ 116㎝、SK003 は、長軸 126㎝、短軸 122㎝、深さ 108cm を測り、平面規模が 1m 以上、深さ 1m 以上残存する。底面の長さは 60cm 程度で、ほぼ同規格である。

遺物はほとんどなく、時期の判定は難しいが、検出面や埋土の状況、周辺の遺物の出土状況から考えて縄文時代後。晩期であると考えられる。

土坑の機能を特定するのは難しいが、他の遺跡の類例をもとに落とし穴である可能性を検討したい。

落とし穴が掘削される掘り方の断面は垂直である場合が多く、底面の長さは 70cm 以上で 1m 以上のものが多い。底面の大きさが 50 ～ 60cm のものは落とし穴と推定している。遺構の中では最小である。

落とし穴状遺構として構造的な特徴で報告されているものは、1m 以上の長さの底面を持ち、底面に杭の痕跡が見られるものが多い（Tab.4 参照）。それらは、台地の上部及び緩やかな斜面に位置するものである。これらの遺構の立地は、第 14 回九州縄文研究会鹿児島県国分大会で「九州の陥し穴」で発表された高橋信武氏によると、Ⅰ類とされた丘陵・段丘等の周辺よりも高い地形の縁辺部に地形に沿って並列するものにあたる。他には山の上や尾根等の地形変換点に１基あるいは２基が近接して配列するものが考えられ、鼓ケ峰遺跡１号土坑等がそれに相当する可能性がある。

立石遺跡 11 区の土坑が落とし穴とすれば、Ⅱ類とされた谷周辺に散在するもので、「水場付近に集まる動物用の罠」ではないかと推定されているもので、第 14 回九州縄文研究会鹿児島県国分大会の報告集「福岡県内のおとし穴状遺構」で、林潤也氏が分類した中の「独立散在型」もしくは「少数配列型」（２基１対を基本とする類）に相当するであろう。ただ、現在のところ熊本県ではこうした立地で縄文時代の深い土坑の検出例がほとんどない。

さらに、構造的な問題としては底面に杭などの痕跡が認められなかった点も併せると、落とし穴と断定するのは難しい状況であろう。今後の類例を待つ必要がある。

また、貯蔵穴等も水場周辺、遺跡の縁辺にも設けられるものがあるため、貯蔵穴等の可能性も視野に入れる必要がある。

縄文時代の貯蔵穴の用途として確実な遺構は、曽畑遺跡の貯蔵穴群である。その形態が参考になる。典型的な形状は 24・25 号貯蔵穴等のような断面の形状が垂直のもので、底面が平坦で 65 ～ 70cm のものである。外形の長軸の長さは 100 ～ 130cm のもので、深さは 70 ～ 80cm のものが多い。

縄文時代前期は楕円形、後・晩期になると円形に近くなるという変遷を指摘している。

11 区の土坑に類似するのは、12 区 SK005、SK011 である。11 区の土坑と比較すると、やや規模が小さく１m 前後、底面が平坦で 55 ～ 60cm、深さ 55 ～ 80cm で、深さがやや浅いため、貯蔵穴等としての機能も考える必要があろう。

SK006 は、長軸 180cm だが、底面が 60cm で壁の立ち上がりが緩やかである。上層に焼土塊が多数入っており、炉穴等の可能性もあるが、壁面自体は焼けておらず、状況的には確認できない。

検出した深さが 70cm のため、落とし穴の可能性の他、貯蔵穴の可能性がある。その他は、検出された遺構の検出面が本来より下であったとしても深さが浅く、土坑の機能を推測するのが難しい。

今回検出された土坑は、出土遺物がほとんどなく、時期を判定するのは難しい。しかしながら、検出面や遺構埋土から縄文時代後・晩期を中心とする時期と推定している。

土坑の機能については、類例を検討したが、推定の域をでない。機能としては、落とし穴状遺構や貯蔵穴の可能性が高いと考えられる。周辺の調査及び類例の増加や今後の調査に期待したい。

第２節　縄文時代の石鏃について

石鏃として使用する石材については、黒曜石、安山岩、チャート製のものに大きく分けられる。チャート製のものは少なく、3 点しか出土していない。

黒曜石は、ほとんど西北九州産黒曜石である。灰白色を呈する特徴を持つ針尾産黒曜石も数点含まれる。

形態的には、二等辺三角形のものを基本とするが、側縁がやや丸みを帯びるものが多く、側縁の半ばで屈曲し、略五角形状を呈するもの、正三角形に近いものが含まれる。

正三角形に近いものは、全長 15 ～ 17mm の小形のもの（Fig.42 の 9・14・20 等）である。やや幅が広いもの（Fig.42 の 15・19・23）も小形のものである。それらは、尖端部の調整剥離は細かいが、側縁は基部から直線的なものが多い。これらの石鏃は、尖端部及び脚が欠失しているものが多く、耐久製は低いと考えられる。小形であっても脚が尖がるものが多く、脚の逆刺としての機能が重要であったことが伺える。剥離痕跡が３mm 以

上の幅で、調整剥離は小形品としては大まかと言える。調整の省略化が見られる。（Fig.42-20）厚さは 3mm 以下で薄く、重さは 0.2 ～ 0.4g と軽い。

中形品は、全長 18 ～ 23mm 程度のもので、側縁が内湾するものや側縁が屈曲して緩やかな略五角形状のものが多い。基部の抉りが深いもの（5 ～ 10mm の深さ）（Fig.42 の 4・5・7・10・16 等）と、抉りの深さが浅いものがある。抉りが深いものは、側縁の基部より内側に剥離しており、脚先が鋭くなっている。ただ、基部の抉り部分を丁寧加工しているものは Fig.42 の 5・10 だけで、他のものについては省略化が見られる。

それらは側縁が丸みを帯びているいるものが多く、尖端部を丁寧に成形しているものが見られる。重さは 0.5 ～ 0.6g である。

厚みが 5mm 程のものもあるが、重さを抉りの部分で調整しているようである。（Fig.11 の 1、Fig.42 の 4・5・10・16 等）

中形品で抉りが浅いもの（Fig.42 の 17・18・22）は厚さも 3mm 以下で薄い。

中形品の形状の違いは、時期差か、獲物の違いかを検討する必要がある。

全長 30mm 以上の大形品は、少数であるが存在する。Fig.11 の 3 は、剥片族で、側縁のみの調整である。厚さ 2mm 以下と薄い。尖端部は大きく欠損している。Fig.42 の 25 も剥片鏃でこれも厚さは薄い。対象的に Fig.42 の 4・10・11 等は大形品に含められると考えられるが、全長 25mm 以下で 5mm 以上の厚さである。

これらは、側縁が屈曲して略五角形状を呈するが丸みを帯びる。再利用や重さの調整等を意識している可能性がある。

全体的な傾向として、側縁の形状の調整は大まかで細かい調整までは行っていないものが多い。基部についても抉り部分の調整も大まかである。ただし、脚の形状は尖るものが多く、逆刺（かえり）の機能を重視している。

出土した石鏃のほとんどが使用した結果、尖端部・脚（逆刺）が欠失しており、側縁の一部も同様で再加工していると考えられる。左右非対称のものは、調整の省略化とともに再利用する際に欠失した部分を補った結果のものもあると考えられる。

石鏃の時期は、出土土器から阿高式から古閑式段階と推定できるが、遺物包含層出土のものがほとんどであったため、その中での時期的な区別は困難である。

ただ、平成 10 年から平成 11 年度の県による阿高貝塚第 2 次調査では剥片鏃を含めた素材剥片の面を大きく残す石鏃が出土している。本遺跡でも剥片鏃（Fig.11 の 3、FIig.42 の 25）等鈴桶型石刃技法を用いたと推定できるものや、Fig.42 の 11 のように素材剥片を大きく残すものもが出土している。出土土器は少ないが、阿高式土器に併行する時期の打製石鏃も含まれると考えられる。

第 3 節　縄文時代後期前半の土器について

阿高式土器については、荒木隆宏「阿高式土器の細分と編年」『先史学・考古学論究Ⅳ』龍田考古学会 2003 に詳しい。また、それを受けて「黒髪町遺跡群 4 次調査区」『熊本市の報告書 2008「熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集」平成 19 年度で美濃口雅朗氏が行った分類に沿って今回出土した資料について、詳述したい。（Fig.50・51 参照）

今回出土した阿高式系土器については 4 種類である。Fig.45 の 7・8 は同一個体と推定でき、推定部位に位置して、実測図及び拓本・写真を掲載した。口縁部は凹点で美濃口分類凹点ウである。下部には凹線 A 1 類、その下の凹点もウ、凹線は A 1 類も含みながら凹線 A 2 類が主体である。文様構成は口縁部付近の施紋帯は凹点を境にして 3 段に分かれると考えられる。また、胴部下半の一部に浅い A 1 類の凹線が左上がり方向に 3 条見られ、部分的な文様帯を構成していたと考えられる。

滑石の含有は見られない。その代わり、角閃石や雲母が比較的多く見られる。地元の土を使った在地の土器と考えられる。

Fig.45 の 11 は、口縁端部に凹点を持つもので、外面に A 2 類の凹線を八の字条に 2 条持つ破片である。凹線の間の外面の調整は非常に丁寧である。口縁部直下は、無文で凹線による文様帯が始まるものは多く見られるが、斜めの凹線の間に無文部分が見られるのは珍しい。しかしながら、形式から見て阿高式系土器と考えられる。

Fig.45 の 9・10 は口縁部付近に凹点もしくは縦位の凹線紋が施されている。南福寺式土器と推定できる。

Fig.45 の 9 は凹点の長さが約 2cm である。類例としては、託麻弓削遺跡群 5 区 5-1 ～ 3 層出土土器（県報告第 331 集第 52 図・53 図 199 ～ 224 等がある。口縁端部に一部凹点を施すものが多いが文様帯の横位の削

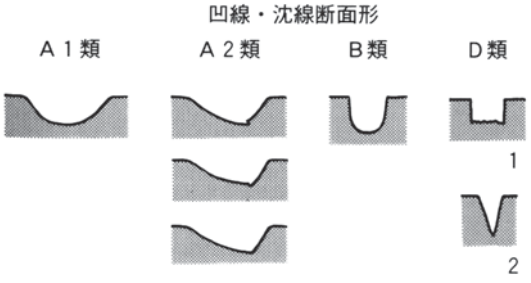


Fig.50　施文具形態分類図 1

り調整等も施している。特に形態を含めて 206・207 は類似点が多い。

他に類似する型式としては、出水式土器として報告されている古閑北遺跡 1 a 区 F-5 グリッド取り上げ番号 165 の資料、 1 b 区 M-5 グリッドの資料（県報告 184 集第 35 図 15・17）,

黒橋貝塚 G-7 区出土、H-7 区出土撹乱の資料（県報告 166 集第 74 図 162、86 図 287）等が類似するが、凹点の上・下に凹点や凹線を持つものが多く、口縁部も端部に凹点を施す波打つ形状のものがほとんどであり、阿高式系統の土器の口縁の影響したものが多い。辺田見中道遺跡 C-4 グリッド 5 層出土土器（熊本県御船町報告第 2 集第 8 図 14）等も同様な資料である。

本遺跡の場合は、さらに省略形の文様帯である。型式学的には新しい段階と考えられる。胎土は角閃石や雲母が少量で長石が目立つが、滑石は含まれない。

その他、前後する型式の土器について検討する。

Fig.45 の 12 は、凹点ア 1 類と凹線 A2 類で構成される文様帯である。Fig.45 の 7・8 との相違点は胎土である。角閃石は含まれるが、小さく少ない。調整もナデによるものであるが、丁寧である。内面も丁寧で Fig.45 の 7・8 の内面調整が指ナデによる痕跡が顕著に残存するのに対して、Fig.45 の 12 は、丁寧なナデとヘラ条工具によるナデで一部ミガキと言っても良い程の丁寧な調整である。胎土中には角閃石は多く見られるが、滑石は含まれない。細片のため、文様帯の構成がわからないが、阿高式系から磨消縄文土器の北久根山式段階のものと推定できる。阿高式土器、南福寺式、その他阿高式系土器、阿高式系土器の流れをくむ土器の 4 型式であり、時期差を持つと推定できる。

遺構は検出できなかったが、北側に縄文時代後期前半にかけての集落が継続的に営まれていたと考えられる。

Fig.45 の 13 は、沈線が縦位から斜位に施されている。詳細な型式は不明であるが、縄文時代前期末から中期前葉にかけての轟 C・D 式（深浦式）の破片の可能性があるが、弥生土器に沈線を施しているとの見解もあり、周辺の調査によりこの土器を評価する必要があろう。もし、深浦式土器と認定できれば、縄文時代後期初頭より、さかのぼる集落が存在する可能性があろう。

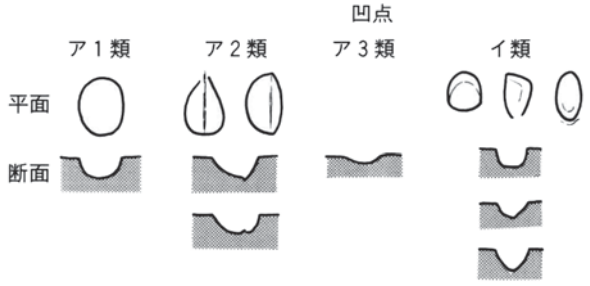


Fig.51　施文具形態分類図 2

第 4 節　円形周溝状遺構について

B・C- 3 グリッドで検出されたもので、平面形は環形の円形周溝状遺構で、溝の壁は比較的立ち上がりが急で、外径 4.65 m、内径で 3.45 m、深さは深い所でも 10㎝ほどしか検出していないが、状況から見て検出面はⅢ層上層である。クロボク由来の埋土を含むため、弥生時代以降のものである可能性が高い。周溝内から遺構に伴うような遺物を含まず、時期の詳細は不明である。

そこで、熊本県内出土の同様な遺構を見てみる。主な出土例は、Tab.5 の通りである .。

ただし、円墳として認識されるような 10m を超える円形周溝墓等は除いている。

時期　この種の遺構は、土器の出土量が少ないものが多い。

熊本市平山町の石の本遺跡群、下益城郡益城町古閑北遺跡、健軍藤原遺跡等は縄文時代後・晩期の集落に隣接して分布するため、縄文時代の項に記述されているものもある。

岩瀬木柑子遺跡のように古墳に隣接するものの他、野入遺跡のように縄文時代後晩期と古代の遺跡（8 世紀代）の複合遺跡から出土しているものがある。

まず、注目すべきは、熊本市江津湖遺跡群の 1 号周溝状遺構で、周溝内から弥生後期終末の土器が 500 片出土している。出土状況写真からは北西側から廃棄されている状況と見て取れる。

阿蘇市狩尾遺跡群池田・古園遺跡 1 号周溝遺構からは狩尾遺跡群Ⅲ期の土器が周溝内から出土しているが、流れ込みの遺物であろう。 5 号周溝状遺構も同様である。

狩尾湯の口遺跡 2 号円形周溝遺構は狩尾湯の口遺跡 39・40 号住居に壊されている。

狩尾遺跡群の時期変遷は、弥生時代竪穴建物の廃棄資料を中心に区分されている。

タタキ調整を顕著に残し、長胴形の甕を含む時期で、高杯は 2 重（段）口縁の 2 段目が大きく開く時期。（狩尾遺跡群 V 期）、甕に叩きを残すが、甕の肩部が胴の中位にあり長胴化が進んでいない状況で、脚部があるものは長脚化する時期。（狩尾遺跡群Ⅳ期）

甕の肩部が上位にあり、最大胴部径が口縁部径を超えるもので脚部も短いか、平底を残すもの。（狩尾遺跡群Ⅲ期）

甕の肩部が上位にあり、最大胴部径が口縁部径に近い器形を持つ時期。（狩尾遺跡群Ⅱ期）

狩尾湯の口遺跡 2 号周溝は狩尾遺跡群Ⅲ期以前に、池田・古園遺跡 1 号円形周溝・ 5 号円形周溝も切り合い関係等からⅢ期以前と考えられる。

円形周溝遺構は、遺跡の状況から考えて弥生時代後期の所産と考えられる。

他の遺跡については、明確な時期を示す資料が少ない。ただ、埋土の記述から見て縄文時代後・晩期に遡るのは難しそうな状況である。

そうした面から見ると、石の本遺跡群は台地西側に縄文時代後・晩期の集落が広がっている遺跡であるが、調査した東側の台地の上位に弥生時代後期の竪穴建物を１軒検出している。旧地表面が削平されていた箇所であり、周囲に何軒かの竪穴建物が存在したと考えられる。狩尾遺跡群の時期変遷に対応するとⅡ期並行期と考えられる。

なお、谷を隔てて古墳時代前期後葉から古墳時代中期前葉までの竪穴建物９軒を検出している点に注意するにしても弥生時代後期の円形周溝状遺構の可能性があると考えられる。

益城町古閑北遺跡でも調査区東端の３区で弥生時代後期後半（狩尾遺跡群Ⅳ期並行期）の竪穴建物を１軒検出している。ここの場合は、円形周溝遺構の方が 6.5m 程高い箇所に位置している。

立地　立石遺跡群の円形周溝状遺構については、隣接する遺構が縄文時代後晩期の土坑である。東側の台地上位に向かって遺構が広がっていると考えられる。つまり、遺跡の分布の縁辺部である。

こうした遺跡は、野入遺跡、健軍藤原遺跡、古保山打越遺跡等に類みることができる。小規模な調査であるため、周辺部の詳細は不明であるが、調査区の縁辺部に位置する可能性が高い。

石の本遺跡群 47-06 号円形周溝遺構は、竪穴建物群とは 20m 下方にある。同様に 31-01 号円形周溝、30-01 号円形周溝状遺構は集落から 20m 以上離れた上方と下方にある。

石の本遺跡群では 39-08 号円形周溝遺構は、縄文後晩期の集落の東側隣接地にあるが、縄文時代（から古墳時代）の集落の縁辺部といって良い状況である。

狩尾遺跡群についても、時期の項で竪穴建物との関係を述べたが、円形周溝遺構が狩尾遺跡群のⅡ期からⅢ期の時期と仮定するなら、池田・古園遺跡１号周溝遺構のあり方から集落のある程度離れた箇所に存在すると考えられる。

こうしたことから、時期的な議論を抜いたとしても集落の縁辺部に位置する遺構と考えられる。

性格　遺構の性格を考えるのは、現状では難しい。ただ、江津湖遺跡群の１号円形周溝状遺構は、土器が廃棄されており、祭祀が行われている可能性が高い。

また、参考までに弥生時代後期の類似する遺構とすると、八代市所在の用七遺跡の方形周溝墓である。ただし、形状が隅丸方形で、大きさが 7.4 ～ 10.4m と規模が大きい。ただし、古墳時代初頭に位置付けてあるが、周溝内から出土した土器は狩尾遺跡群Ⅲ～Ⅳ期に併行しても良さそうな時期である。

それに対して八代市上日置女夫木遺跡は、庄内式土器併行期で、規模もさらに大きく 10m 以上で弥生時代終末から古墳時代にかけての墳丘墓の可能性があるものである。

古墳時代前期から中期の方形周溝墓（方墳）に発展する型式が追えるものと考えられる。これらの類似遺構は、円形周溝状遺構の発展形態の可能性がある。

また、他県に類例を探せば、鹿児島県指宿市南摺ヶ浜遺跡では２.3 ～ 5.6m 規模の円形周溝墓が検出されている。主体部は壺棺墓や土坑墓である。土坑墓の長さも 1.1 ～２.2m であり、伸展葬では、子供しか葬られないものも半数近くある。成川式土器の中津野式から東原遺跡までで、弥生時代終わりから古墳時代にかけて継続する墓域である。土坑の検出面からの深さも 20㎝であり、上部構造があったと考えられる。周溝の規模や構造その所属時期から見て、類似するものである。

周辺から、周溝を伴わない壺棺墓や甕棺墓、土坑墓、立石（板石）墓等多様な墓が見つかっており、周溝の役割を考える上で参考になると考えられる。

以上、類例を検討したが、石の本遺跡群 49-06 号等のように杭が周りに巡るものや、周溝の断面の形状がＶ字に近いものや、台形・Ｕ字形に近いもの、深さに差があるものと、形状に細かい点で差があるのは事実である。これについては、検出面上位の詳細な検討やさらに多くの類例の検討が必要で、今後の課題である。

また、土器の出土がほとんどないものの方が多い。廃棄土器が出土する場合が稀で、それらの遺構の性格を区別する必要があるかもしれない。ただ、廃棄土器があるものは、弥生時代でも終末期のものである。

先に類例あげたように土器の廃棄儀礼が定型化し、大形化し、墳丘墓や方形周溝墓につながるものと考えられる。

以上、類似遺構の検討・分析から、集落の縁辺部に立地すること遺構の形態・規模等から弥生時代後期後葉の円形周溝墓の可能性があると考えたい。

第５節　近世後期の区画について

Ⅲ章の項で 11・12・17 区にかかる溝を近世後期遺構の耕作に伴う区画溝であることを記述した。
6・12・17 区の調査及び熊本市の調査で区画溝を検出している。30 ～ 37m 程の区画で土地利用がされていることが判明している。

角度の振れも現在の角度よりやや西側に触れているがそれ程の誤差はない。字「北の割」・「南の割」を区画する道・土手の方向・現状で残る掘割の痕跡にほぼ一致する角度である。
掘割の掘削の時期は不明であるが、古い段階の土地利用が近世後期頃までは一致していた可能性が高い。

Tab. 4　小穴を持つ土坑一覧

遺跡名	遺構番号	時代・　時期	出土遺物	規模（長×短×深）m	上面プラン	杭痕跡の有無	備考
耳切遺跡	B 地点 5 号土坑	縄文早期	無	1.15 × 0.65 × 0.7	楕円形	1	アカホヤ 2 次堆積土下に早期遺物包含層の埋土。
河陽 F	陥し穴状遺構 S026	縄文早期	石器 2 点、礫	1.07 × 0.88 × 1.33	円形	2	検出面が早期遺物包含層の中、埋土は黒褐色の早期遺物包含層。
瀬田裏遺跡	萩の平 1 号陥し穴	縄文早期	無	1.18 × 0.76 × 1.2	楕円形	7	早期遺物包含層が埋土上面を覆う、床面にはソフトロームと早期遺物包含層が混在。
瀬田裏遺跡	山の神 2 号陥し穴	縄文早期	無文土器片	1.15 × 0.92 × 1.3	楕円形	3	早期遺物包含層が埋土上面を覆う、床面にはソフトロームと早期遺物包含層が混在。
大丸・藤ノ迫遺跡	1 号土坑	縄文早期	無	1.29 × 0.81 × 0.5	楕円形	1	アカホヤ層下、床面に早期遺物包含層が堆積、明らかに上部削平を受ける。
大丸・藤ノ迫遺跡	4 号土坑	縄文早期	無	1.28 × 0.71 × 0.65	楕円形	2	アカホヤ層下、床面に早期遺物包含層が堆積、明らかに上部削平を受ける。
大丸・藤ノ迫遺跡	6 号土坑	縄文早期	無	1.48 × 0.86 × 0.4	楕円形	3	アカホヤ層下、床面に早期遺物包含層が堆積。
大丸・藤ノ迫遺跡	7 号土坑	縄文早期	無	1.28 × 0.69 × 0.55	楕円形	2	アカホヤ層下、床面に早期遺物包含層堆積。明らかに上部削平を受ける。
大丸・藤ノ迫遺跡	8 号土坑	縄文早期	剥片、円礫	1.13 × 0.57 × 0.8	楕円形	2	アカホヤ層下、床面に早期遺物包含層が堆積。
大丸・藤ノ迫遺跡	9 号土坑	縄文早期	無	1.67 × 1.31 × 0.7	楕円形	1	アカホヤ層下、床面に早期遺物包含層が堆積。
大丸・藤ノ迫遺跡	10 号土坑	縄文早期	無	1.05 × 0.68 × 0.87	楕円形	1	アカホヤ層下、床面に早期遺物包含層が堆積。
大丸・藤ノ迫遺跡	11 号土坑	縄文早期	無	1.1 × 0.64 × 0.72	楕円形	2	アカホヤ層下、床面に早期遺物包含層が堆積。
大丸・藤ノ迫遺跡	13 号土坑	縄文早期	無	1.01 × 0.61 × 0.44	楕円形	2	アカホヤ層下、床面に早期遺物包含層が堆積。
天道ヶ尾遺跡	小ピットを持つ 1 号土坑	縄文早期	無	1.8 × 1.0 × 0.9	楕円形	7	ピット埋土に早期遺物包含層。
天道ヶ尾遺跡	小ピットを持つ 2 号土坑	縄文早期以降	無	1.7 × 0.7 × 0.9	楕円形	2	アカホヤが埋土。1 次堆積？
白鳥平 A 遺跡	2 号土坑	縄文早期以降		1.65 × 0.58 × 0.4	長方形	7	最下層はシラスの崩落土か。
白鳥平 A 遺跡	3 号土坑	縄文早期以降		1.7 × 0.51 × 0.84	長方形	7	最下層はシラスの崩落土か。
北中島西原遺跡	SK28	縄文時代早期		0.7 × 0.7 × 0.6	円形	4	早期遺物包含層が埋土下層、床面には、黄褐色ローム層混在。
北中島西原遺跡	SK31	縄文時代早期		0.9 × 0.8 × 0.95	楕円形	4	早期遺物包含層が埋土中層床面には黄褐色ロームと早期遺物包含層が混在。

Tab.5　熊本県内の円形周溝状遺構

番号	遺跡名	場所	遺構名	大きさ	溝幅	溝深さ		備考
1	健康軍藤原遺跡	熊本市東区東町１丁目		約 5.3m	約１m	0.4		県報告第 229 集　2005
2	石の本遺跡	熊本市東区石原町	39-08 号円形周溝	5.6 × 4.2	0.8m	0.4	縄文土器細片	県報告区 209 2002　弥生時代後期前半くらいの住居跡が調査区東端で検出
			47-06 号円形周溝	4.1 × 4.1	0.9m	0.4	石器細片	住居群の分布の低い部分に位置
			49-66 号円形周溝	4.0 × 3.0	0.8	0.6		周囲にピット群、石器出土
			30-01 号円形周溝	4.6 × 4.4	1.2m	0.9	縄文土器細片・石鏃	
			31-01 号円形周溝	5.3 × 3.9	0.3	0.2		削平
			47-06 号円形周溝	4.1	0.9	0.4		縄文土器片出土
3	狩尾遺跡群 狩尾湯の口遺跡	阿蘇市狩尾	湯の口遺跡１号周溝遺構	6.7 × 6.0	0.7 ～ 1.1	0.5		弥生後期
			湯の口遺跡２号周溝遺構	3.3 × 3.0 以上	0.4 ～ 0.65	0.08		
	狩尾遺跡群 池田・古園遺跡	阿蘇市狩尾	池田・古園遺跡１号周溝遺構	6.2 ～ 6.5	0.7 ～ 1.2	0.5	弥生後期	住居の空白箇所
			池田・古園遺跡２号周溝遺構	5.5 ～		0.1 ～		
			池田・古園遺跡３号周溝遺構	4 ～ 5	0.5 ～ 0.6	0.5		
			池田・古園遺跡４号周溝遺構		0.4	0.07		
			池田・古園遺跡５号周溝遺構	5.6 ～ 6	0.7 ～ 0.9	0.5		
	狩尾遺跡群 狩尾方無田遺跡	阿蘇市狩尾	狩尾方無田遺跡１号周溝遺構	4.8 ～ 5.4	1	0.2		やや方形
			狩尾方無田遺跡２号周溝遺構	6.2 ～ 7.2	0.3 ～ 0.4	0.3		支群ごとに１基
4	岩瀬・木柑子遺跡	菊池市岩瀬	１号円形周溝	4.35 × 3.9	0.4 ～ 0.5	0.5		古墳時代後期の 10m 程の周溝の近く
5	古閑北遺跡	益城町古閑	１区 １号円形周溝遺構	4.6	0.6 ～ 0.7	0.5 ～ 0.6		縄文土器
			４区 ２号円形周溝遺構	3.2 ～ 3.4	0.3 ～ 0.5	0.2 ～ 0.3		弥生時代後期の竪穴建物
			８区 ３号円形周溝遺構	8.2	0.9 ～ 1.1	0.7 ～ 1.1		
			６区 ４号円形周溝遺構	3.4	0.4 ～ 0.5	0.2 ～ 0.3		
			５区 ５号円形周溝遺構	2.5 ～ 3.7	0.5	0.2 ～ 0.4		
			５区 ６号円形周溝遺構		0.4 ～ 0.6	0.3		
			６区 ７号円形周溝遺構	3.4 ～ 3.7	0.4	0.1 ～ 0.2		
			６区 ８号円形周溝遺構	5.4 ～ 5.5	0.6 ～ 0.7	0.2		
			進入道路 B 区 ９号円形周溝遺構	3.1 ～ 3.2	0.3 ～ 0.4	0.1		
6	梨の木遺跡	益城町古閑	１区 １号円形周溝遺構	3.6	0.5 ～ 0.6	0.2		黒褐色埋土
			１区 ２号円形周溝遺構	3.9 ～ 4.1	0.6 ～ 0.9	0.5 ～ 0.9		黒褐色埋土
			５区 円形周溝遺構	5.8 ～ 6.3	0.5	0.2 ～ 0.3		黒褐色系埋土
			６区 １号円形周溝遺構	3.1 ～ 3.3	0.5	0.2		明褐色土
			６区 ２号円形周溝遺構	6.9	0.5 ～ 0.7	0.2		黒色土系
			６区 ３号円形周溝遺構	3.4 ～ 3.5	0.5 ～ 0.6	0.2 ～ 0.3		暗褐色土系
			６区 ４号円形周溝遺構	3.9	0.4	0.15		黒褐色土系
7	長嶺遺跡	熊本市長嶺	１号円形周溝	4	0.55 ～ 0.65	0.3 ～ 0.4		杭跡多数　10 号住に切られて検出。弥生時代終末以前
8	野入遺跡	熊本市北区植木町	円形周溝状遺構	5.4 以上	1.1 ～ 1.8	0.4		縄文晩期土器少量出土、6m 程度の規模か
9	江津湖遺跡群	熊本市江津湖	１号周溝状遺構	4.4 ～ 4.9	0.8 ～ 1.0	0.2 ～ 0.3		弥生後期土器片 500, 溝の深さに変化あり。弥生時代後期終末か
10	古保山打越遺跡	宇城市松橋町古保山		2.6 ～ 2.9	0.3 ～ 1.0			

Tab.6　南摺ヶ浜遺跡の円形周溝墓一覧

番号	遺跡名	場所	遺構名	大きさ	溝幅	溝深さ	備考
	南摺ケ浜遺跡	指宿市十二町	１号円形周溝墓	4.7 ～ 5.4	0.48	0.21	壺棺に切られる。ほぼ同時期、主体部 2.2 × 1.1 × 0.3 中津野式
			２号円形周溝墓	4.7 ～ 5.5	0.48	0.21	主体部 1.1 × 0.7 × 0.3 辻堂原式
			３号円形周溝墓	3.3	0.3	0.2	主体部 1.5 × 0.5 × 0.25　13 号土坑墓より古い
			４号円形周溝墓	3.8 ～ 5.8	0.5	0.2	主体部 2.1 × 1.1 × 0.2　中津野式
			５号円形周溝墓	3.4 ～ 4.4	0.5	0.2	主体部 1 × 1.0 × 0.5 中津野式 壺棺に切られる。ほぼ同時期 . 中津野式
			６号円形周溝墓	3.0 ～ 4.0	0.5	0.05	主体部 1.6 × 0.8 × 0.3
			７号円形周溝墓	3.3 ～ 4.6	0.4	0.2	主体部 2.2 × 1.1 × 0.14
			８号円形周溝墓	3.8 ～ 5.6	0.5	0.4	主体部 1.7 × 0.9 × 0.4
			９号円形周溝墓	4.4 ～ 4.8	0.5	0.2	主体部 2.1 × 1.0 × 0.4 中津野式
			１０号円形周溝墓	3.2	0.5	0.18	主体部不明。中津野式
			１１号円形周溝墓	3 ～ 4	0.4	0.08	主体部 1.1 ×　× 0.3 中津野式
			１２号円形周溝墓	2.3 ～ 2.6	0.3	0.3	主体部 1.2 × 0.8　× 0.2　東原式

Tab. 7　弥生時代後期から古墳時代初頭の円形・方形周溝墓

番号	遺跡名	場所	遺構名	大きさ	溝幅	溝深さ	備考
参考	用七遺跡	八代市	1 号方形周溝墓	7.4	0.6 ～ 0.8	0.4	方形周溝墓　弥生時代後期～古墳時代初頭
			2 号円形周溝遺構	10.4	1 ～ 1.6	0.4	方形周溝墓　古墳時代前期
			3 号方形周溝墓	8.4	1.1	1	方形周溝墓　弥生時代終末から古墳時代初頭
参考	上日置女夫木遺跡 八代市調査	八代市	Ⅰ区 STD01	10.8 × 8.6	0.7 ～ 1.15	0.3 ～ 0.5	方形周溝墓　弥生時代終末～古墳時代初頭
			Ⅰ区 STD02	6.8 × 5.7	0.5 ～ 0.7	0.2 ～ 0.4	方形周溝墓
			Ⅰ区 STD03	7.6 × 9.6	0.7 ～ 1.25	0.3 ～ 0.6	方形周溝墓
			Ⅲ区 STD01	13.5 × 14.5	0.7 ～ 1.25	0.3 ～ 0.5	一部溝幅 2.5m
参考	上日置女夫木遺跡 県調査	八代市	SZ001	10.8 × 8.6	0.7 ～ 1.15	0.3 ～ 0.5	方形周溝墓　弥生時代終末～古墳時代初頭
			SZ002	6.8 × 5.7	0.5 ～ 0.7	0.2 ～ 0.4	方形周溝墓
			SZ003	7.6 × 9.6	0.7 ～ 1.25	0.3 ～ 0.6	方形周溝墓
			SZ004	13.5 × 14.5	0.7 ～ 1.25	0.3 ～ 0.5	一部溝幅 2.5m

第Ⅴ章　調査のまとめ

第１節　縄文時代

遺構としては、考古学的分析の項で述べるが、落とし穴、貯蔵穴等と考えられる土坑（11 区 SK002・003、12・17 区 SK005）がある。SK006 の埋土上層に焼土塊を含むことから炉穴等が近くに存在した可能性がある。

土坑・土器・石器の分布から北東側・北西側に縄文時代後・晩期の集落が位置すると推定できる。

さらに下がった D-10・11・12 グリッド部分には、遺構がなく明らかに集落の縁辺部の土地利用と考えられる。

また、12 区 C-11 グリッド出土の深鉢土器が埋設土器の一部と考えられ、熊本市石の本遺跡群等の埋設土器の分布等を考えると集落の縁辺部であることを裏付けるものである。（PL.11 の５右下参照）

出土石器としては、石匙が２点、石鏃が 27 点、剥片が 20 点未満で石核はほとんどない。全体の石器の出土量から考えると石鏃の割合が多い。

集落の縁辺部と考えられ、検出土坑の一部が落とし穴とすれば、水場周辺に集まる動物の罠としての機能を持ち、狩場になっていた時期があると考えられる。

第２節　弥生時代後期

12 区の南側で、外面に叩きを持つ甕が出土していることから弥生時代終末と考えられる。本調査区の南側で、熊本市の調査により弥生時代後期の集落が見つかっていることから、その集落の広がりからの流れ込みの遺物と推定できる。本調査区南側のやや高くなった区域まで弥生時代後期の集落が広がっていた可能性がある。

円形周溝状遺構については､時期の詳細は不明であるが、周溝埋土にクロボク層由来の埋土が含まれていることと、調査区内から弥生時代後期の土器が出土していること等から弥生時代後期のものと考えられる。この遺構は集落の縁辺部に位置することが多く、他の遺跡の例から考えると墓である可能性が高い。（第Ⅳ章遺構・遺物の分析参照）

九州縦貫自動車道の東側に弥生時代の集落が検出されていることや植木町小道遺跡で竪穴建物が見つかっていることから、弥生時代後期の集落が 11・12・17 区の北側から北東側にかけて広がっていたと考えられ、そうした集落の縁辺部に墓域が分布していたと考えられる。

第３節　古代

今回出土した土師器・須恵器はほんの数点で、しかも磨滅した破片である。周辺に存在する８世紀後半から９世紀前半にかけて、隣接する馬駅推定地付近から流れ込んだものと推定される。

第４節 中世

瓦質土器や中世須恵器が出土している。時期の確定は難しいが、小片で磨滅したものが多い。周辺の集落から流れ込んだものと考えられる。

近世後期の耕作に伴う区割が古い地割を残していることが確認された（Fig.52 参照）が、遺構としては中世までさかのぼることは確認できなかった。

古代の地割と推定されている『北の割』・『南の割』の地形は現代も耕作区割として残っていることから中世に屋敷地の地割として利用された可能性も考えられ、今後の周辺の調査が期待される。

第５節　近世後期

上層で検出した遺構や立石遺跡の駅家推定地の区画割や道路推定地等を総合的に考えると、長さ 30 ～ 37m 程の方形の区割りが考えられる。

近世後期の陶磁器類の出土で少なくともそのころからの土地の区画割りが行われたていたことが確実で、Fig.52 に見られるように、現在も確認できる堀割が掘削されていた時期からの区画を踏襲していたと考えられる。

緩やかな谷部に位置すること、溝が広範囲に多数検出していること、溝は深い部分があり、排水の機能が考えられること、検出面とその上層の堆積状況から考えて農地開発の際に伴う区画溝と考えられる。

（参考引用文献）

・九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書
福岡熊本線（植木町－託麻村間）昭和 44 年 3 月
熊本県九州縦貫自動車道関係文化財調査団
・『立石遺跡群第 1 次調査区』熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成 18 年度－ 2007 熊本市教育委員会
・『立石遺跡群第 1 次調査区』『立石遺跡群第 2 次調査区』『水源地遺跡（江津湖遺跡群）第 3 次調査区』『小糸山遺跡群第 1 次調査区』熊本市埋蔵文化財調査年報第 2 号 平成 4 年から平成 8 年 1999 熊本市教育委員会
・『石川遺跡』植木町文化財発掘調査報告書第 14 集 2002 植木町教育委員会
・『石川山古墳群Ⅱ』植木町文化財発掘調査報告書第 8 集 2002 植木町教育委員会　1996
・『古閑天神平遺跡』熊本市の文化財 14 集 2002 植木町教育委員会
・『植木町遺跡地図－町内遺跡詳細分布調査－』植木町文化財発掘調査報告書第 10 集 1999 植木町教育委員会 1996
・『江津湖遺跡群第 24 次調査区』『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集 平成 19 年度』2008 熊本市教育委員会
・『立石遺跡群第 3 次調査区』熊本市埋蔵文化財調査年報第 15 号―平成 23 年度― 熊本市の文化財第 24 集 2013 熊本市教育委員会
・『南摺ヶ浜遺跡指宿市十二町』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（144）潟山丈六線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2009 年 3 月 鹿児島県立埋蔵文化財センター
・小林 達雄編『総覧 縄文土器』2008『総覧縄文土器』刊行委員会
・『狩尾遺跡群』熊本県文化財調査報告書第 131 集 1993 熊本県教育委員会
・郷土歴史大辞典『熊本県の地名』平凡社
・『用七遺跡』八代市文化財調査報告書 第 27 集 2005 八代市教育委員会
・『辺田見中道遺跡』（御船町文化財調査報告第 2 集）2012　御船町教育委員会
・『黒髪町遺跡群外 4 次調査区』熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成 19 年度－ 2008 熊本市教育委員会
・『上日置女夫木遺跡』八代市文化財調査報告書第 26 集 2005 八代市教育委員会
・『古閑北・梨木遺跡』熊本県文化財調査報告書第 175 集 1999.3 熊本県教育委員会
・『古閑北遺跡』熊本県文化財調査報告書第 184 集 1999.3 熊本県教育委員会
・『太郎迫遺跡・妙見遺跡』寺迫地区農村活性化住　環境整備事業に伴う埋蔵文化財の調査　熊本県文化財調査報告第 186 集 1999 熊本県教育委員会
・別府大学考古学研究室『古保山・古閑・天城』1980 熊本県文化財調査報告第 47 集　1980
・『古代肥後の土器』『大江遺跡群 1』熊本市教育委員会 2007 網田 龍生
・『奈良時代肥後の土器』『先史学・考古学論究』龍田考古会 1994 網田 龍生
・『肥後における回転台土師器の成立と展開』『中近世土器の基礎研究Ⅹ』中世土器研究会　1994 網田 龍生
・『熊本県における中世前期の土師器について』『中近世土器の基礎研究Ⅹ』
1994 日本中世土器研究会 美濃口　雅郎
・『北部九州の 7 ～ 9 世紀中頃の土器』古代土器研究会第 1 回シンポジュウム資料　奈良国立文化材研究所 1992 山本 信夫
・『大宰府市史 .』考古資料編　1999
・『ワクド石遺跡』熊本県文化財埋蔵文化財調査報告第 144 集 1994 熊本県教育委員会編
・『石の本遺跡群Ⅴ』熊本県文化財調査報告第 205 集 2002 熊本県教育委員会
・『下江中島遺跡・上日置女夫木遺跡』熊本県文化財調査報告書第 278 集 2013 熊本県教育委員会
・『古保山打越遺跡』熊本県文化財調査報告書第 93 集 1987 熊本県教育委員会
・『黒橋貝塚』熊本県文化財調査報告書第 166 集 1998.3 熊本県教育委員会
・『託麻弓削遺跡群 2』熊本県文化財調査報告書第 331 集 2018.3 熊本県教育委員会
・『九州における縄文時代の調査おとし穴状遺構』第 14 回九州縄文研究会鹿児島県国分大会 2004 九州縄文研究会
・『阿高貝塚』熊本県文化財調査報告第 223 集 2005.3 熊本県教育委員会
・『野入遺跡』熊本県文化財調査報告書第 312 集 2015.3 熊本県教育委員会
・『曽畑』熊本県文化財調査報告第 100 集 1988 熊本県教育委員会
・『先史学・考古学論究Ⅳ』考古学研究室創設 30 周年記念論文集 2003 龍田考古会

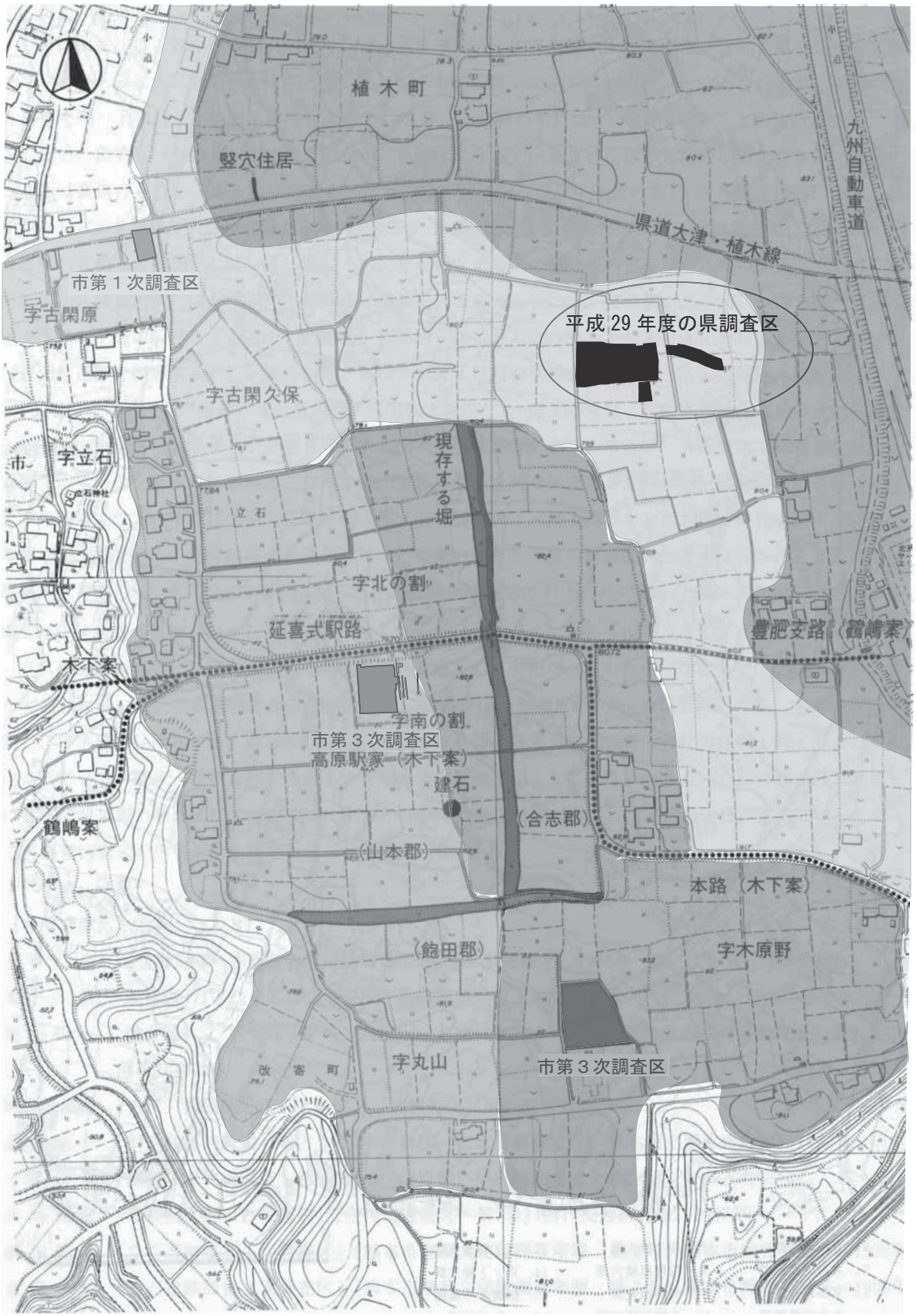


Fig.52　立石遺跡群地形区分図（S=1/5,000）

『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告書集－平成 18 年度－』
「立石遺跡群第 1 次調査区」（2007 熊本市教育委員会）第 2 図より転載加筆

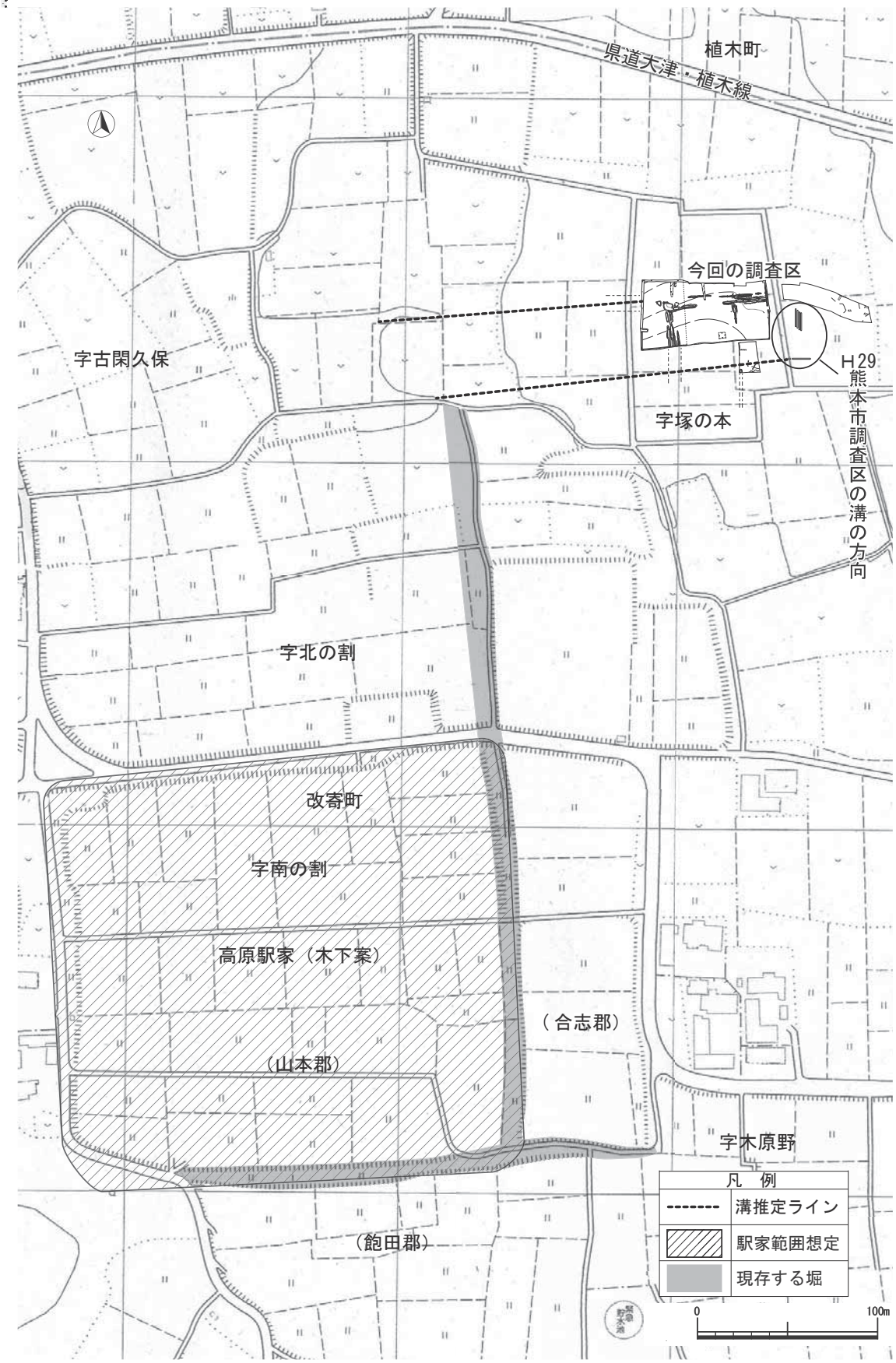


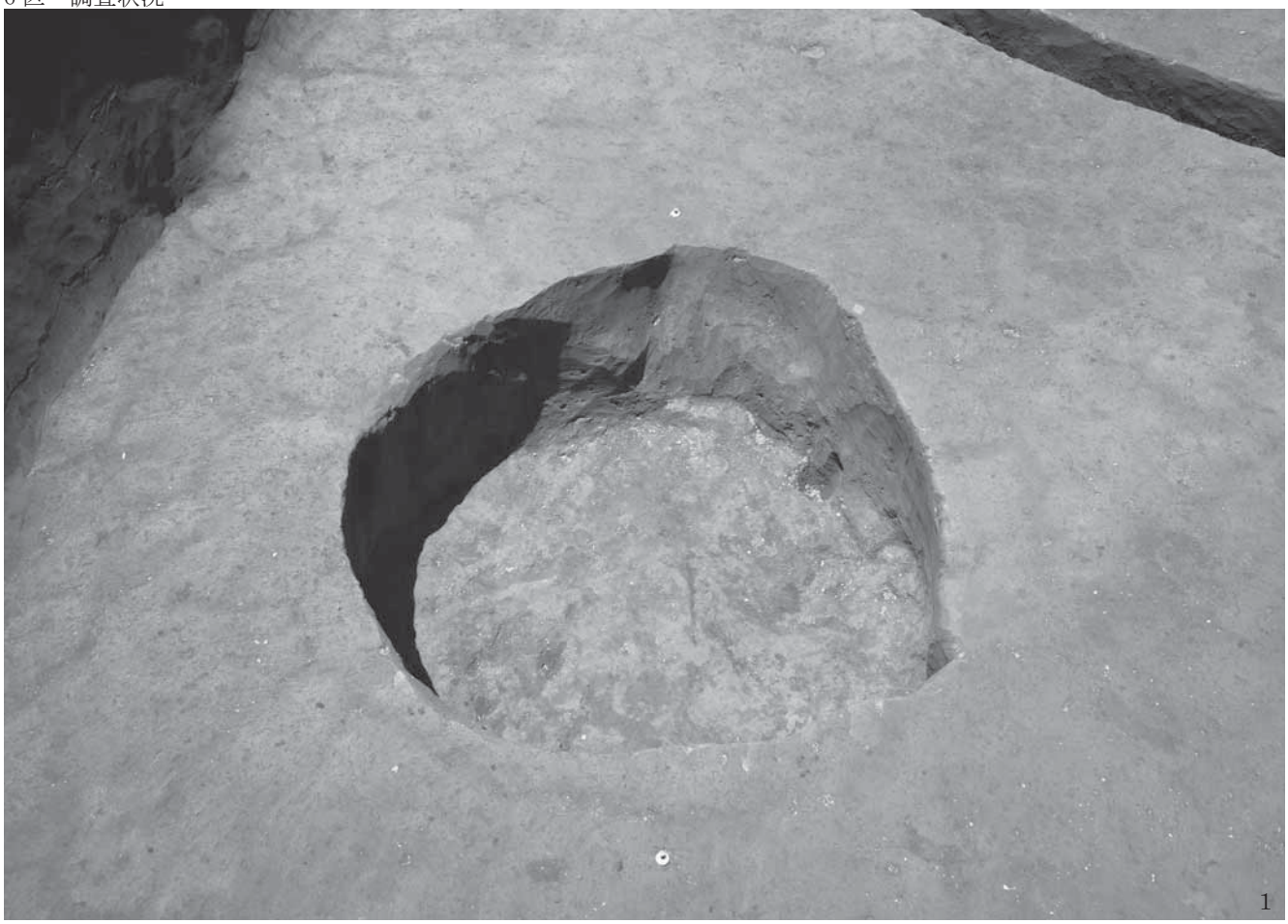
Fig.53　立石遺跡群土地区画推定図（S=1/3,000）

写真図版

立石遺跡群中央付近から石川山を望む（南西から）　　左下　調査区　　右下　九州縦貫自動車道北熊本 SA

6 区

1．6 区 完掘状況



1

1．6区 溝SD001　検出状況（北東から）

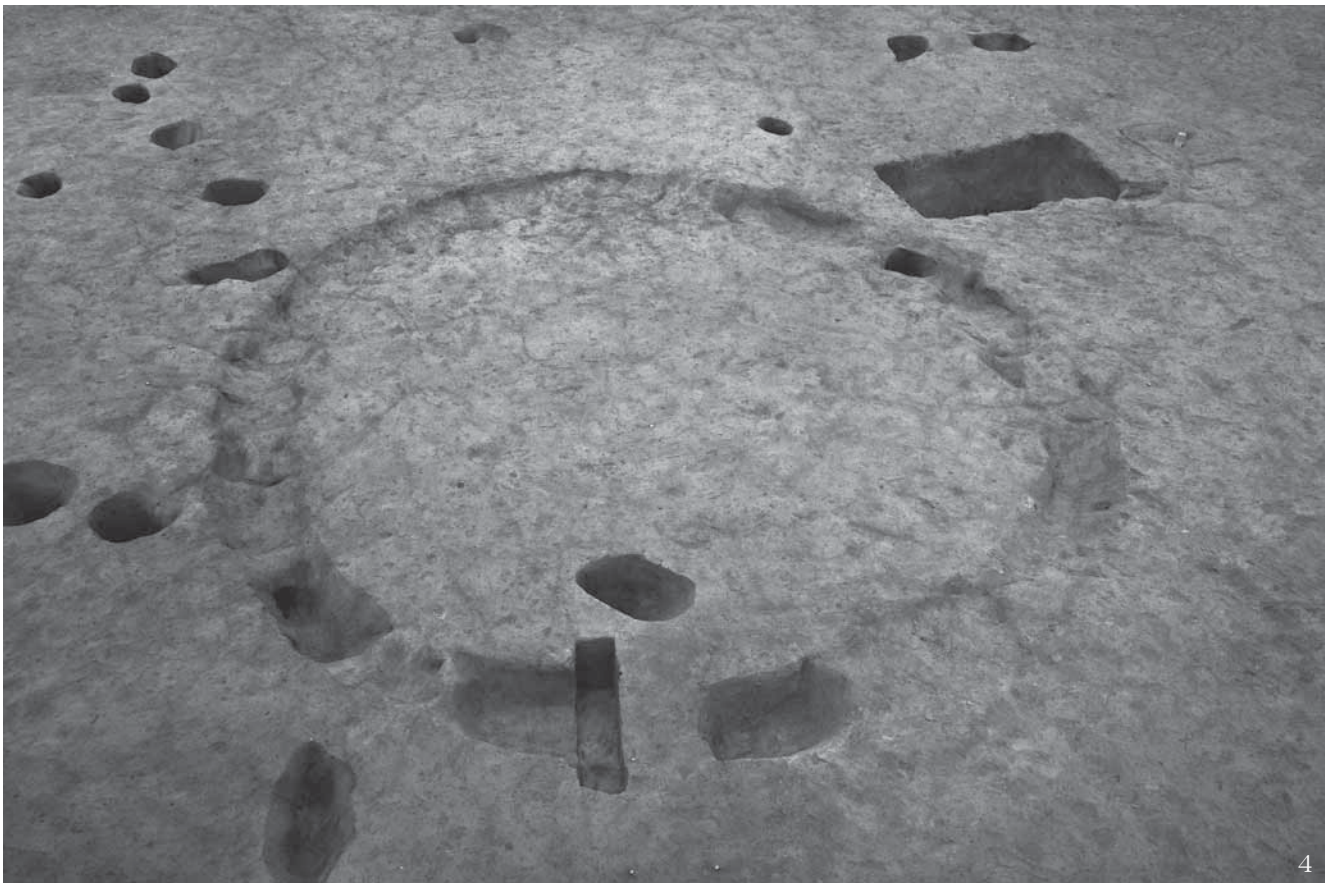
2

2．6区 土坑SK003完掘状況（東から）

1．6 区 土坑 SK003 土層断面（南から）

2．6 区 溝 SD001 土層断面（北から）

3．6 区 南壁土層断面（北から）

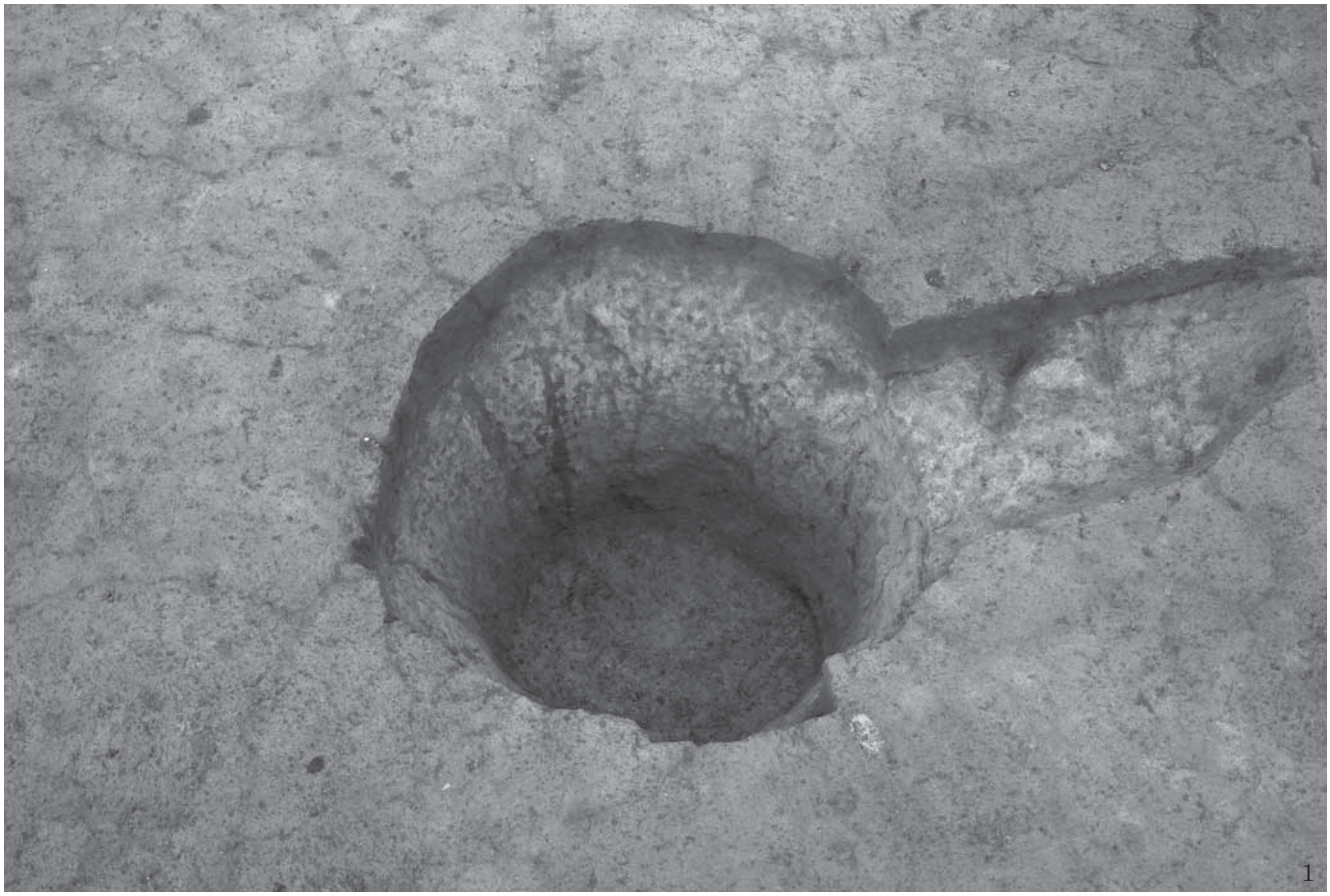


4．11 区 円形周溝状遺構 SX001 完掘状況（北から）

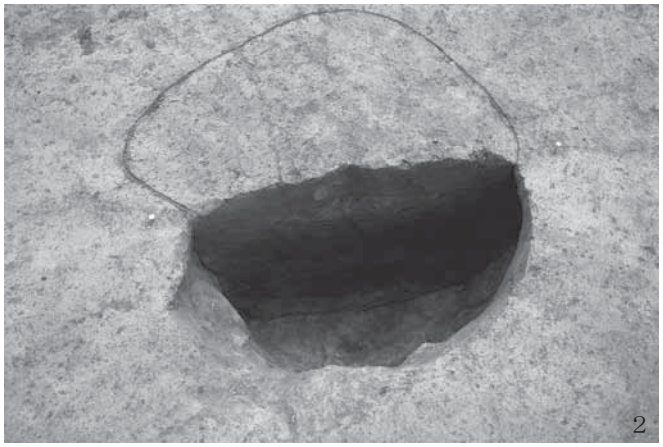
1．11 区 完掘状況（東から）

2．11 区 円形周溝状遺構 SX001　検出状況（北から）

3．11 区 土坑 SK003 土層断面（西から）

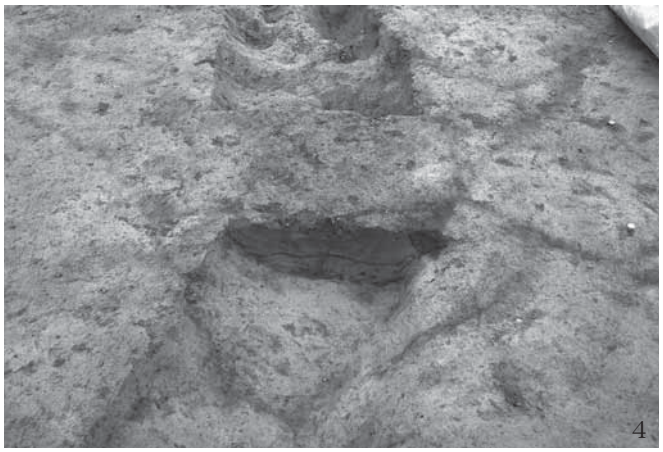


1．11区 土坑SK003完掘状況(西から)



2．11 区 土坑 SK002 土層断面（西から）

3．11 区 土坑 SK002 完掘状況（北西から）



4．11 区 円形周溝状遺構 SX01 東側土層断面

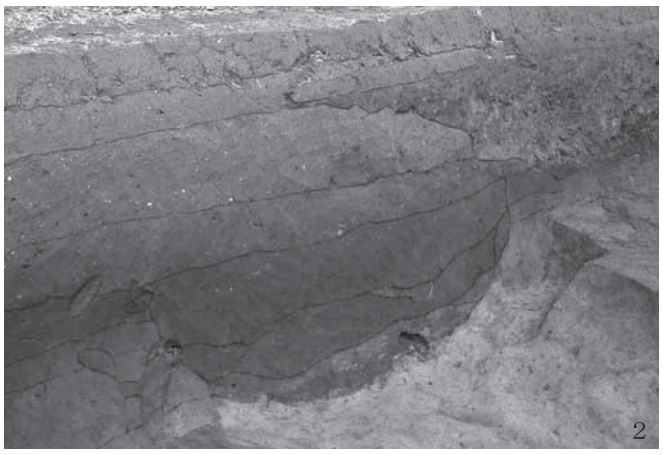
5．11 区 円形周溝状遺構 SX001 西側土層

1．12 区 溝 SD001 ～ 005 完掘状況（東から）

2．12 区 溝 SD002・003- ②（東から）

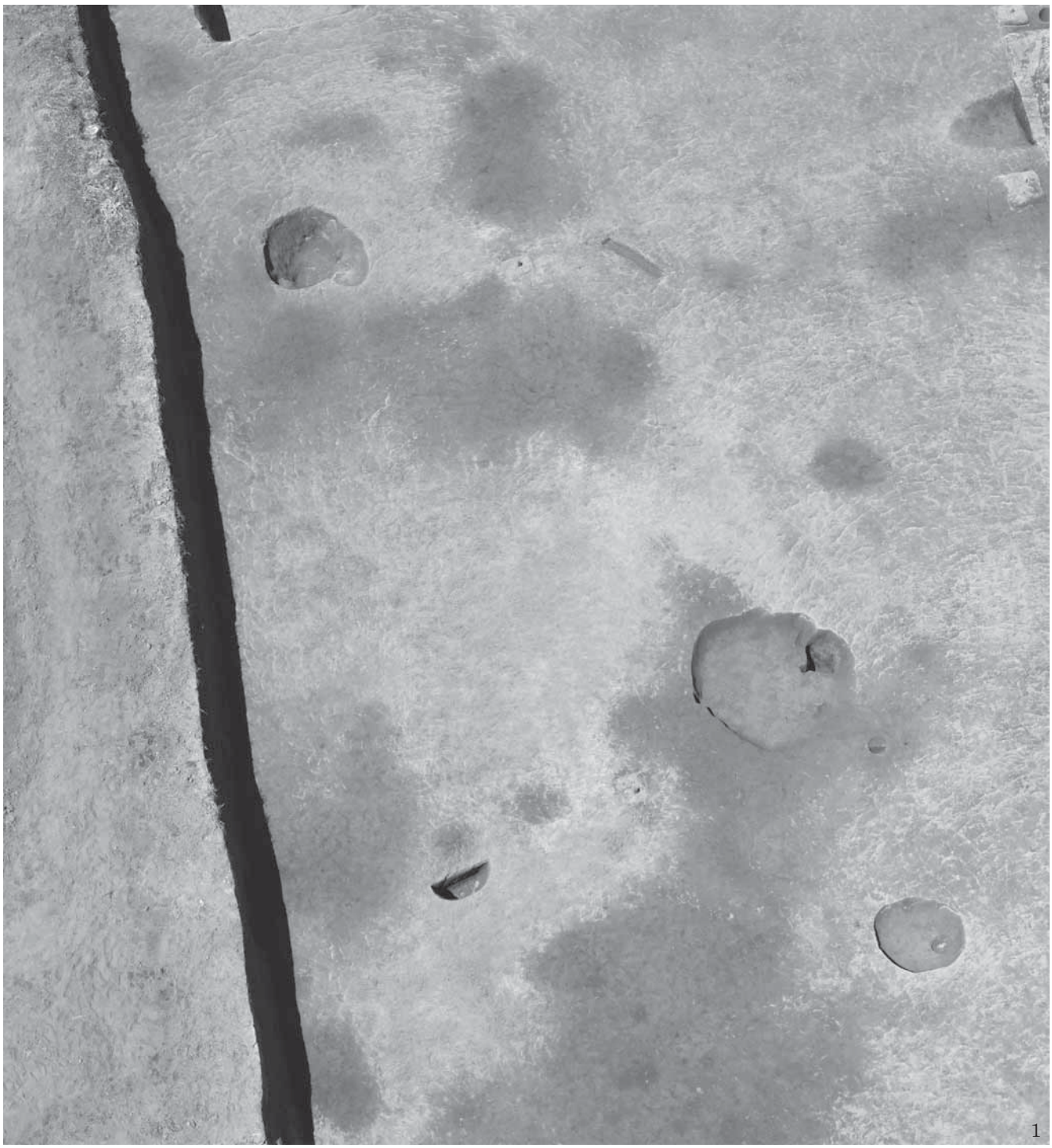
3．12 区 溝 SD004 土層断面（北から）

1．17 区 溝 SD001 ～ 004 完掘状況（北から）



2．17 区 溝 SD006 土層断面（東から）

3．17 区 溝 SD001 ～ 004 土層断面（北東から）

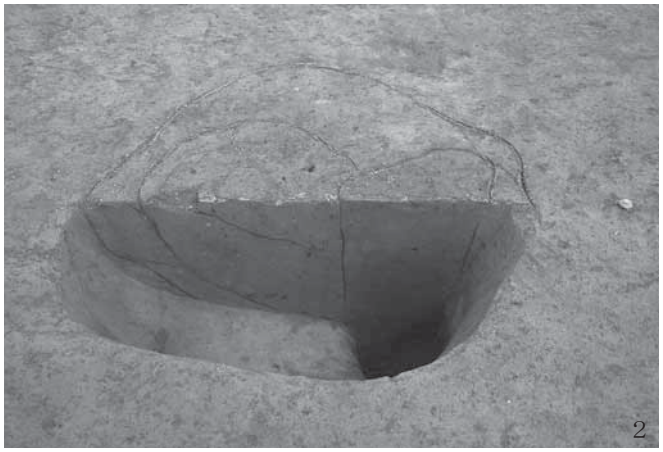


1．12 区 南東部検出 土坑 SK006・007・008 完掘状況（東から）

2．12 区 土坑 SK006 石器出土状況

3．12 区 D-7 グリッド遺物出土状況

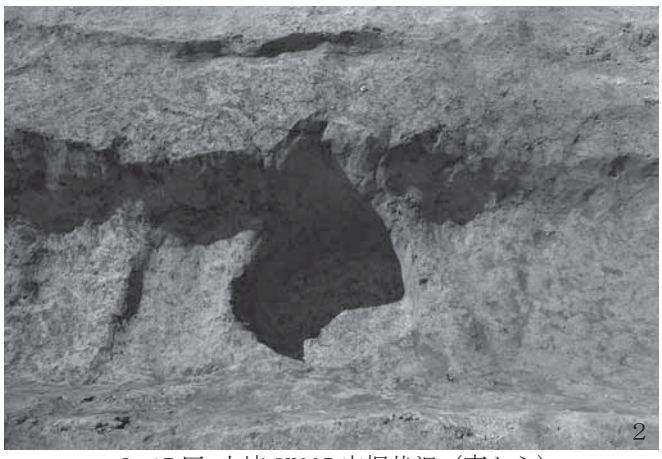
1．12・17 区 完掘状況（東から）



2．12 区 土坑 SK012 土層断面（南東から）

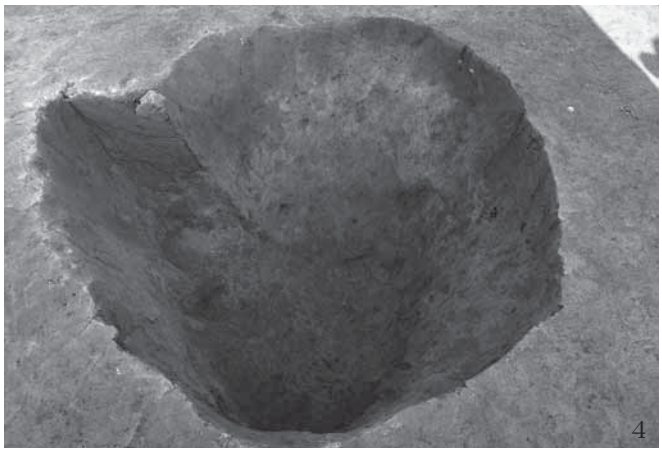
3．12 区 土坑 SK012 完掘状況（北東から）

1．17 区 土坑 SK005 土層断面（西から）

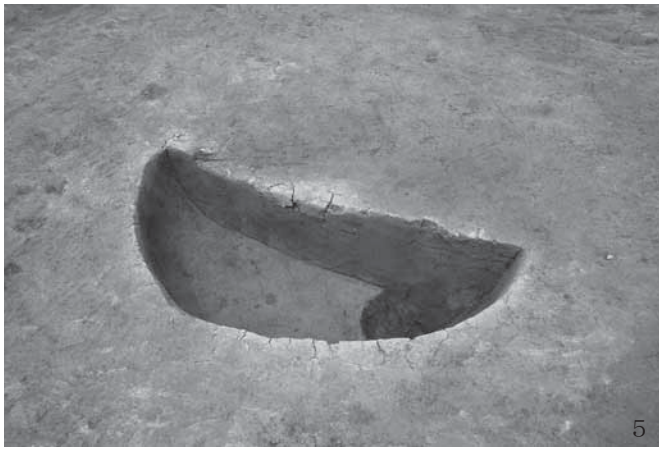


2．17 区 土坑 SK005 完掘状況（南から）

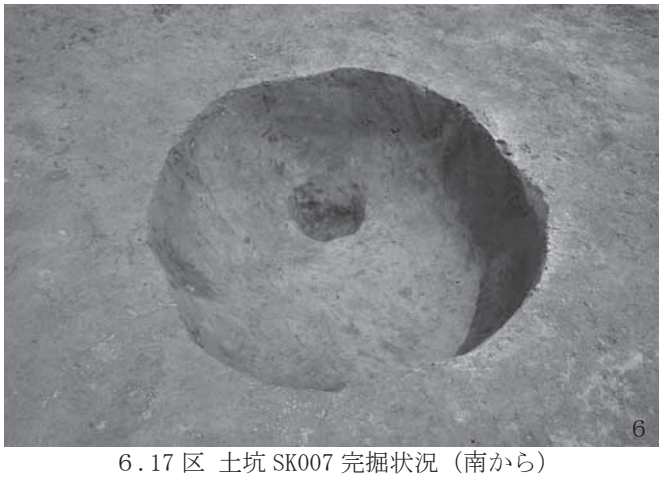
3．17 区 土坑 SK006 土層断面（南西から）



4．17 区 土坑 SK006 完掘状況（西から）

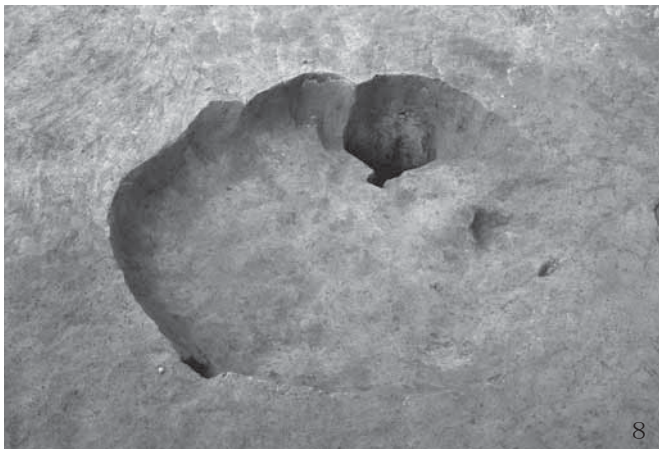


5．17 区 土坑 SK007 土層断面（東から）



6．17 区 土坑 SK007 完掘状況（南から）

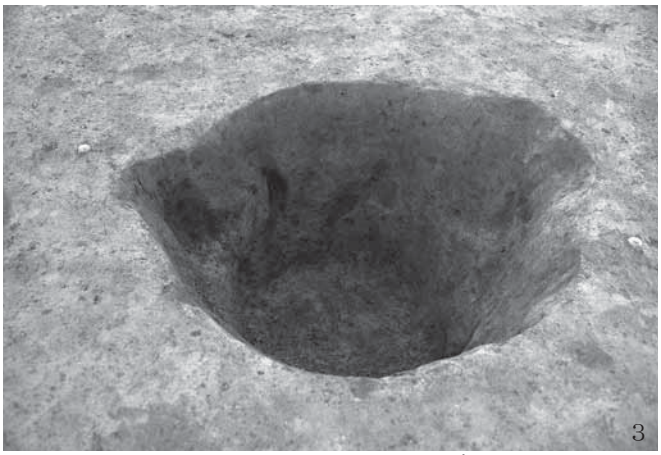
7．17 区 土坑 SK008 土層断面（東から）



8．17 区 土坑 SK008 完掘状況（南から）

1．12 区・17 区 西側Ⅳ層検出状況（北東から）

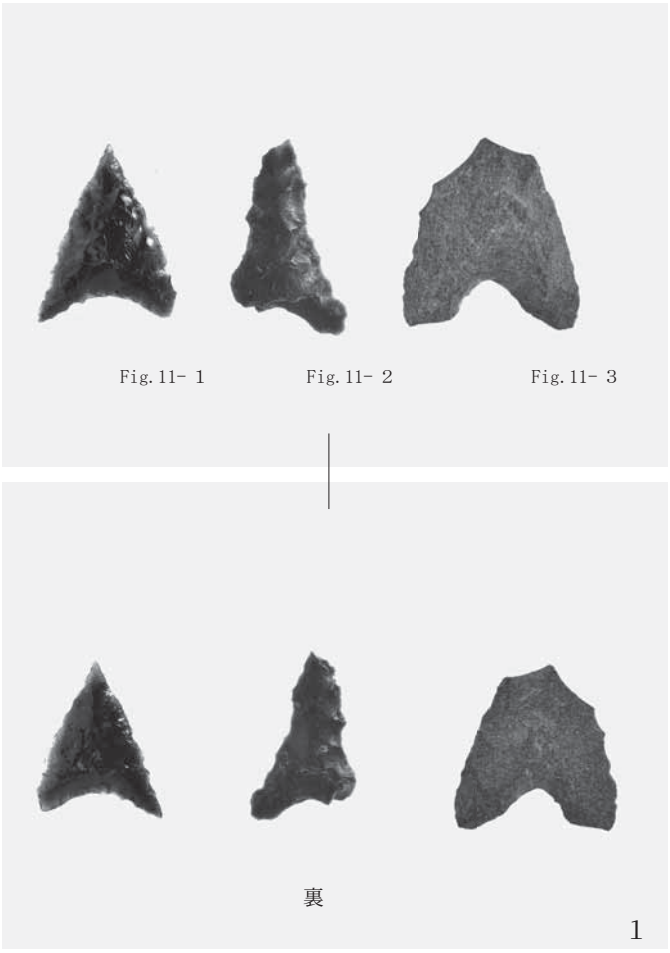
2．17 区 土坑 SK010 土層断面（西から）



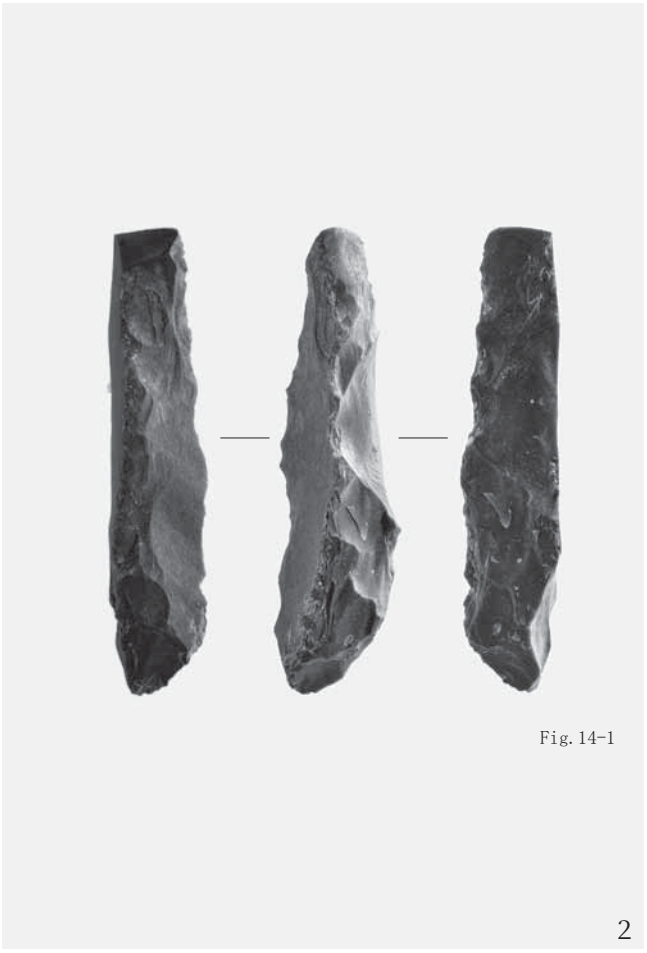
3．17 区 土坑 SK010 完掘状況（南西から）

4．17 区 土坑 SK011 土層断面（南から）

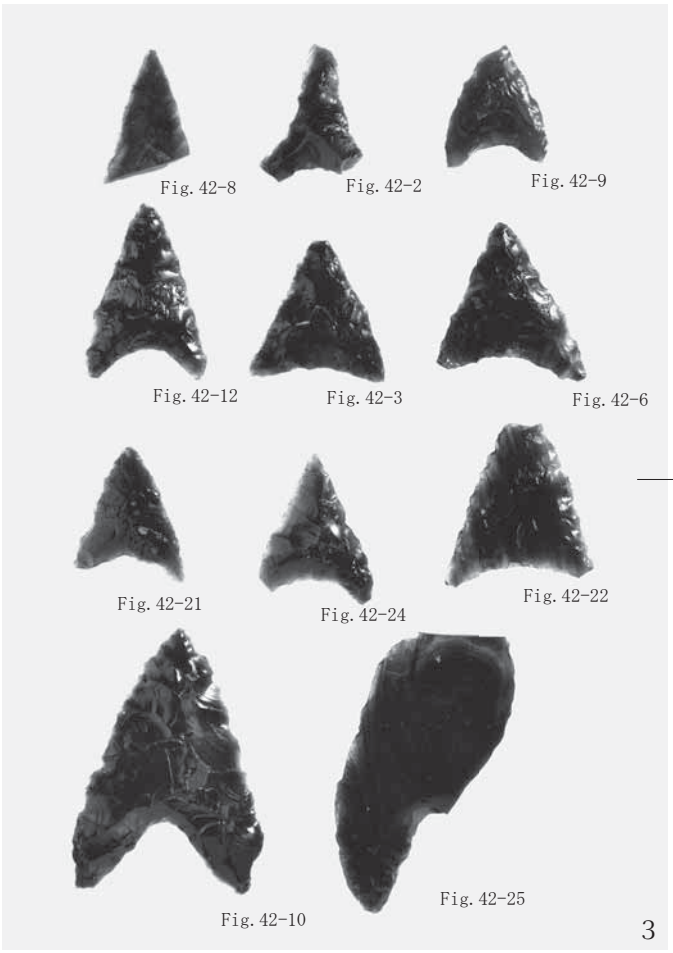
5．17 区 12 区 C-11 グリッド遺物出土状況

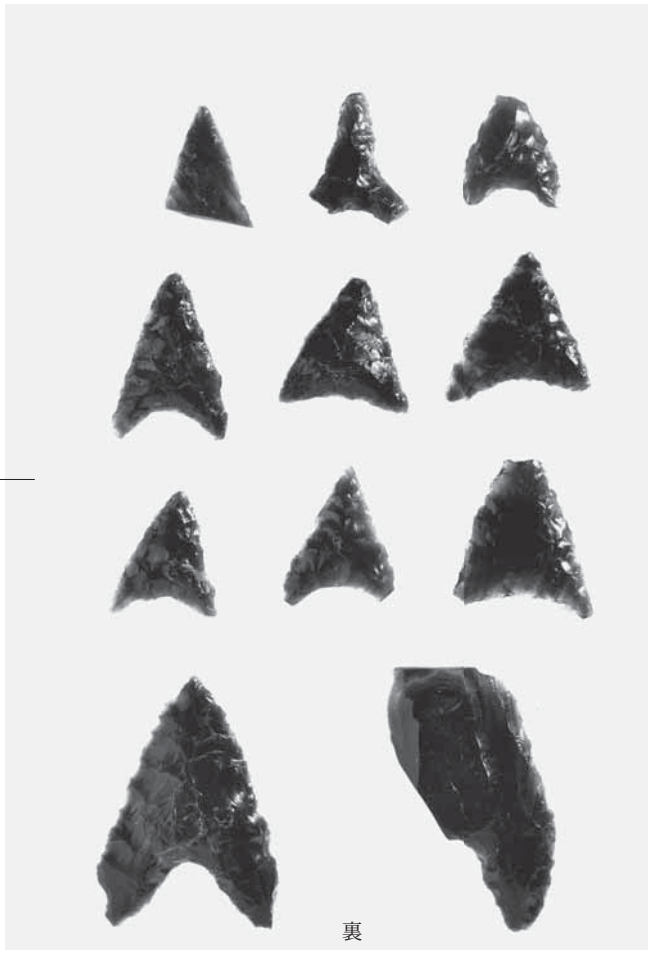


1．6 区 出土遺物（石器）



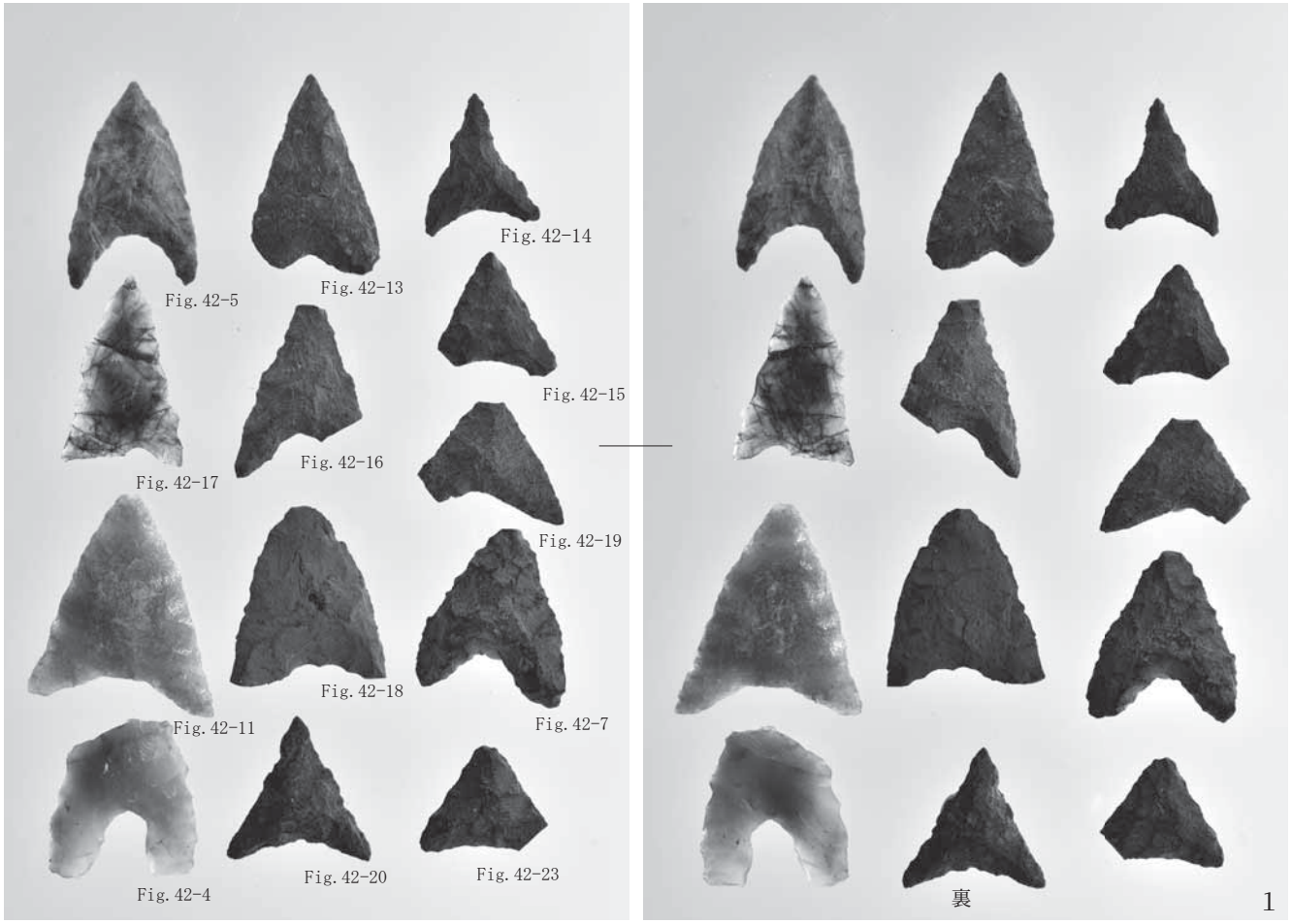
2．11 区 出土遺物（石器）



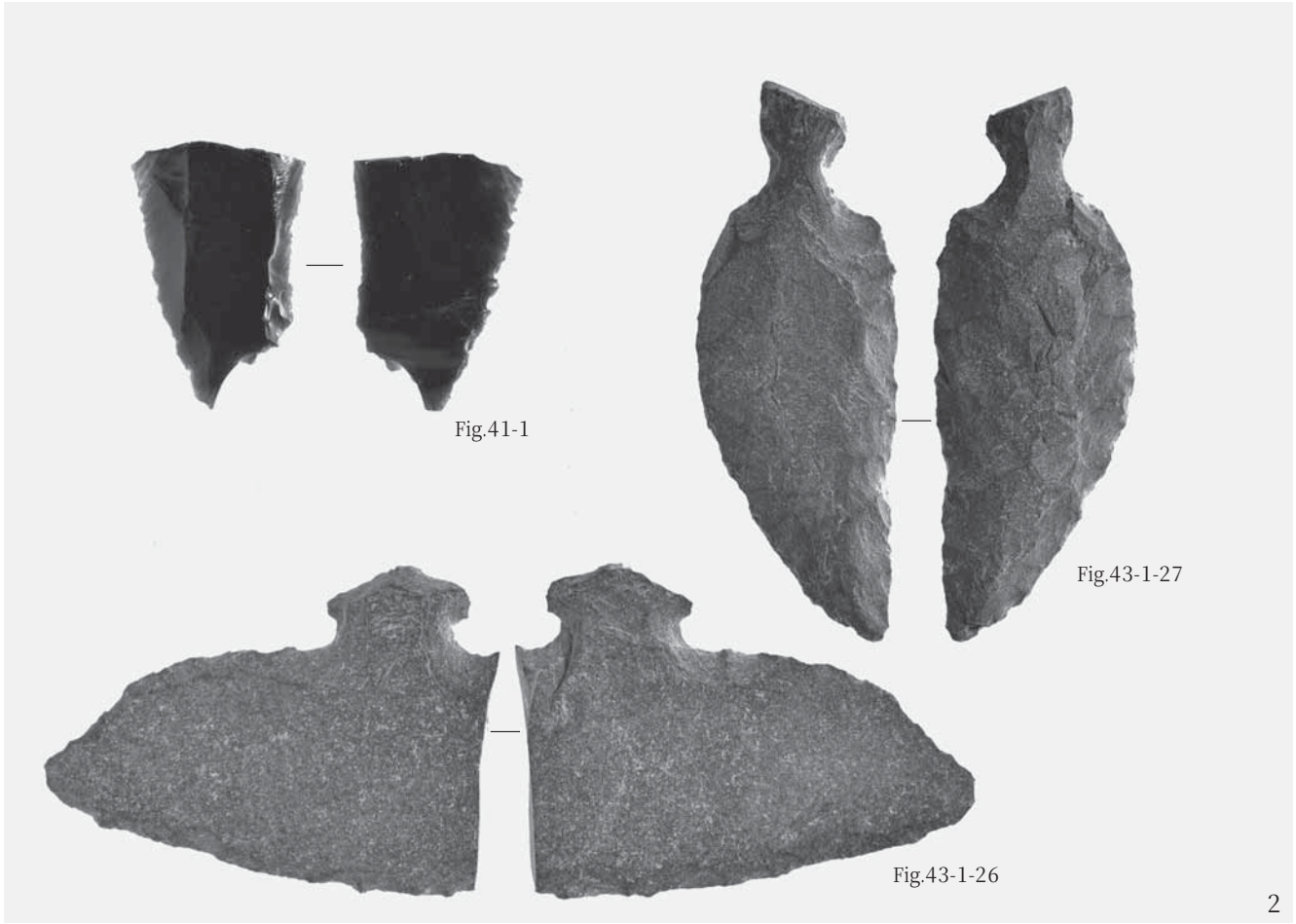


3．12・17 区 出土遺物（石鏃）

PL.13



1． 12・17 区 出土遺物（石鏃）



2． 12 区 出土遺物 (石器)

Fig.43-2-29

Fig.43-2-31

1

1．　12 区 出土遺物（石器）

17 区 Fig.44-34

17 区 Fig.44-33

12 区　Fig.43-2-30

12 区 Fig.43-28

2

2．　12・17 区 出土遺物

PL.15

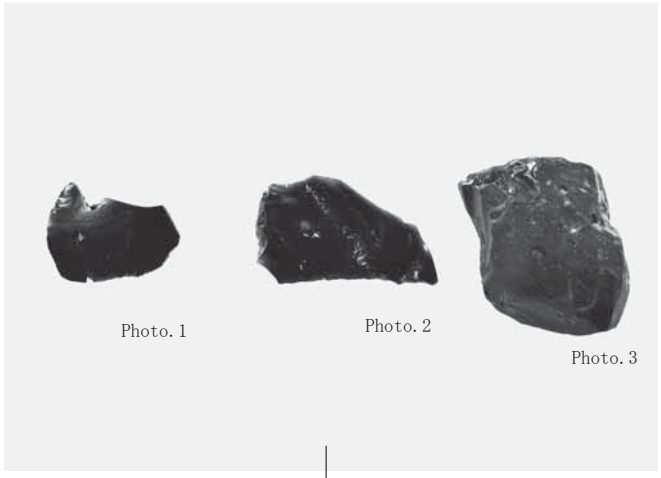
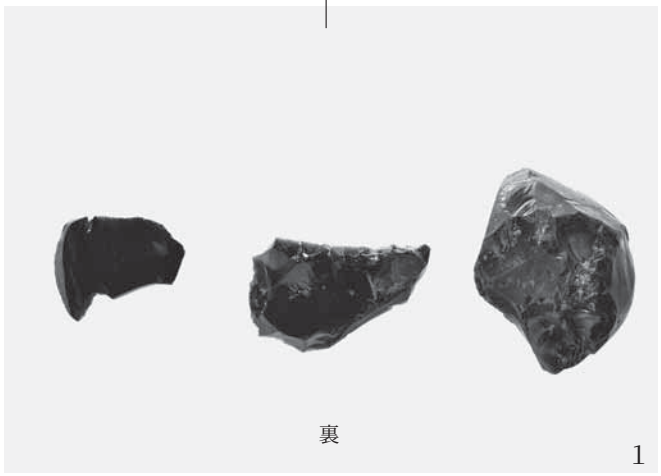


Photo. 1

Photo. 2

Photo. 3



裏

1

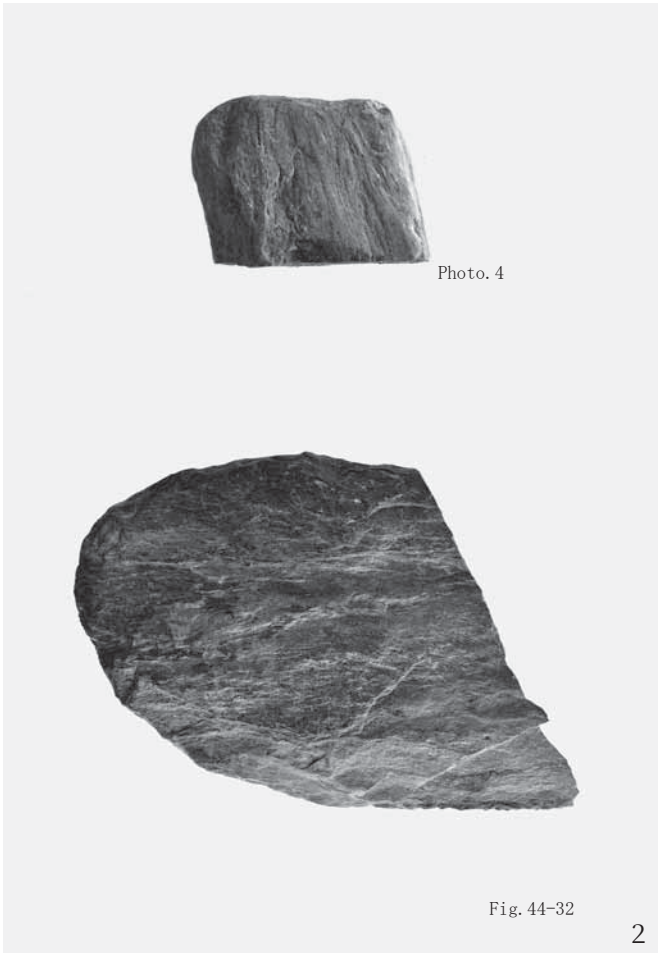
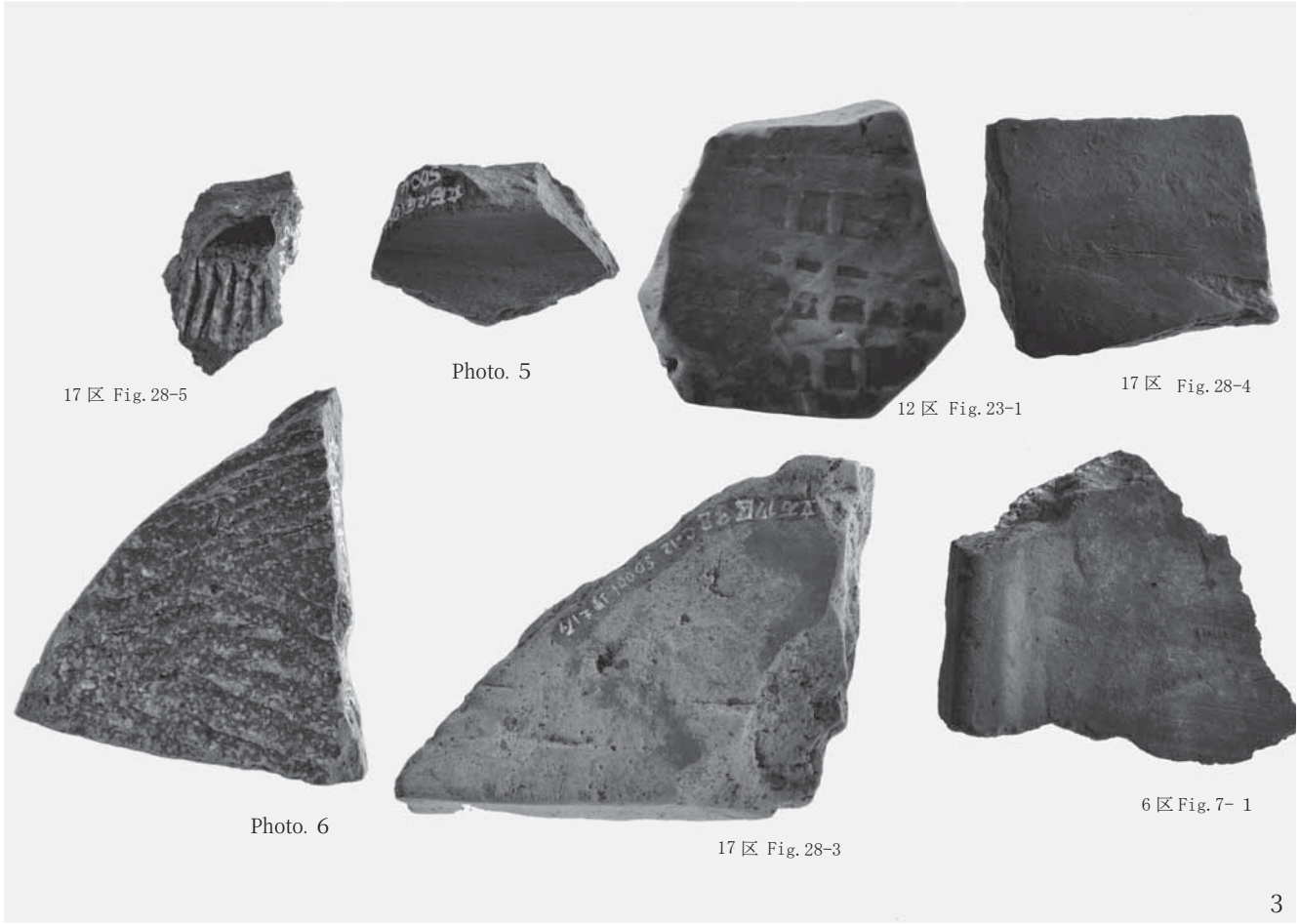


Photo. 4

Fig. 44-32

2

1．2． 17 区 出土遺物（石器）



17 区 Fig. 28-5

Photo. 5

12 区 Fig. 23-1

17 区 Fig. 28-4

Photo. 6

17 区 Fig. 28-3

6 区 Fig. 7- 1

3

3． 6・12・17 区 出土遺物

Fig. 12-3

Fig. 12-2

Fig. 12-6

Fig. 12-7

Fig. 12-4

Fig. 12-8

Fig. 12-9

Fig. 12-5

Fig. 12-11

1

1．6 区 出土遺物

Fig. 12-10

2

2．6 区 出土遺物

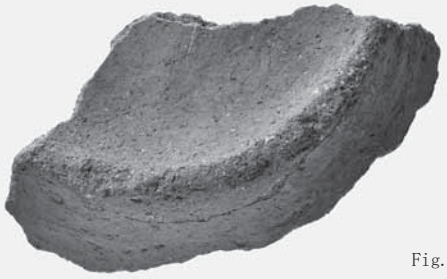


Fig. 19-2
（外底面）

3

Fig. 19-1

4

3．4．11 区 出土遺物

PL.17

Fig.45-7・8

1

1．12 区 出土遺物（縄文土器）

Fig.46-23

2

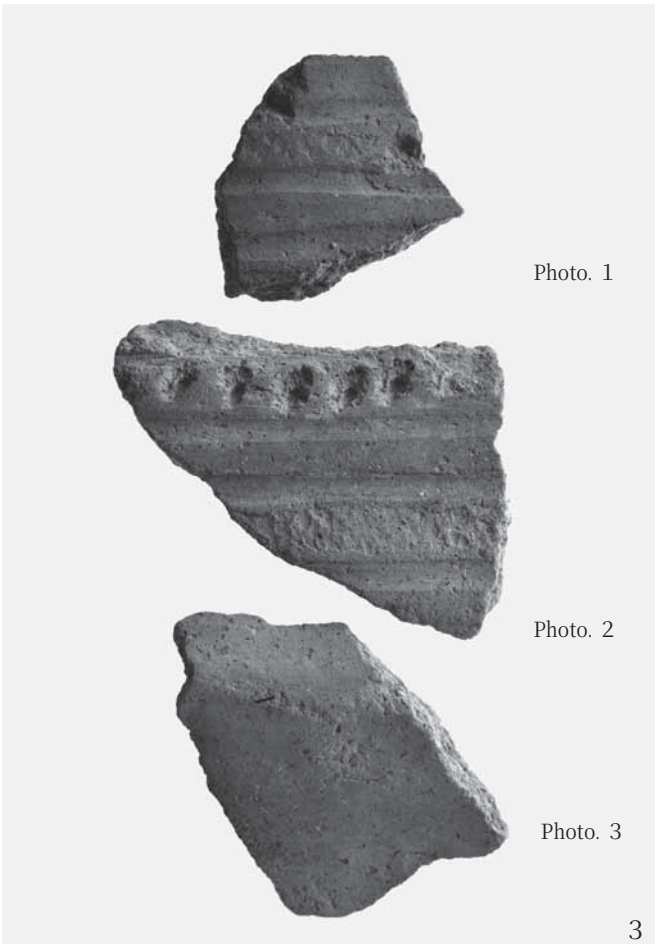


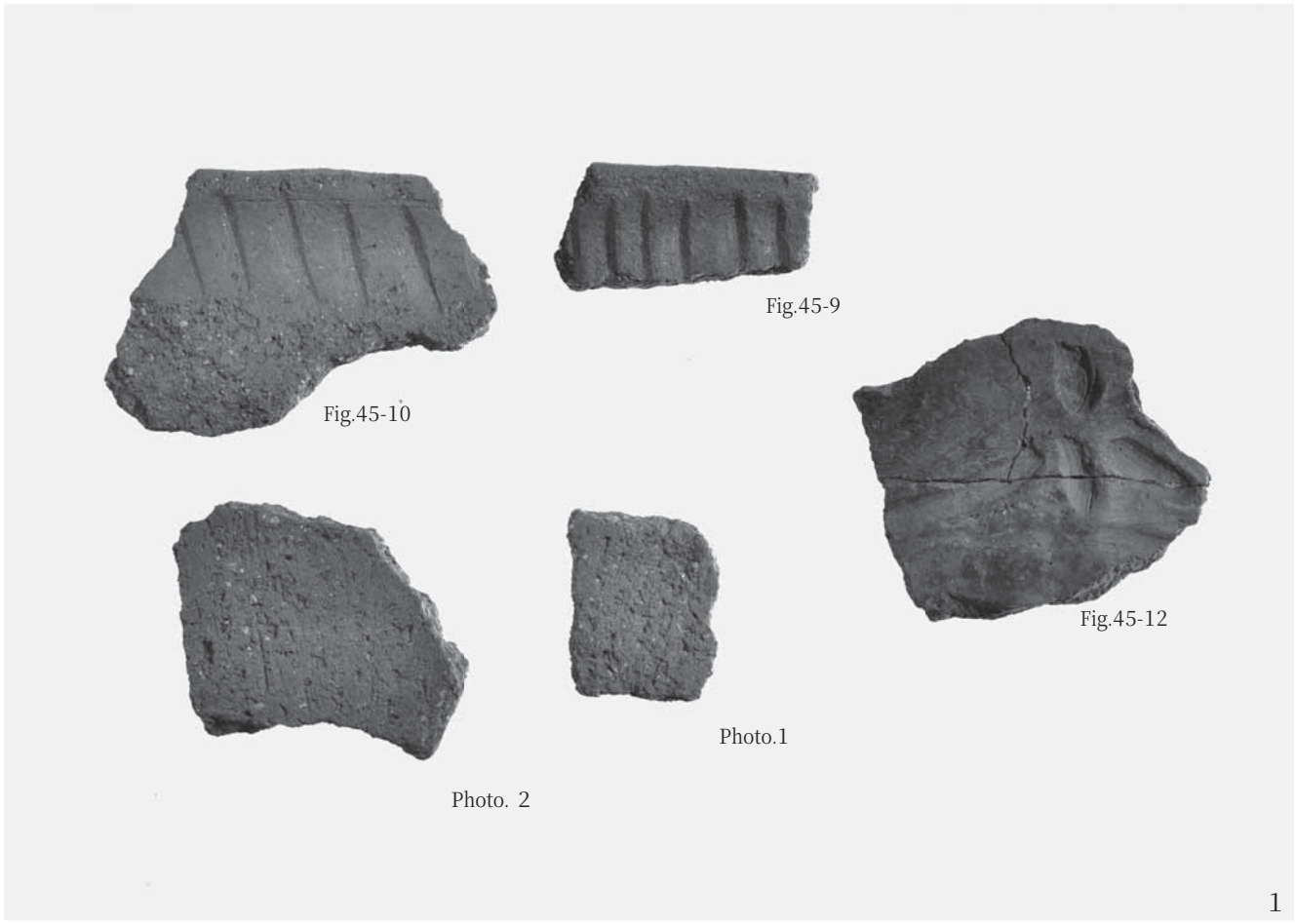
Photo. 1

Photo. 2

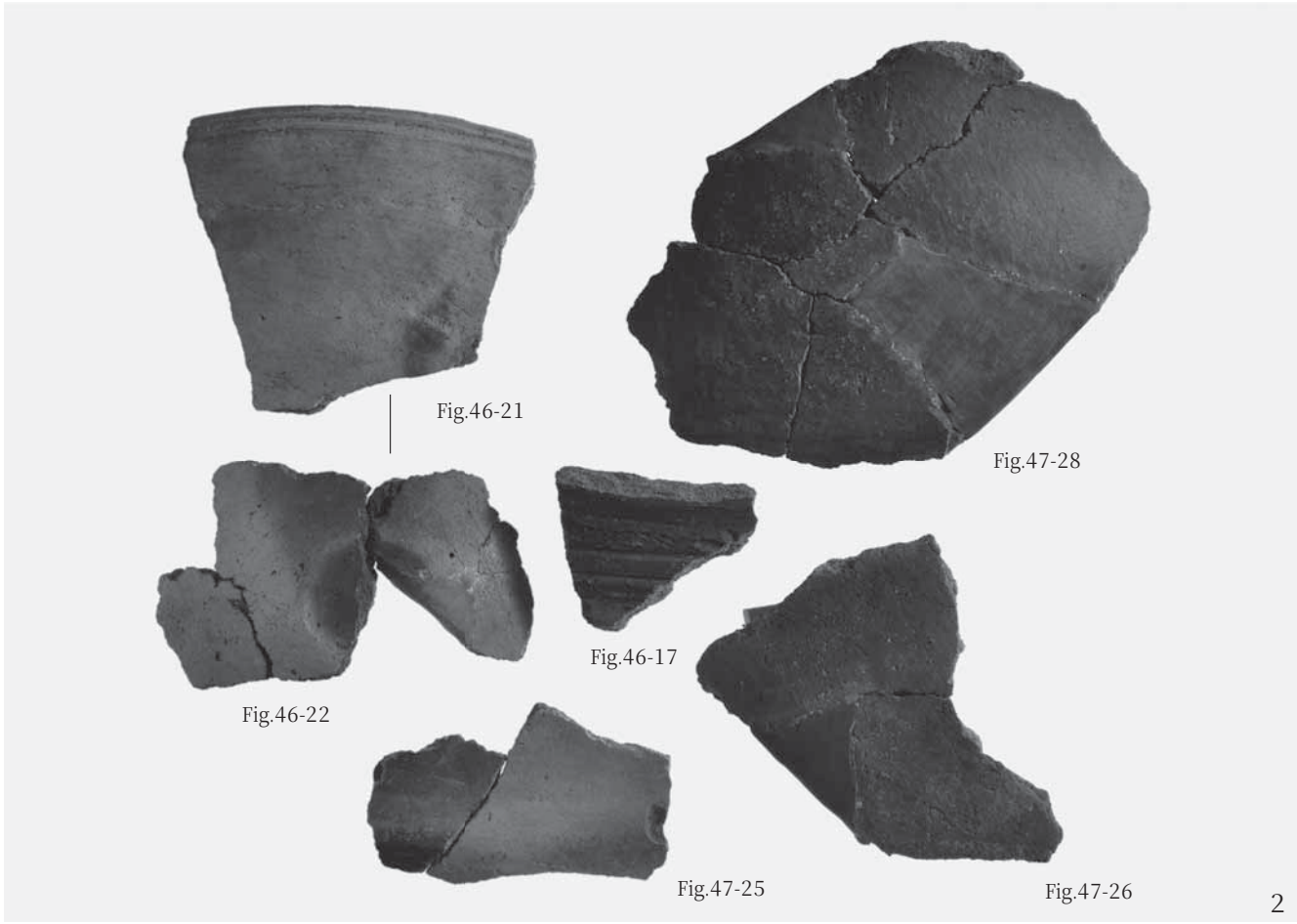
Photo. 3

3

2．3．12 区 出土遺物（縄文土器）



1． 12 区 出土遺物（縄文土器）



2． 12 区 出土遺物（縄文土器）

Fig. 46-20

Fig. 46-19

Fig. 46-16

Fig. 46-15

Photo. 1

Photo. 2

Fig. 46-14

1

1．12 区 出土遺物（縄文土器）

Fig. 48-33

Fig. 48-32

2

2．17 区 出土遺物（縄文土器）

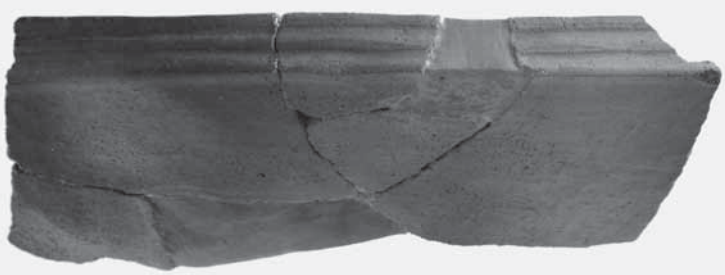


Fig. 48-31

Fig. 45-11

Fig48-29

Fig. 41-6

Fig. 48-30

Photo. 1

Fig. 45-13

1

1．17 区 出土遺物（縄文土器）

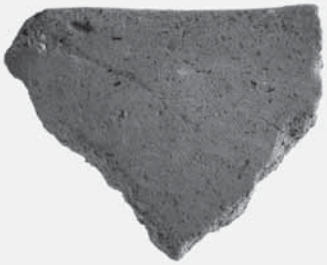


Photo. 2

Fig. 47-24

Fig. 47-27

2

2．12 区 区出土遺物（縄文土器）

Fig. 49-1-34

Fig. 49-1-35

Fig. 49-1-36

1. 12 区 出土遺物（弥生土器）

Fig. 49-1-38

Fig. 49-1-37

17 区 Fig. 49-1-39

1

1．12・17 区 出土遺物（弥生土器・土師器）

Fig. 49-2-45

Fig. 49-2-40

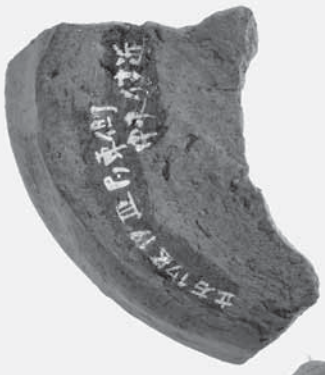


Fig. 49-2-44

Fig. 49-2-42

12 区 Fig. 49-2-43

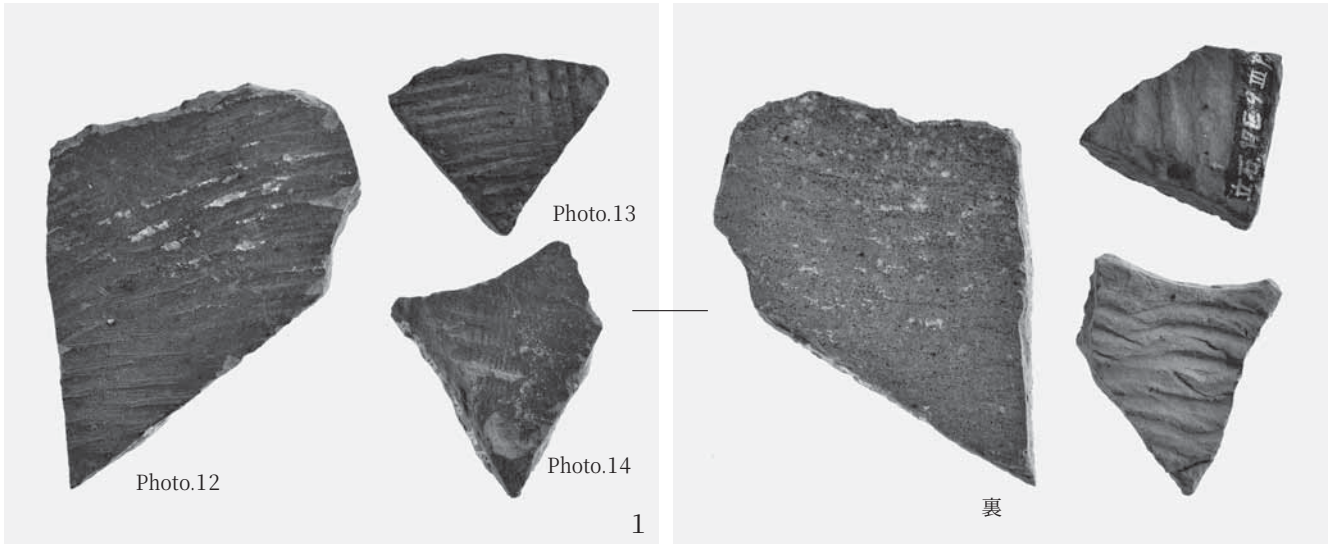
Photo. 1

12 区 Fig. 49-2-41

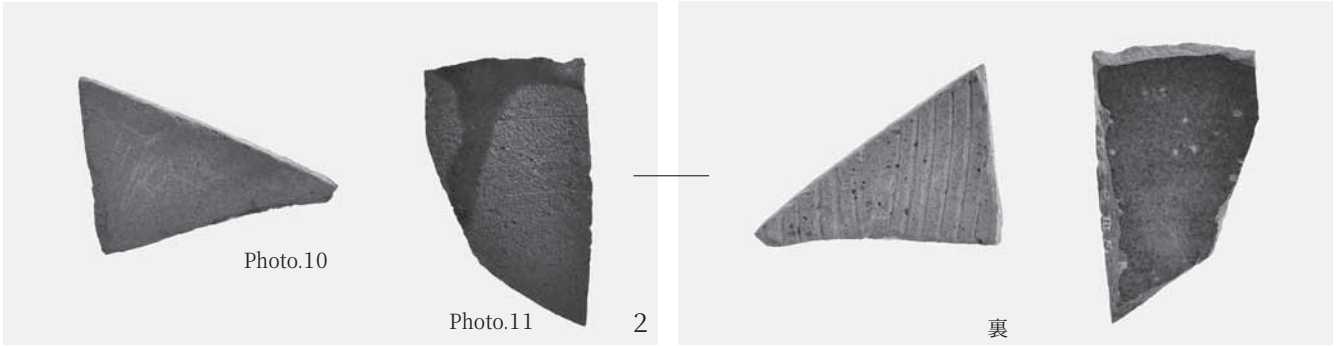
2

2．12・17 区 出土遺物（土師器・須恵器）

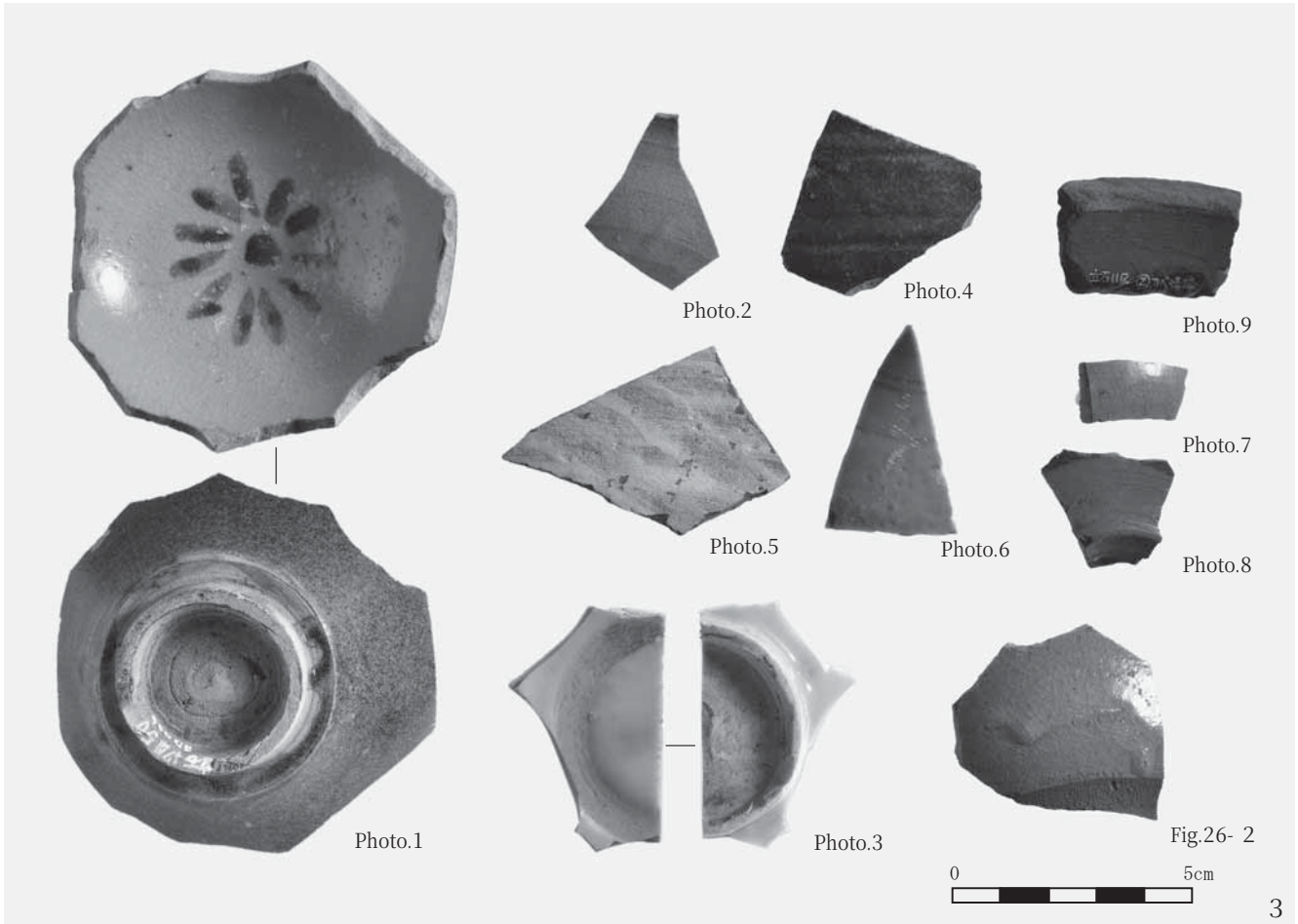
PL. 23



1． 17 区 出土遺物（須恵器）写真のみ



2． 17 区 出土遺物（陶器）写真のみ



3． 17 区 出土遺物（陶磁器）

報告書抄録

ふりがな	たていしいせきぐん
書名	立石遺跡群
副書名	九州縦貫自動車道北熊本スマートインターチェンジ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第　３３５　集
編著者名	亀田　学、秦　憲二、加藤　裕一
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	熊本県熊本市中央区水前寺６丁目 18 番１号　TEL.096-333-2706　FAX096-384-7220
発行年月日	2019 年３月 29 日
資料の保管場所	熊本県文化財資料室　〒 861-4215　熊本市南区城南町沈目 1667　℡.0964-28-4933

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号	Fig.5 参照				
				No.1　(6 区)				
たていしいせきぐん 立石遺跡群	くまもとしきたく 熊本市北区 あらきまちたていし 改寄町立石	熊本市北区 43	445 － 318	32 ° 53 ′ 47.12649″	130 ° 42 ′ 57.17933″	20170427 ～ 20170831	約 2,800 ㎡ (対象面積約 5,000 ㎡)	道路建設
				No.2　(11 区)				
				32 ° 53 ′ 48.42767″	130 ° 42 ′ 58.32961″			
				No.3　(12・17 区)				
				32 ° 53 ′ 48.09778″	130 ° 42 ′ 56.02181″			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
たていしいせきぐん 立石遺跡群	集落跡	縄文・古代 近世	土坑 円形周溝状遺構 溝	縄文土器、土製耳飾 土師器、須恵器、石器 〔角錐状石器(三稜尖頭器)、 石匙、石鏃等〕	―

要約

九州縦貫自動車道の調査で縄文時代の集落跡（土坑・竪穴建物に伴う硬化面等）が見つかっていた。今回の調査区は台地状の浅い谷地形ではあったが、縄文時代後晩期と推定される土坑群が見つかった。落とし穴状の遺構か貯蔵穴かの用途の断定は難しいが、調査区の東側、及び北西側に遺物・遺構があることから、縄文時代の集落の広がりが確認できた。

円形周溝状遺構は、伴う遺物がなく、時期・性格の詳細は不明であるが、類例によれば弥生時代後期の可能性が高く、集落の縁辺部に位置することもある場合がある。周辺の調査で弥生時代後期の竪穴建物を検出していること、調査区内で弥生時代後期後半の土器が出土していること、から考えて北東側に集落の弥生時代後期の集落が広がっていることが推測される。

調査区の南西側に駅家跡推定地の 240m 程の方形区画が存在する。
周辺の調査でそうした土地区画に伴う道路や溝が確認されているが、今回の調査ではその区画にほぼ沿うような耕作に伴う土地区画の溝が検出されたが、近世後期以降のものであることが確認された。しかしながら、逆に言えば、今回の調査区が浅い谷地形であることから考えると、方形区割の外側の谷地形の部分以外の周辺の区画が、古くから開発された可能性があると考えられる。

その周辺の土地区画がどこまでさかのぼれるか今後の周辺の調査に注目される。

2019 年 3 月 29 日発行

熊本県文化財調査報告　第 335 集
立石遺跡群

著作権所有　熊本市中央区水前寺六丁目 18 番 1 号
発行者　熊本県教育委員会
印刷所　社会福祉法人　熊本県コロニー協会
熊本市西区二本木三丁目 12 番 37 号

発 行 者：熊本県教育委員会
所　　属：教育総務局文化課
発行年度：平成 30 年度

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第３３５集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：立石遺跡群
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺６丁目 18 番１号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：西暦２０２０年４月１０日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/